

はない程の意味)を形成する例が殆どすべてであるが、本調査例は少なくとも調査範囲内では単独に検出されている。この解釈は種々の条件への考慮が必要であるので慎重を期す。したがってその性格は一応不明とし、岩手県中央部における類例の増加をまつ。もちろん縄文時代についての性格の想定と同様の想定が成りたちうることはいうまでもない。

柱穴が不明な点以外の遺構の構築法、カマド設定部位・方法などは他の類例のそれに共通するところが多い。

古代のその他の遺物(第3図7・8、図版4の1)。

- ㊦第I層その他から出土の土器類である。㊦土師器杯形ないし碗形……小破片なのでロクロ使用の有無は判然としない。直立気味の体部と外傾気味の底部をもつらしい。体部表裏両面にヨコナデ様のものが見られる。南半の南小泉Ⅱ式的な印象を与えないでもないが、確言できない。
- ㊧土師器甕形の底部……ロクロ不使用で裏面にハケメがある。底部表面に糊圧痕と思われるものがある。Fj 03 例に近い時代のものであろう。

3 中世と思われる遺物(第3図9・図版4の1)。

近世の溝の覆土中より出土の播鉢破片である。青灰色で須恵器のそれに極似た胎土と、日転糸切痕らしきものを有する。裏面に巾2cmの帯状の条線がある。一応中世のものともみなしておく。

4 明治時代と思われる遺溝と遺物(第8図・図版2の3・4、3、6)

㊦農業用水路と思われる溝……機能的には一本と思われるが、使用に二時期あると思われるので、一応二本(A₁とA₂溝)とみなす。Ib層上面に検出した。

(ア)A₁溝……調査域内での全長約100m、上縁巾2m、下底巾0.5m、深さ1.8m(検出面より)、上縁直下に段をもつが、断面の概形はいわゆる「箱葉研」形に近い。北東から南西方へ下がり、西に方向を転じ段丘崖に沿って進む。覆土は軟質で、少なくともその上半部には意図的な埋めたてを示すと思われる白黄色粘土ブロックが普遍的に存在する。A₂溝より新しい。

(イ)A₂溝……全長12m、巾2.3m、深さ1.2m、断面形態は巾広な「箱葉研」形に近い。覆土はたたきしめたように硬く、粘土ブロックは認められないが意図的な埋め戻しと思われる。A₁より古期である。

(ウ)出土遺物……覆土中より寛永通寶2、獣骨若干、砥石などが出土している。獣骨については後掲の鑑定結果を参照されたい。

(エ)年代・性格等……遺物などからして近世以降(明治時代)の用水路と思われ、とくに「岩手県管轄地誌第一号之二十五、川」の項に一部見られる「能堂溝(上厨川溝ともいう)」に該当する可能性が強い。

㊦その他の遺物(図版6の1、3～5)。I層出土の陶・磁器類である。黄瀬戸様のもの、鉄

紬のもの、染付風のものなど各種のものがある。これらの中には中世に上るもの、明治以降に下るものなど種々あるらしいが、小破片のため大別のみにとどめる。他に珪化木片も若干ある。

5 獣骨の鑑定結果について

用水路跡出土の獣骨のうち10点につき岩手大学農学部にて鑑定を依頼した。以下にその結果を掲げる。なお、都合上図版は掲げなかった。

○委託資料

1A	Gjブロック	粘土ブロック上位	1B ₁	Hj50	覆土中半	3B	''	''	6B	''	''
2A	''	'' 下位	1B ₂	''	''	4B	''	''			
3A ^a _b	''	'' 下位	2B	''	''	5B	''	''			

○盛岡市上厨川所在幅遺跡明治時代用水路跡覆土中出土獣骨鑑定結果

- 1A 前臼歯及び後臼歯に馬特有のエナメルヒダがあり、馬と判定した。馬の下顎骨前臼歯及び後臼歯である。第1後臼歯の前後の長さは23.0mmで、現代馬の 23.6 ± 1.31 とくらべて差がない。馬の切歯、第1切歯の幅は15.5mmで現代馬の 15.8 ± 1.88 とくらべて差がない。
- 2A 馬の上顎骨臼歯である。臼歯のエナメルヒダより馬と判定した。
- 3Aa 馬の上顎骨第2前臼歯である。1/3ほど内側が欠落している。臼歯のエナメルヒダより馬と判定した。この臼歯の前後の幅は26.1mmあり、現代馬の 28.6 ± 2.43 mmとくらべてやや小さい。
- 3Ab 馬の上顎骨第3前臼歯らしいが風化の度が進み確実な判定が困難である。
- 2B 馬の右下顎骨である。第1後臼歯の前後の長さは25.1mmで現代馬の 23.6 ± 1.31 mmよりやや大きい。大差はない。
- 3B 馬の右下顎骨である。第1後臼歯の前後の長さは27.3mmで現代馬の 23.6 ± 1.31 mmより大きい。
- 4B 馬の下顎骨下顎枝である。これは下顎切痕が浅く牛ではない。その他は上顎骨とその他の頭蓋骨の破片である。
- 5B 上顎骨臼歯である。エナメルヒダから馬と判定した。第1後臼歯の前後の長さは24.5mmで現代馬の 25.1 ± 2.54 mmと差がない。
- 6B 馬の右上顎骨である。臼歯のエナメルヒダより馬と判定した。第1後臼歯の前後の表さは24.3mmで、現代馬の 25.1 ± 2.54 mmとくらべて差がない。上顎骨口蓋突起の幅は41.5mmで、代表的現代馬の43.5mmとくらべて大差がない。

註 * 現代馬とあるのは岩手県において大正～昭和初期に得られた馬の頭蓋骨による。
** 平均値±標準偏差

岩手大学農学部獣医学科 兼 松 重 任

竹^{たけ}花^{はな}前^{まえ}遺跡

遺跡名：竹花前(略号 THM76)

遺跡所在地：盛岡市上鹿妻竹花前62,1 他

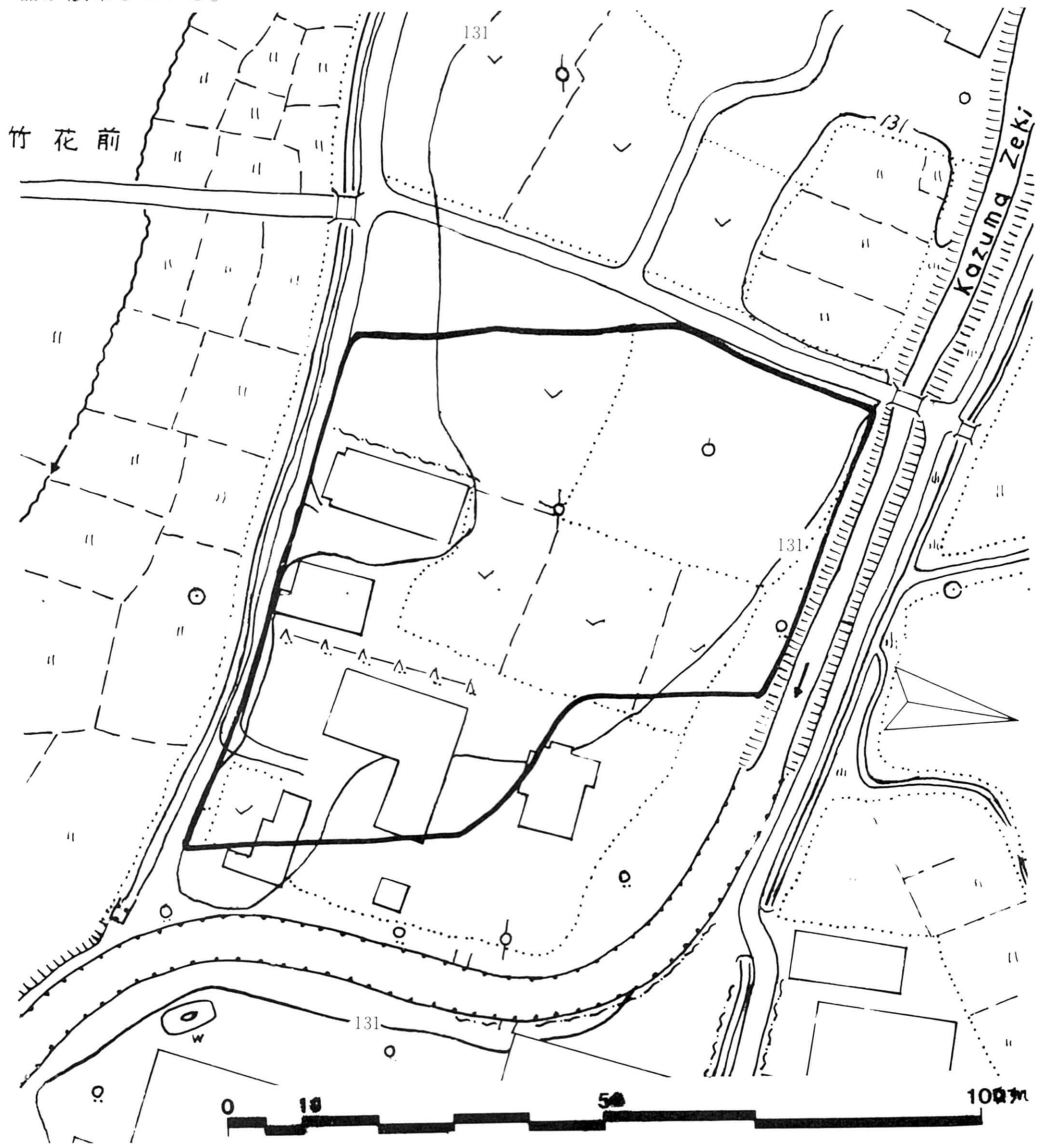
調査期間：昭和51年6月25日～10月23日

調査対象面積：4,400m²

発掘対象面積：4,400m²

I 遺跡の位置と環境

竹花前遺跡は、盛岡市上鹿妻竹花前62の1他に在る。盛岡市の南西端で、東北本線盛岡駅の南西約3.6 kmに所在する。穴口で、雫石川の水を取り入れた鹿妻幹線水路から分流した旧堰の南岸沿いにある。比高約1 mの南面する段丘の縁に立地し、標高約131.0mである。現状は、宅地、畑地、果樹園である。遺跡の範囲は、高速道路の西側に延びている。近接の遺跡としては、北約240 mに太田方八丁遺跡の南側外郭線があり、南約100 mの畑地、果樹園には土師器、須恵器が散布している。



第1図 地形図

II 調査の方法と経過

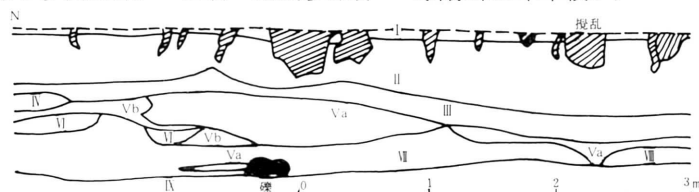
竹花前遺跡は、昭和47年度の分布調査以前に発見された遺跡で、盛岡市の遺跡台帳にも登録されている。

調査に当って、先ず遺構検出をするため、耕作土と、果樹の切り株を除去する作業をおこなった。耕作土は、調査地区を東西に1本、南北1本のベルトを残し、全面を除去した。果樹を抜根した結果、2棟の住居跡と、1基の焼土遺構が検出され、推積土の調査は困難かと思われた。次に中心杭STA660+60と、STA660+40を結ぶ直線を、南北基準線とし、660+60以北をA区、660+60から660+30までをB区、660+30以南をC区とし、これを更に3m×3mのグリッドに細分した。各地区は南北中心線より、西へ3m毎に03→30、東へ3m毎に50→80、北から3m毎にa→jの名称を付け、グリッド名とした。

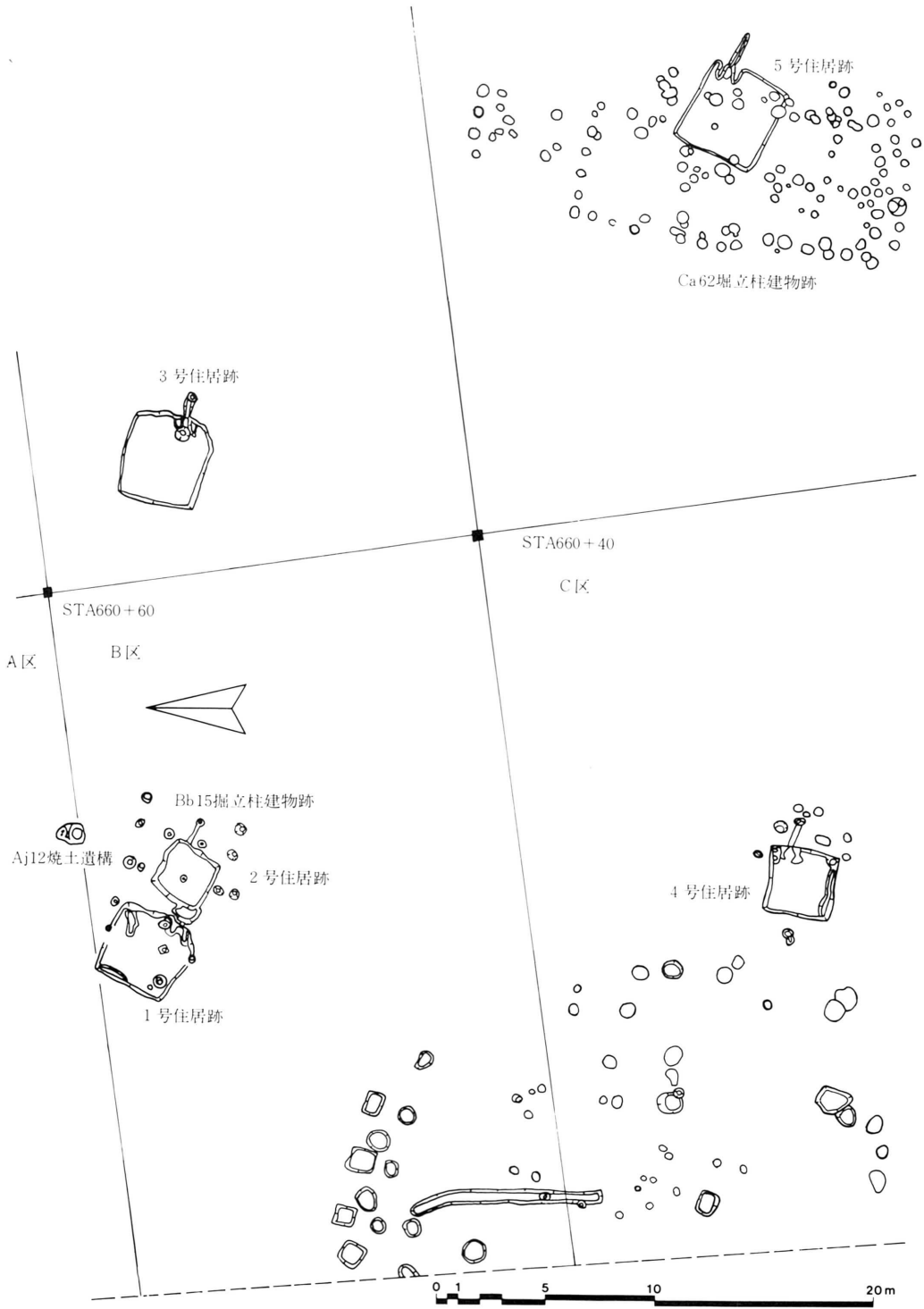
検出された遺構の精査については、推積土の状態を確認すると共に、各層位に包含される遺物を区分するために、住居跡については、畔を十字に残す4分法をとり、焼土遺構についても畔を十字に残す4分法をとり、柱穴やピットについては、推積土の状態と遺物区分に加えて、切り合いの状態と新旧関係を明らかにするため、ベルトを一本残す2分法をおこなった。遺構の実測については、1m間隔に釘を地面に打ち、必要に応じては20cm間隔に釘を地面に打ち、水糸を縦横に張って、平面図を作成した。レベルは、遺構の周辺に基準に合わせた杭を数本打って測定した。実測図はすべて20分の1の縮尺で作製し、遺構や遺物が重複する場合は同地点を何回かに分けて、別の図面を作製し、後日の整理段階で、その図面を合成した。

基本層序 調査地区の西端南寄りに、深堀りを行ない、表土下の推積土を調べた。表土は、調査地区全体を、十字に残した畔によって調べた。大別すると4層に分れる。1層は表土で、上下2層に分れる。2層はシルト質土層で、遺構の検出面である。3層は砂層で、9層に分れる。最下層は砂と礫の混合層である。

I層、10 Y R 3/2 黒褐色腐植土層。 II層、10 Y R 4/4 褐色シルト層。 III層、10 Y R 4/4 褐色細砂層。 IV層、10 Y R 4/4 褐色砂層 Va層混入。 Va層 粗砂層で、色調は各種各様の砂粒が混合し、所によりIII層混入する。 Vb層 粗砂層 色調は各種各様の砂粒混合。 VI層、粗砂層、色調は各種各様の砂粒混合。 VII層、10 Y R 4/4 褐色砂層。 VIII層、粗砂層、色調は各種各様の砂粒混合。 IX層 基底砂礫層 (斜線部は木草根か)



第2図 基本層序



第3図 遺構配置

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1 1号住居跡 (B a 21住)

(遺構の確認) 南北基準線より西へ14.52m～19.18 m。STA 660 + 60を通る南北基準線より北へ0.05 m～南へ4.70 mの地点、B a 21地区及びその周囲に、黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の褐色シルト層である。この住居跡は、直径70～80 cmのりんご樹の下にあり、ほとんど推積土は無く、攪乱層のため、遺構確認まで大部時間が経過した。

(重複、増改築) 大部分攪乱されており、住居跡の輪郭も不明な点が大部分である。又煙道の大部分と煙出全部も、ビット状の攪乱によって破壊されて、残存していない。

(平面形、方向) 東西約3.70 m、南北約3.60 mのほぼ方形で、東壁がやや張り出している。方向は、E - 29.0° - Sで、東南東方向を向く。

(推積土) 大部分が、りんご樹育成のため攪乱され、更に南北に堀方状の底面をもった攪乱層のため北壁と南壁の一部も失なわれており、自然推積土は壁沿いの一部に若干残されているだけである。

(床面) ほぼ平坦と思われるが、攪乱された跡や木根跡と思われるものもあり、明確でない箇所が多い。床面から壁への立上がりは、急角度で立ち上がり、壁高は約60 cmである。

(柱穴) なし

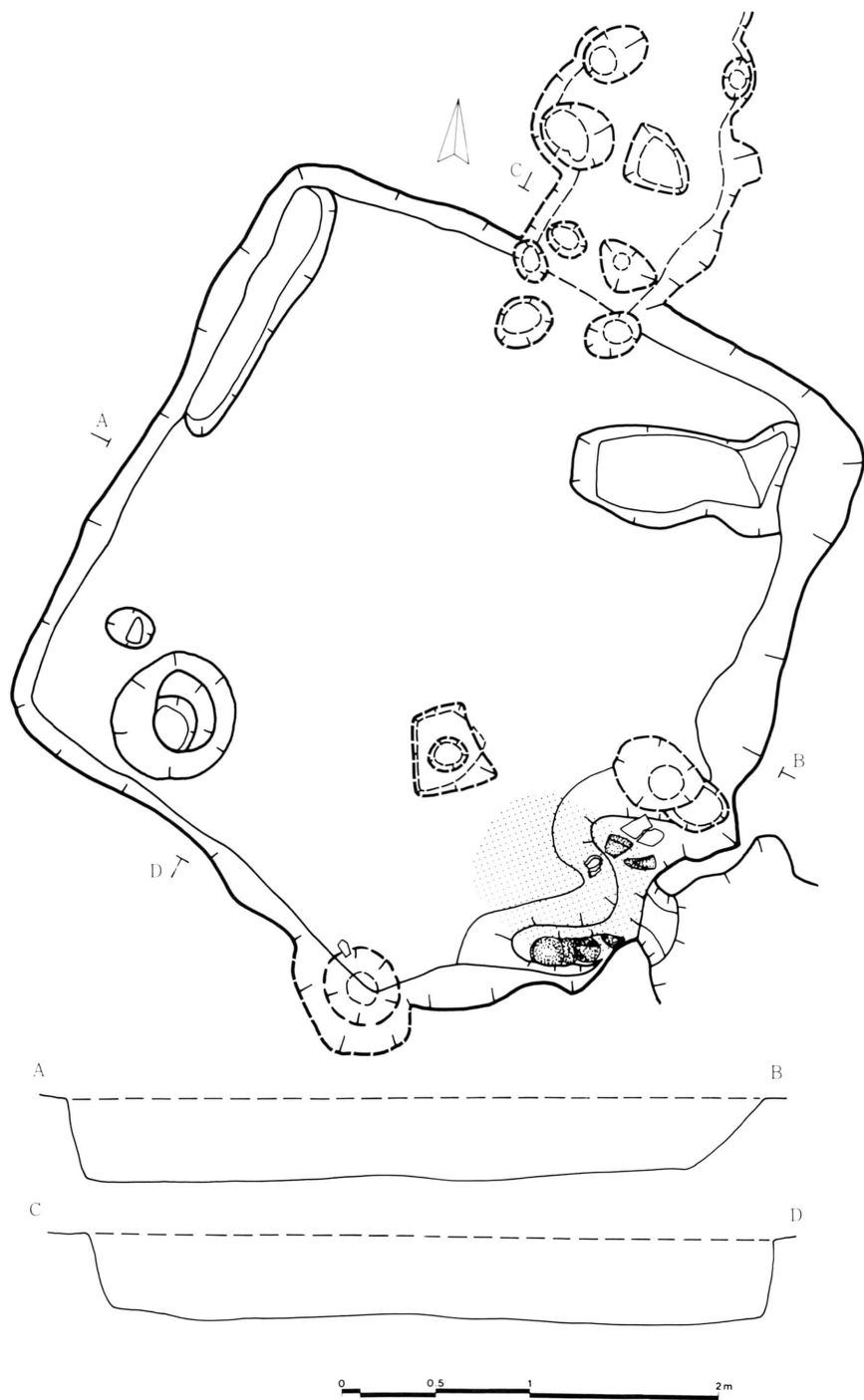
(周溝) 周溝と思われるものが、西壁北半にみられる。長さ約1.5 m。上場の巾30 cm、下場の巾20 cm、床面からの深さ約4 cm～8 cmである。

(かまど) 東壁南寄りに、壁を掘り込んでつくられている。燃焼部は、巾約40 cm、奥行約40 cmで、わずかに掘り凹められている。袖は南側に歪められた様な感じで、袖石のみが、右袖に2個、左袖に4個残存していた。煙道は東壁より20 cmの所まで残存し、先端は失なわれている。巾約26 cm、深さは検出面から13 cmである。煙出は失なわれている。

(貯蔵穴) 貯蔵穴状ビットは、かまどの北側、東壁中央下にあったと思われる痕跡がみられるが、東半分が堀立柱建物跡の柱穴と思われるビットで切られているため、不明である。他にも貯蔵穴状のビットと思われるものがあるが、住居跡に伴うものかどうか不明である。

(その他の施設) なし

(年代決定資料) 土師器、長胴の甕26点。小型の甕4点。内黒坏3点。須恵器、壺1点、器形不明で耳付の破片1点。坏A 3点。坏B 11点が出土した。長胴の甕は、頸部無段で、口縁部の短いものが多い。又木葉底で、外側に張り出さない底部1点と、外底部に刷毛目調整をしたもの1点がある。小型甕は、長胴甕と同一成形技法のものと、ロクロなどで成形無調整のものがある。坏類はみな回転糸切である。Aは灰色、Bは橙色で、共に無調整である。



第4图 1号住居跡(Ba21住)

出土遺物

土師器

長胴甕（5図1～4）完成品は無く、小破片で計測不能である。1は、口縁部 $\frac{1}{8}$ 以下と、体上半部残存で、口縁部はかなり外反し、口端は薄い。口縁部高さは1.3 cmと低い。体壁はかなり丸みをもち、わずかな凸凹がみられる。口縁部体部共、内外面横なでで薄い。胎土軟質砂粒多く含む、色調は浅黄橙色、焼成不良で、かまど燃焼部出土である。2は、口縁部若干、体上部 $\frac{1}{8}$ 残存で、口縁部はかなり外反し、口端は丸みをもつ。体壁は直線的である。口縁部は内外面共横なで、体部は内外面共横なで後、一部上下なでがある。胎部は、口縁部の厚さ4～5 mm 体壁は7～8 mmである。胎土やや軟質砂粒若干含む。色調は浅黄橙色。焼成はやや不良で、かまど燃焼部出土である。3は、口縁部、体上部 $\frac{1}{8}$ 以下残存で、口縁部下半はわずかに外反し、口端部は急角度に外反し、丸みをもつ、体壁はかはり凸凹があり、やや丸みをもつ。口縁部は横なで、体部は、外面が縦に、内面は横に刷毛目が施される。胎土やや軟質砂粒多い。色調はにぶい赤褐色。焼成はやや不良で、かまど燃焼部より出土である。4は、口縁部 $\frac{1}{8}$ 、体上部 $\frac{1}{8}$ 残存で、口縁部は、粘土帯を上から圧したような成形で、内外側に張り出し、口端部は平坦である。外体面は縦にへら削り、内面は縦にへらなである。歪み凸凹が強い。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は黒褐色～にぶい橙色。焼成は不良で、かまど燃焼部出土である。

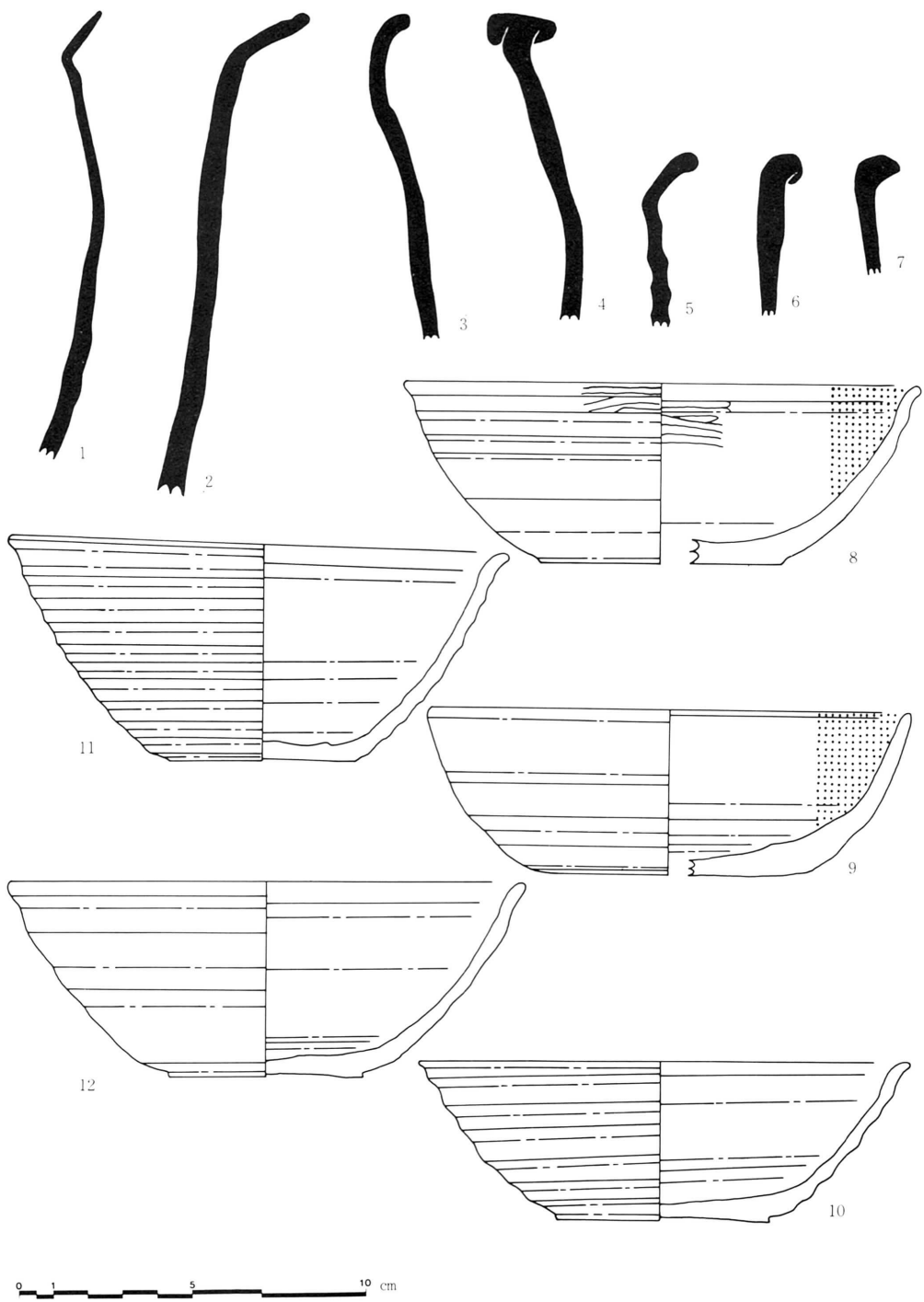
小型甕（5図5～7）4点中3点が口縁部、1点が体部の破片である。5は口縁部、体上半部若干の破片で、口縁部はかなり外反し、口端は丸みをもつ、体上半はロクロなで成形無調整で、壁面にかなりの凸凹がある。胎土軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良である。6と7は、口縁部はやや外反し、口端は薄くなる小破片である。

内黒杯（5図8・9）8は、口縁部・体部 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{8}$ 残存で、口径は推定約15 cm。器高5.1 cm。底径約6.9 cm。口縁部はやや外反し、体壁は丸みをもちかなり外傾（約 38° ）する。内面と口縁部外面に磨きがみられる。黒色処理は消滅している。9は、口・体・底共 $\frac{1}{8}$ 以下残存で、推定口径約14 cm、器高4.8 cm。底径約8.4 cm、口縁部は直立し、口端は丸い。ロクロなで成形無調整回転糸切で、内面磨き、黒色処理、外底面の一部に黒斑がある。体壁は内彎し、外傾度は約 30° である。

須恵器 壺 体下半 $\frac{1}{4}$ 、底部若干残存で、外体面下端にへら削りがみられる。

坏A、3点中1点（5図10）は、口・体・底 $\frac{3}{4}$ 残存で、口径14.2 cm、器高4.6～4.7 cm、底径6.2 cm、外傾度 42.0° である。口縁部はやや外反し、口端は薄くなる。胎土硬質、色調灰色、焼成やや良好である。

坏B、（5図11・12）11は、ほぼ完成品で、口径14.4 cm、器高6.0～6.5 cm。底径5.2 cm。外傾度 36.0° で、口縁部はやや外反し、口端は丸い。体壁はわずかに丸みがある。12は、口・



第5图 1号住居跡出土遺物

体・底 $\frac{1}{4}$ 残存で、口径約15cm。器高5.6cm、底径5.3cm、外傾度は40.0°である。両者共橙色、焼成不良である。

2 2号住居跡 (B b 15住)

(遺構の確認) 南北基準線より西へ11.99m～15.4m。東西基準より南へ2.99m～6.22mの地点、B b 15地区及びその周囲に黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、表土下の褐色シルト層である。1号住居跡の東壁と2号住居跡の西壁の間は、約70cmである。

(重複、増改築) この住居跡と重複して、堀立柱建物跡が確認された。南西隅には、ピット状の攪乱があり、遺物が出土し、1、2号住居跡両者の遺物に接合するものがみられる。

(平面形、方向) 東西2.6m。南北2.5mの方形で、主軸はE-30°-Sで、東南東を向く。

(推積土) 4層に分れるが、堀立柱建物跡の柱穴、りんご樹の木根痕がみられる。

1層 10 Y R 2/1 黒色腐植土層 指圧痕ややつく、粘性なし、シルト質土を少量含む。

2層 10 Y R 2/1 黒色腐植土層 指圧痕ややつく、粘性なし、粒状のシルトを含む。

3層 10 Y R 2/1 黒色腐植土層 指圧痕つく、粘性なし、水気を多く含む。

4層 10 Y R 2/2 黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性あり、焼土、遺物、礫を含む。

(床面) ほぼ平坦で、わずかに南東方向が低くなる。床面から壁への立ち上がりは、やや丸みを持ち、壁面はかなり急角度の所もあるが、一様ではない。壁高は32～40cmである。

床面ほぼ中央に、堀立柱建物跡の柱穴が1基みられる。柱穴の底面は明確でないが、底面の上に礫を4個置き、その上に柱を建てたと思われる。柱穴の埋土は、住居跡の検出面に、はっきりとした輪郭がみられ、住居跡の推積土セクション図(第6図C-D)にも明瞭にみられ、住居跡より、堀立柱建物跡の方が新しいことを示している。

(柱穴) なし

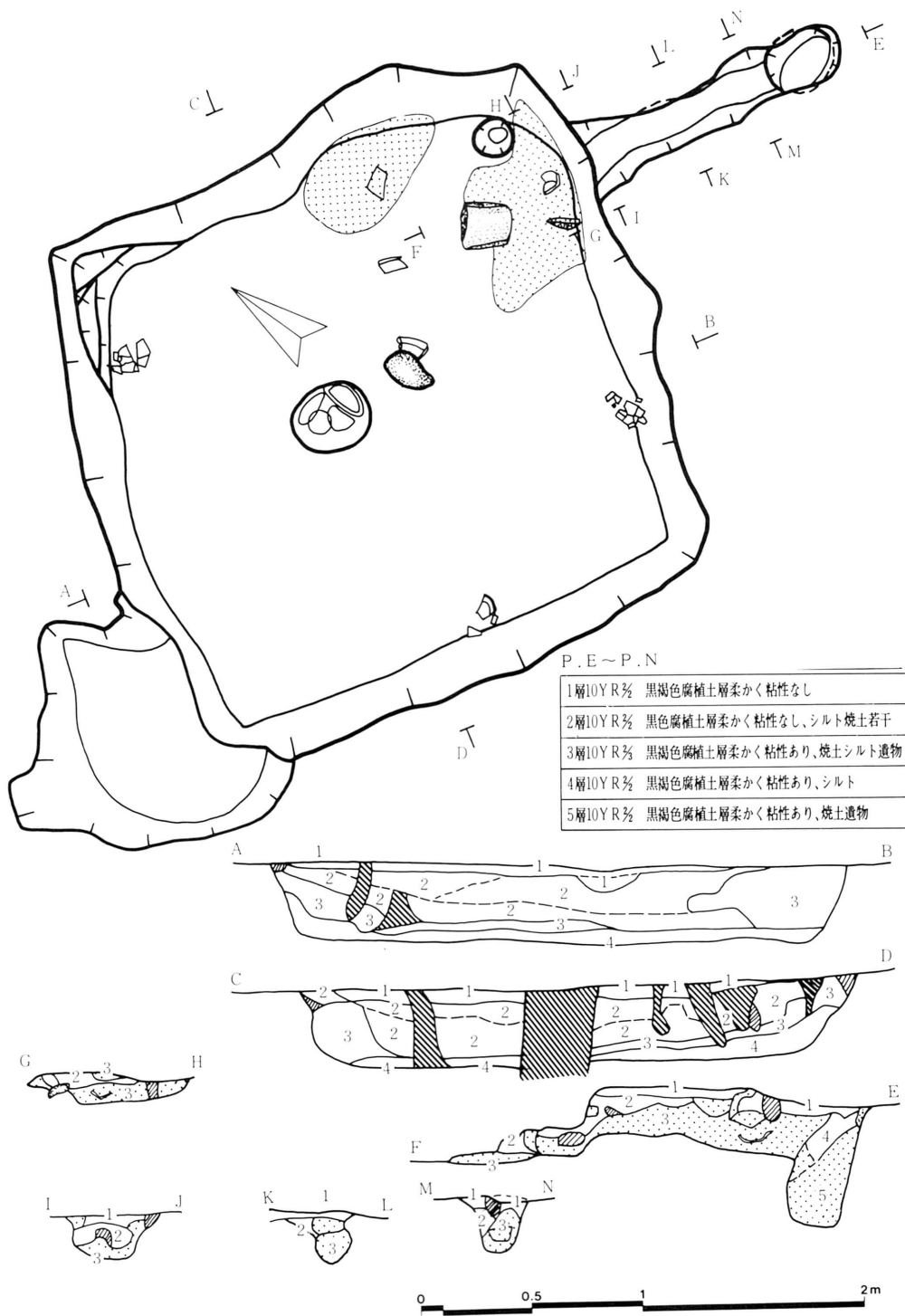
(周溝) なし

(かまど) 東壁北端にあり、両袖は失なわれてしまっている。燃焼部は、わずかに掘り凹められているが、輪郭は明確ではない。支脚か袖に使用したと思われる礫が2個と、甕の体下半と底部の破片が1点、残存していた。煙道は、長さ87.0cm、上場の巾20～35cm。下場の巾約15.0cm。深さは検出面から22～30.0cmである。煙出は上場径25～30.0cm。下場径20～25.0cm。深さは約55.0cmで、煙道、煙出共に焼土、遺物を含んでいる。

(貯蔵穴) 検出されなかったが、北壁やや東寄下に、焼土を埋め込んだ、浅い掘り込みがみられた。輪郭ははっきりせず、深さも2～3cmで、焼土の範囲は、東西約70cm、南北約40cmの卵形の様である。

(その他の施設) なし

(年代決定資料) 土師器、長胴甕15点。小型甕7点。内黒坏5点。須恵器、壺2点、坏B 14



第6図 2号住居跡(Bb15住)

点、高台坏1点、帯金具状鉄製品1点、角釘1点、緑釉陶器4片1個体が出土した。坏類は、回転糸切で、底径が小さい。緑釉陶器は、11世紀と鑑定されている。

出土遺物

土師器

長胴甕（7図1・2）1は、口縁部 $\frac{1}{6}$ 、体上半 $\frac{1}{6}$ 残存で、推定口径約27cm。口縁部高さ2.0cmである。口縁部はかなり外反し、口端は上に強く挽き出されている。外体面は、叩き目を施して成形した後、横なで調整によって、叩き目を消している。体下半はほとんど欠損しているが、横なで、へら削り等の痕跡が若干残っている。内面は、横なで成形であるが、磨滅が著しい。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は橙色、焼成不良で、煙道と床面中央から出土した。2は、口縁部 $\frac{1}{6}$ 、体上半 $\frac{1}{6}$ 残存で、推定口径約21cm、口縁部高さ1.3cmである。口縁部は短く、かなり外反し、口端は丸みをもつ、口・体共に横なで成形である。胎土は軟質砂粒多く含む。色調はにぶい橙色、焼成不良で、かまど付近床面上出土である。他に刷毛目痕が体部内外面と外底面にあるもの、外面上下へらなで調整のもの、内面横に刷毛目のある破片等が出土した。

小型甕、7点の内3点は、外体面に縦のへらなで調整があり、2点は、ロクロなで成形無調整のようである。他の2点は小破片で、磨滅著しく成形技法は不明である。口縁部3点の内、2点は口端が丸く、1点は上に挽き出されている。他は体部破片である。

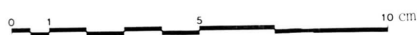
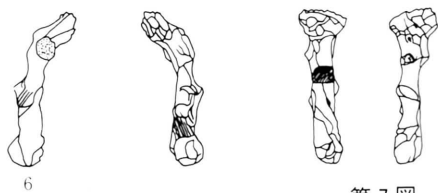
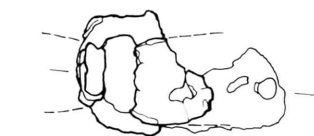
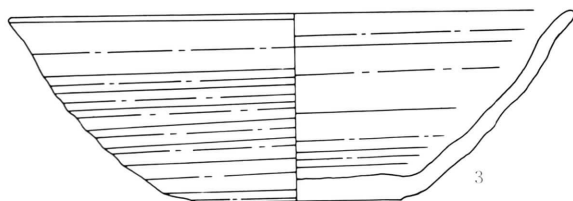
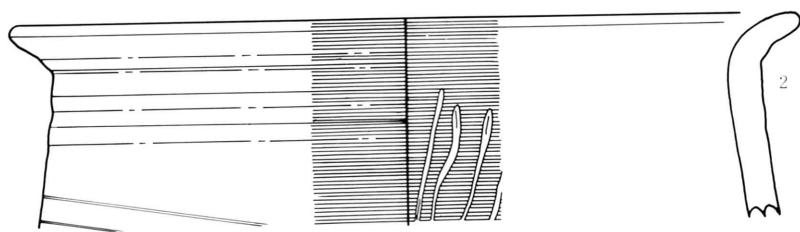
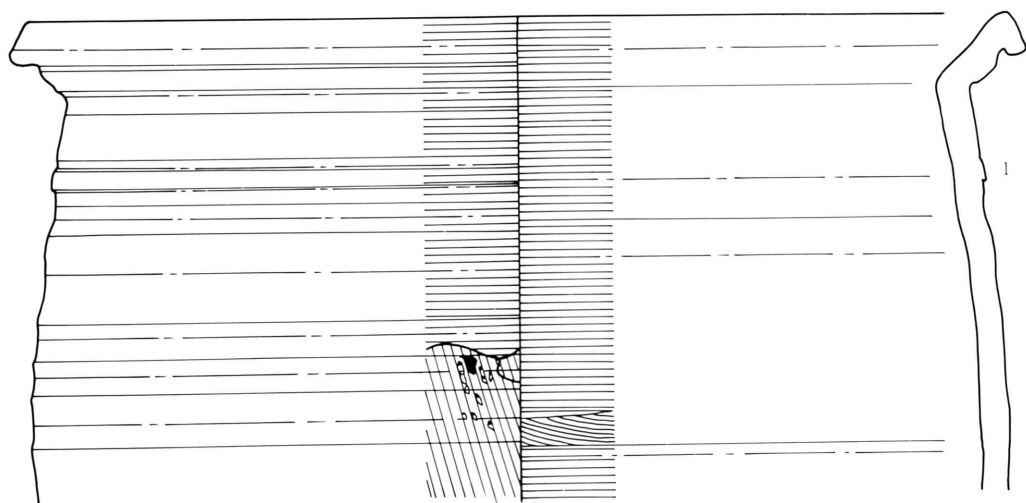
内黒坏、2点が口縁部、1点が体下半、2点が底部破片である。口縁部破片の内1点は、口端部外面にも磨き、黒色処理がみられる。底部2点は、回転糸切である。

須恵器

壺 2点中1点は、やや大型の破片3で、叩き目を消してへらなで、へら削り調整のみられるものである。他の1点は小型で、口端が上に挽き出されている。

坏B（7図3）は、口縁部 $\frac{3}{4}$ 、体部 $\frac{3}{4}$ 、底部全部残存で、口径15.1cm、器高5.0cm、底径約5.0cmである。口縁部はやや外反し、口端は丸みをもつ。体壁はやや丸みをもち、かなり外傾（ 43.5° ）する。体下端から底部外周は丸みがあり境が明瞭でない。外底面は平担である。胎土軟質粒砂粒を多く含み、表面に露出した砂粒が剥離している個所が多くみられる。色調はにぶい橙色、焼成は不良で北西コーナ付近出土である。他の13点は、何れも $\frac{1}{8}$ 以下残存の小破片である。

高台坏（7図4）はほぼ完形品で、口径15～15.3cm。器高5.1～5.8cm。底径6.1cm。高台部高さ1.0cm、壘付径7.4cmで、かなり歪みがある。口縁部は外反し、口端は丸みをもつ。体壁は、わずかに丸みをもち、かなり外傾（外傾度 41.0° ）する。外底面は回転糸切である。坏Bに高台を付けたものと思われる。胎土軟質粗砂粒を若干含む。色調は浅黄橙色、焼成不良で煙道出土である。



第 7 图 2 号住居跡出土遺物

帯金具様鉄製品（7図5）環状部に帯止と思われる金具が両端に付いている。片側は大部分他の側は残痕若干残存で、鋸が2個横に付いている。

釘（7図6）長さ4.1cm。巾6mm。厚さ5mm。先端が欠損している。頸部は屈曲する。

緑釉陶器、口縁部と体部の破片で、体部に段が付いている。内外面に緑釉が付着する。

3 3号住居跡（B b 53住）

（遺構の確認）南北基準線より東へ2.89m～7.58m。660+60を東西に直行する東西基準線より南へ3.80m～8.41mの地点、B b 53地区及びその周囲に、黒褐色の落込みを確認した。2号住居跡東壁と、3号住居跡西壁の間は、約15.0mである。遺構確認面は表土下の褐色シルト層である。

（重複・増改築）なし

（平面形・方向）東西約3.75m。南北4.20mのほぼ方形で、東壁は1号住居跡と同様やや張り出した形で、南東コーナーは丸みをもち、はっきりした角度をもたない。主軸方向は、E-14°-Sで、ほぼ東を向く。

（推積土）5層に分かれるが、ここも攪乱された所が多い。

1層 10 Y R 2/2 黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく、粘性なし。

2層 10 Y R 2/2 黒褐色腐植土層 指圧痕つく、粘性ややあり、焼土・炭化物・礫・遺物シルト若干を含む。

3層 10 Y R 2/3 黒褐色腐植土 シルト混合層 指圧痕つく、粘性あり、炭化物・焼土若干

4層 10 Y R 2/3 黒褐色腐植土 シルト混合層 指圧痕ややつく、粘性あり、炭化物若干

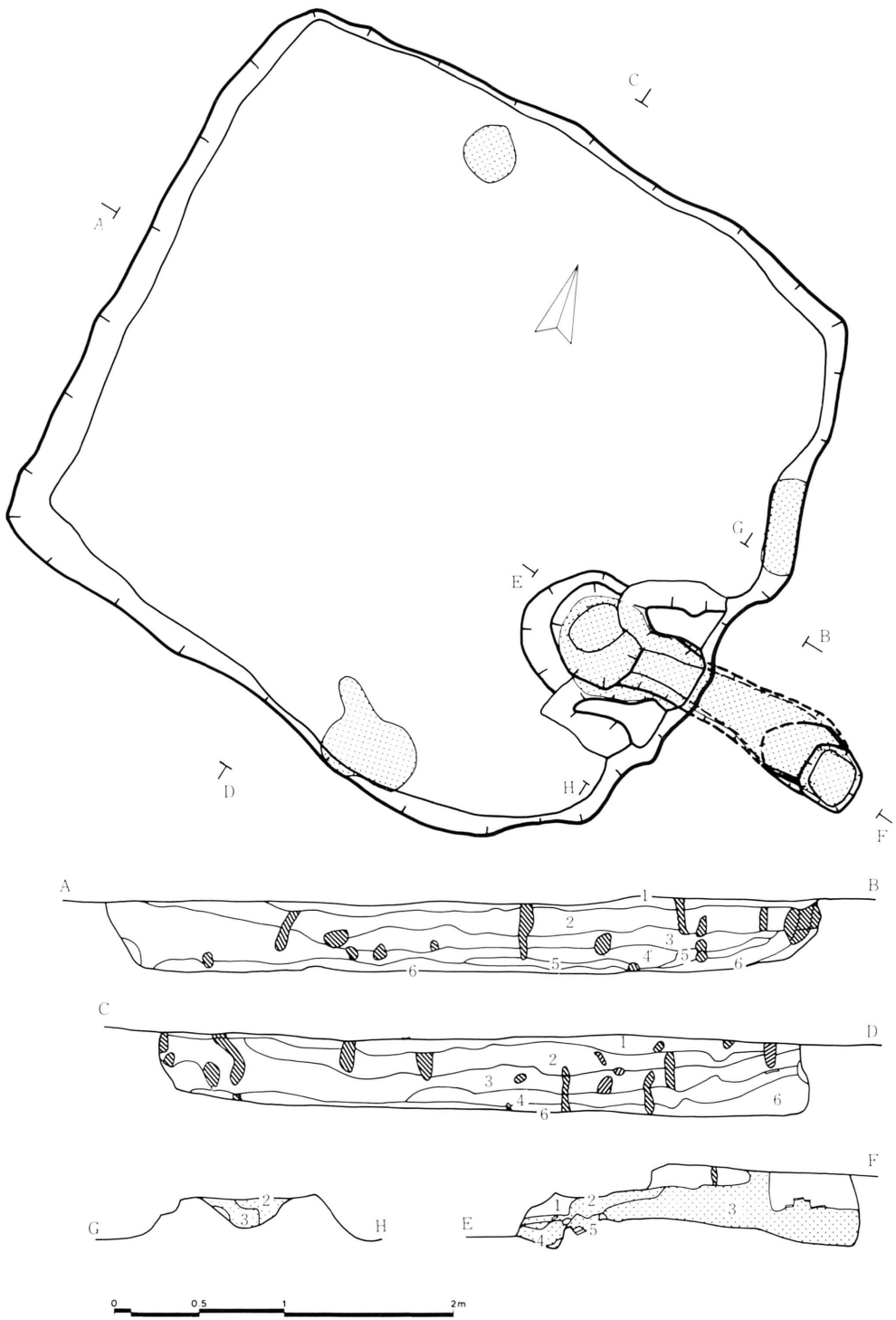
5層 10 Y R 3/3 暗褐色腐植土 シルト混合層 指圧痕ややつく、粘性あり、炭化物若干

（床面）ほぼ平坦で、南西側にわずかに傾斜する。床面から壁への立上がりは丸みをもち、境がはっきりしない。北壁南壁はほぼ垂直で、東壁、西壁はやや緩やかである。壁高は34～40cmである。又北壁下第2層、東壁北寄り、南壁東寄下第5層に、焼土が推積していた。

（柱穴）なし

（周溝）なし

（かまど）東壁南寄りに、壁を掘り込んでつくられている。燃烧部は、巾約30cm。奥行約90cmで、焚口付近に、直径56～60、深さ約5cmの、ほぼ円形で浅い掘り込みがみられる。燃烧部は奥に行くほど徐々に高くなる。両袖は残存し、左（北）袖は、上場長さ40cm、巾28cm。下場長さ56cm、巾20～43cm。高さは床面から先端で15cm、壁際で32cmである。右（南）袖は、上場長さ50cm、巾10～28cm。下場長さ63cm、巾28～50cm、高さは先端で25cm、壁際で40cmである。煙道は削り貫きで、わずかに煙出寄りが下がる。長さ約70cm、巾30～40cm、深さは20～27cmで、かなり焼土が推積し、周囲も焼けている。焼土には遺物をかなり包含している。煙出は上場径



第 8 图 3 号住居跡(Bb53住)

37～50cmの楕円形で、深さは42cm、下場は煙道との境がない。遺物主に土師器甕が包含されていた。

(貯蔵穴) 確認出来なかったが、右袖の南側、南東隅床面上に多量の坏類が出土した。

(その他の施設) なし

(年代決定資料) 土師器、長胴甕12点+26片。小型甕7点。内黒坏4点。須恵器、長頸壺2点、坏A 11点、坏B 13点、刀子1点が出土した。坏類はみな回転糸切りである。

出土遺物

土師器

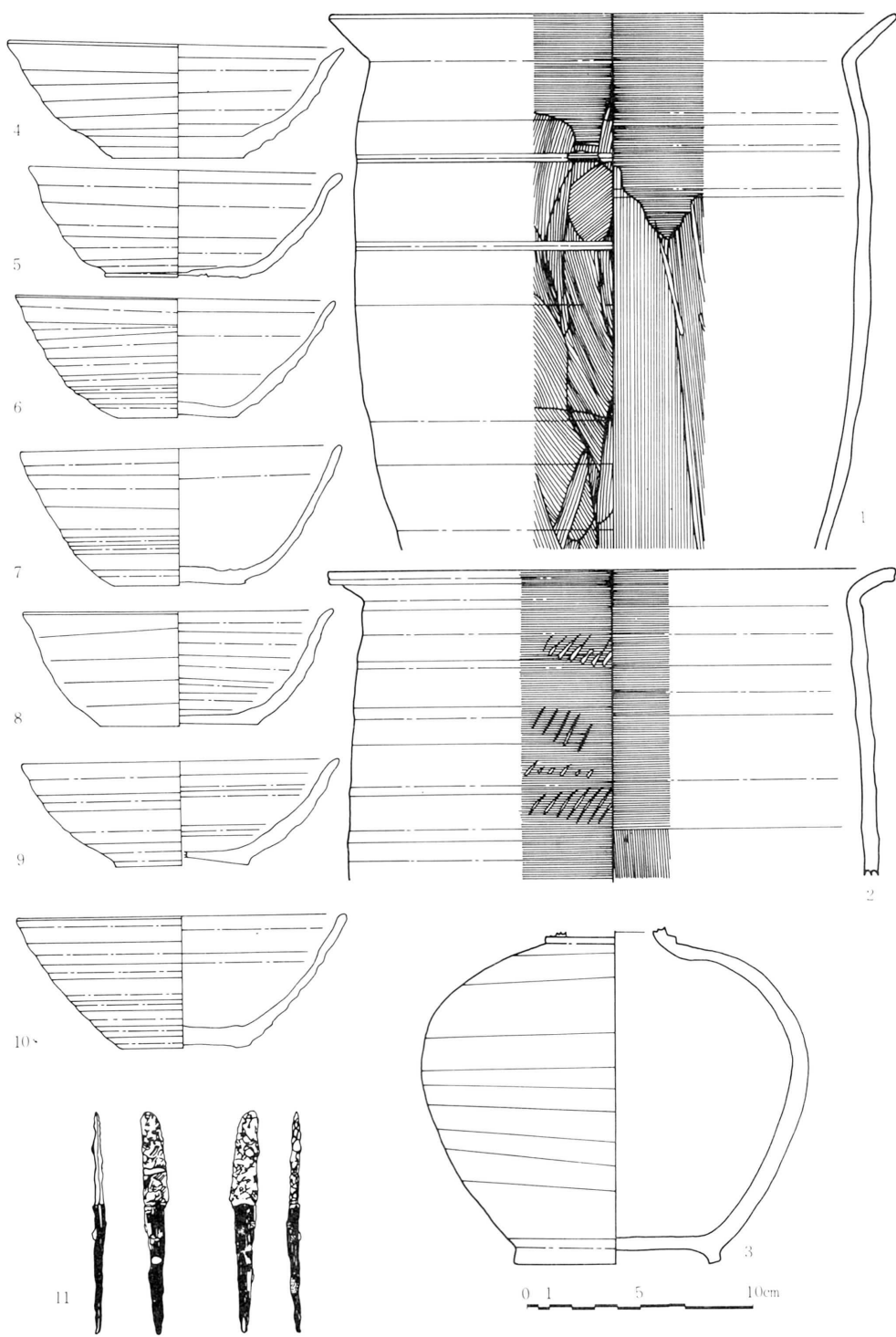
長胴甕(9図1・2) 1は、口縁部 $\frac{1}{2}$ 、体上半 $\frac{1}{2}$ 残存で、推定口径約25cm。口縁部高さ2.6cm。頸部径約21.4cm。体部最大径約22.7cmである。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。体壁は、肩部に若干丸みがみられる以外直線的である。外体面は上端が横なで、頸部の下2cmからへら削り調整痕がある。内面は上端が横なで、大部分が上下へらなでである。口縁部から体部に一部煤が付着し、2次焼成を受けている。胎土軟質粗砂粒をかなり含む、色調は浅黄橙色～灰褐色、焼成はやや不良で、かまどの両袖と煙出から出土した。2は、口縁部 $\frac{1}{4}$ 、体上半部 $\frac{1}{4}$ 残存で、推定口径約25cm、口縁部高さ1.5cm。頸部径約21.8cm。残存体部最大径23.4cmである。口縁部は、かなり外反し、口端部は上に挽き出されている。口縁部・体部共外面に叩き目が間隔無く並び、その後横なで調整を施す。内面は上半が横、下半が縦にへらなでしている。内外面の一部に煤が付着している。胎土軟質粗砂粒を多く含む。色調は浅黄橙色～灰褐色、焼成はやや不良で、かまど袖と煙出から出土した。その他内外面に刷毛目痕のあるもの大部分。へら削り、へらなでのもの若干がみられる。

小型甕、7点共小破片で実測不能である。口縁の破片2で、口端が丸みをもつ、体部の破片5点中1点は内面に刷毛目痕があり、他の2点はロクロなで無調整、他の1点は不明である。

内黒坏、1点は体壁にかなり丸みがみられ、口端部外面も、磨き黒色処理である。1点は底径約5.6cmで、外底面は回転糸切、黒斑がある。1点は、口縁部外面が黒磨処理で、磨きは不明である。1点は磨滅著しく、内面磨き等不明である。体下半のへら削り調整は無い。

須恵器

長頸壺(9図3) 体・底部全部残存で、口・頸部が欠損している。頸部下端の径4.8cm～5.5cm。頸部下端までの高さ14.5cm、体部最大径17.1cm。高台下端径9.2cm、高台部高さ0.6cmである。頸部と肩の境に隆帯がある。肩部に若干の灰釉が付着する。体部下半はへら削り後、横なで調整である。外底面に放射状の調整痕がある。他の1点は、口縁部若干の破片で、3と同一個体かどうか不明で、胎土・色調・焼成は類似している。口端が上に強く挽き出され、推定口径約12.0cmである。



第9图 3号住居跡出土遺物

坏A(9図4・5)4は、口縁部 $\frac{3}{5}$ 、他は全部残存で、口径14.8~15.0cm。器高4.8~5.2cm。底径5.8cm。外傾度 43° である。口縁部は外反し、口端は薄くなる。体壁はかなり丸みをもつ。5は、口・体 $\frac{3}{5}$ 、底部全残存で、口縁部はかなり外反し、口端は丸い。体壁はかなり丸みをもつ。

坏B(9図6~10)6は、口径14.1cm。器高5.1~5.4cm。底径5.1cm。外傾度 40° 。口縁部は直線的で、口端は丸い。体壁はやや丸みをもつ。7は、口径14.2cm。器高5.9~6.1cm。底径5.8~6.1cm。外傾度 34.5° 。口縁部は直線的で、口端部は丸みをもつ。体壁はわずかに丸い碗形である。8は、口径13.6cm。器高5.1cm。底径6.9cm。外傾度 38.5° 。口縁部・体部共直線的で、口端部は薄くなる。9は、口径約14cm。器高5.8cm。底径約5.4cm。外傾度 41° である。口縁部はやや外反し、口端は薄くなる。体壁はかなり丸みをもつ。10は、口径約14.6cm。器高5.8cm。底径約5.4cm。外傾度 38.5° 。口縁部は直線的で、口端は丸い。体壁はほぼ直線的である。

刀子(9図11)完形品で、長さ9.8cm、棟区まで4.2cm。茎の長さ5.6cm。棟区から刃区まで1.2cmである。平造りで、柄に木質部が付着している。重さ7.4gである。北西側床面出土である。

4 4号住居跡 (Ca21住)

(遺構の確認)南北基準線より西へ15.88m~19.60m。東西基準線より南へ30.74~34.28mの地点、Ca21地区及びその周囲に黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の褐色シルト層である。No.2住居跡のほぼ南約25mの所である。

(重複・増改築)住居跡の東側 $\frac{3}{5}$ が、住宅の三和土下にあり、かなり攪乱を受けている。東側に約10基のピットがあり、セメントの付着した礫が、埋土に混入していた。煙出も同様に精査の終了間際まで不明であった。

(平面形・方向)東西3.02m。南北2.90mの方形で、各壁の中央部がやや凹んでいる。主軸はE -10° -Sで、ほぼ東を向く。

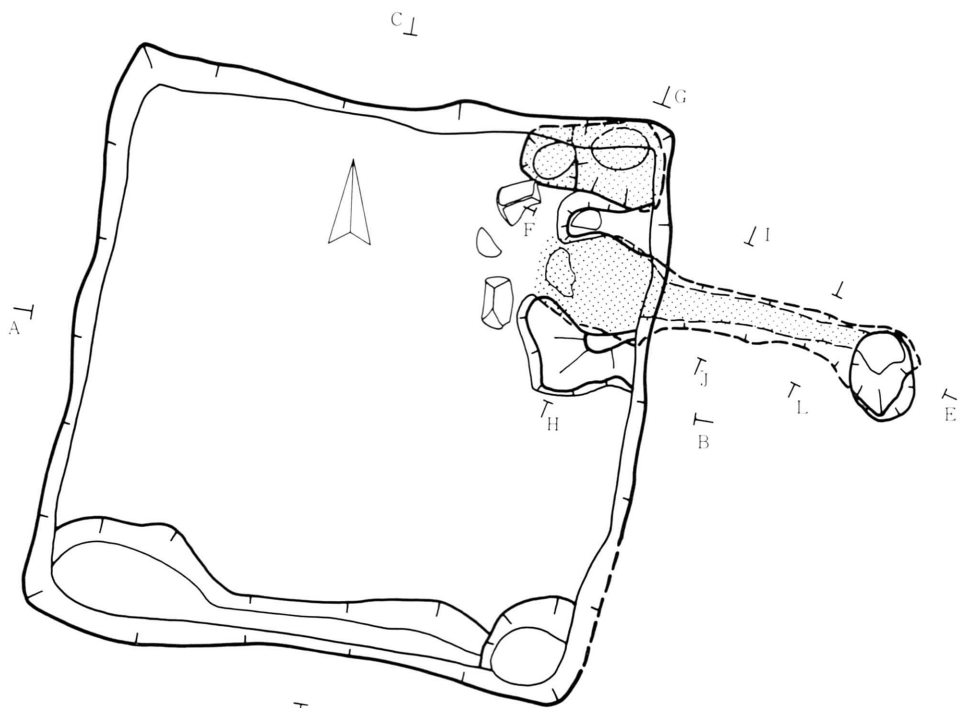
(推積土)4層に分れ、木根等の攪乱が多い。

- 1層 10YR 2/2 黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく、粘性なし、シルト若干混入。
- 2層 10YR 2/2 黒褐色腐植土層 指圧痕つく、粘性なし、シルト粒状、遺物を含む。
- 3層 10YR 2/1 黒色腐植土層 指圧痕つく、粘性なし、遺物を含む。
- 4層 10YR 2/3 黒褐色腐植土層 指圧痕つく、粘性若干あり、遺物、シルトを含む。

(床面)平担で、壁への立上がりは急角度である。壁高は32~35cmである。

(柱穴)なし

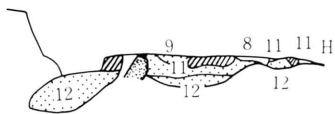
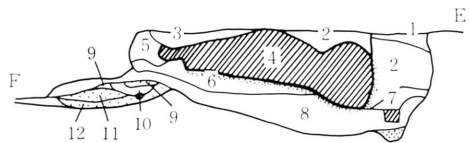
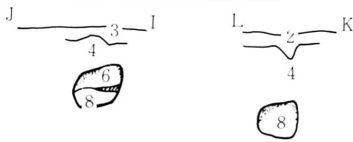
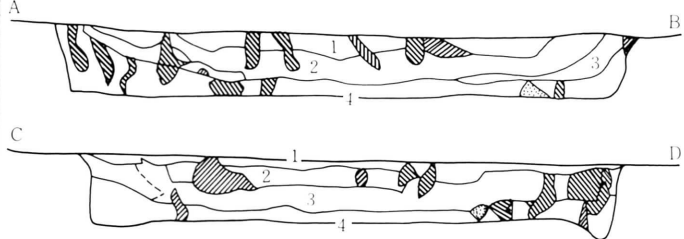
(周溝)南壁下だけにみられる。下場の巾約10cm、深さ床面より約10cm。両端がピット状に



P, E ~ P, L

1層10Y R ㄹ	黒色腐植土層密で粘性なし、攪乱層か
2層10Y R ㄹ	黒褐色腐植土層粗で粘性なし、攪乱層か
10Y R ㄹ	黒色腐植土層密で粘性なし、攪乱層か
4層10Y R ㄹ	褐色シルト層密で粘性なし、砂を含む地山
5層10Y R ㄹ	黒色腐植土層密で粘性なし、住居跡3層か
6層10Y R ㄹ	黒色腐植土層粗で粘性なし、砂シルトを含む
7層10Y R ㄹ	黒褐色腐植土層粗で粘性なし
8層10Y R ㄹ	黒褐色腐植土層粗で粘性なし、砂を含む
9層2.5Y R ㄹ	暗赤褐色焼土層粗で粘性なし、4層の焼けたもの
10層7.5Y R ㄹ	褐色シルト層粗で粘性なし
11層5Y R ㄹ	暗赤褐色焼土層粗で粘性なし、遺物を含む
12層5Y R ㄹ	暗赤褐色焼を層密で粘性なし遺物炭化物

T_D



第10図 4号住居跡(Ca21住)

膨らむ。

(かまど) 東壁北寄りにある。燃焼部は巾約53cm。奥行約60cm。5cmほど浅く掘り込まれる。左袖は長さ約50cm、巾15～25cm。高さ15～20cmで、袖中に礫を2個埋めている。左袖は長さ約65cm。巾15～33cm。高さ約20cmで大部崩れている。焚口付近に袖石か支脚と思われる礫が4個みられた。煙道は、長さ106cm、巾24cm、深さ15～20cmで、やや前下がりがり削り貫きで、検出面には現われていない。煙出は、径30～40cm、下場径20～25cm。深さ57cmである。

(貯蔵穴) 貯蔵穴状ピットは、北壁東端にあり、かまど内の焼土・炭化物・遺物を埋め込んだ状態である。東西78cm。南北45cmで深さ11～12cm。下場が2に分れ、北壁を挟んでいる。南東隅にもピット状の浅い凹みがあり、遺物が出土した。

(年代決定資料) 土師器、長胴甕と内黒坏は出土せず、小型甕3点だけである。須恵器は、壺1点、長頸壺2点、坏A4点、坏B5点+4片。刀子1点出土した。

出土遺物

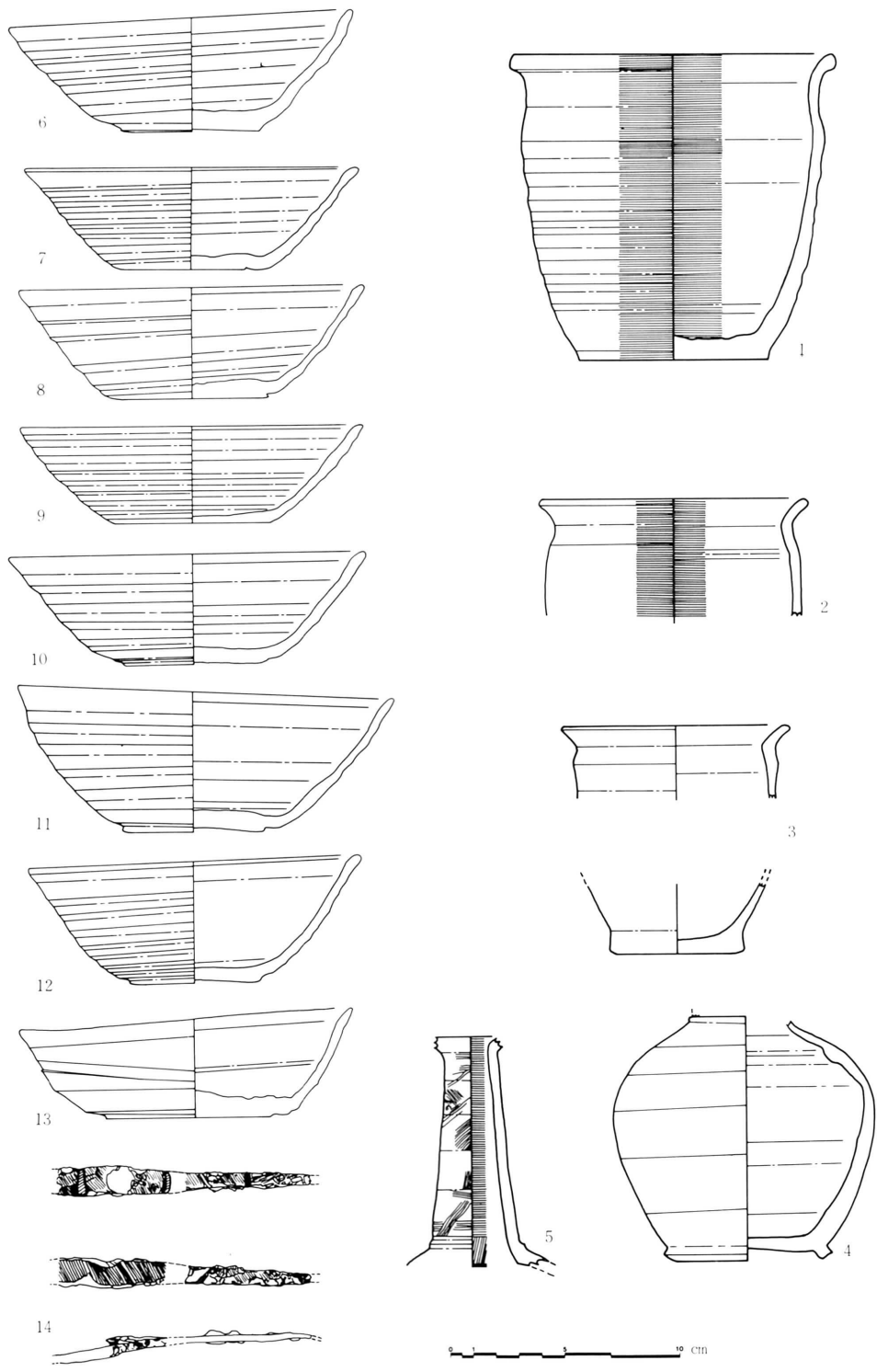
土師器

小型甕(11図1～3) 1は、口・体 $\frac{2}{3}$ 、底全部残存で、口径13.1～14.1cm。器高12.9～13.4cm。底径8.0～8.3cmである。口縁部は外反し、口端は上に挽き出される。口縁と頸部、体部の境は不明瞭である。体壁はロクロなどで成形無調整で、凸凹がある。外底面は回転糸切で、全体がかなり歪んでいる。胎土やや軟質、色調は灰赤色～にぶい橙色。焼成やや不良で、2次焼成を受け焼土煤が付着している。北東端ピット内出土である。2は、体壁中央部欠損で、口径、11.5～12.8cm。頸部径10.1～10.3cm。残存体部最大径11.2cm。底径約7.0cmである。口縁部は、かなり外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はロクロなどで成形無調整、外底面は回転糸切である。胎土軟質。色調は灰赤色～にぶい橙色。焼成不良で、2次焼成をかなり受け爛れている。1と出土地点は同じ。3は、体壁中央部欠損で、口径約10cm。頸部径約8.6cm。底径5.9cmである。口縁部はかなり外反し、口端は薄くなる。全体に横なでをしているが、手捏成形のようである。底部は外側にやや張り出し、平坦である。胎土軟質、色調灰色、焼成不良で北西側床面出土である。

須恵器

壺、肩部 $\frac{1}{8}$ の破片である。頸部下端から肩部に叩き目痕がみられ、その後、横にヘラなどで調整が施される。内面は横なでである。

長頸壺(10図4・5) 4は口縁部、頸部を欠損する小型の壺である。頸部下端径3.9～4.3cm。体部最大径11.2～11.6cm。頸部下端までの高さ10.5cm。底径7.1～7.4cm。高台下端径7.4～7.7cm。高台高さ0.4cm。体下半にヘラ削り調整がみられ、後全面を横なで成形している。外底面は、切離し後放射状に調整し、後に高台部を貼り付けている様である。5は、頸部



第11图 4号住居跡出土遺物

全部と、肩部上端若干残存で、上端径 2.5 cm。下端径 3.8 cm。高さ 8.1 cm。外面は不定方向に調整され、内面は横なでである。4・5 共に、胎土硬質。色調灰色～灰黄色、焼成良好で、4 は北側中央、5 は南西端から出土した。

坏 A (10 図 6～9) 6 は、口径 14.3～14.9 cm。器高 4.6～5.3 cm。底径 6.1～6.3 cm。口縁部はやや内弯。口端は丸みをもつ。体壁は外傾度 32～46° で丸みをもつ。7 は、口径 14.6 cm、器高 4.5 cm。底径 6.7 cm。外傾度 43°。口縁部はわずかに外反し、口端は丸みをもつ。体壁はわずかに丸みもち、外傾する。8 は、口径約 15 cm。器高 4.8 cm。底径約 6.3 cm。外傾度 41°。口縁部は直線的で、口端部は薄くなる。体壁はわずかに丸みもち外傾する。9 は、口径約 15 cm。器高 4.3 cm。底径約 6.8 cm、外傾度 43.5°。口縁部はやや内弯し、口端は薄くなる。体壁はわずかに丸みもち、かなり外傾する。6～9 何れも、ロクロなで成形無調整、回転糸切である。

坏 B (11 図 10～13) 10 は、口径約 15.7 cm。器高約 4.8 cm。底径 6.0 cm。外傾度 44°。口縁部は直線的で、口端は薄くなる。体壁は、下端に丸みがある。底部がかまど、口・体部は、北東端ピット内から出土した。11 は、口径 16.1～16.9 cm。器高 5.8～6.5 cm。底径 6.2 cm。外傾度 35～45°。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はかなり丸みもち外傾し、歪み著しい。南東側床面出土である。12 は、口径 14.4～14.8 cm。器高 5.2～5.5 cm。底径 5.7 cm。外傾度 40°。口縁部はわずかに外反し、口端は丸くなる。体壁はやや丸みをもつ。北東端ピット内出土である。13 は、口径 13.6～14.5 cm。器高 13.6～14.5 cm。底径 7.2 cm。外傾度 38～43.5°。口縁部はわずかに外反し、口端部は薄くなる。体壁はかなり丸みをもつ。外底面は回転ヘラ切後、手持ヘラ削り調整の様である。かまど内出土で 10 の下に重なっていた。13 以外は回転糸切である。

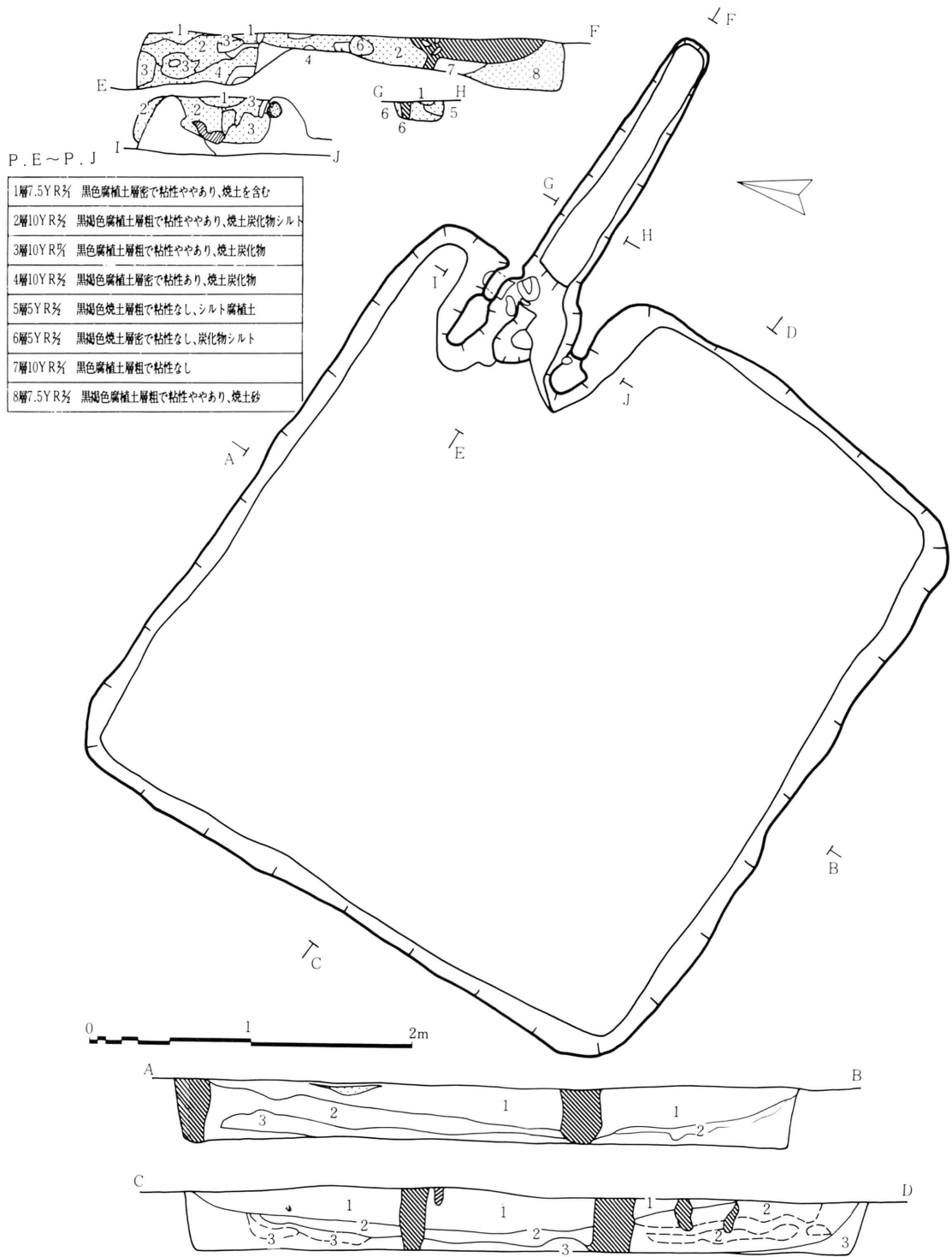
刀子 (11 図 14) 切先部と、棟区・刃区部が欠損している。残存部は刃身の長さ 4.7 cm、巾 1.0～1.2 cm、棟の巾約 0.5 cm。茎高の長さ 5.5 cm。巾 0.5～0.8 cm。厚さ 2.5 cm。刃身は平造りで、角棟。心鉄部は、ほとんど欠損し、皮鉄だけである所から甲伏鍛と思われる。

5 5号住居跡 (C a 65住)

(遺構の確認) 南北南基準線より東へ 15.07 m～20.25 m。東西基準線より南へ 31.28 m～36.68 m の地点、C a 65 地区、及びその周囲に黒褐色の落込みを確認した。3 号住居跡の南南東約 25 m である。遺構確認面は褐色シルト層である。

(重複、増改築) 土地買収まで、曲屋の農家があり、その床下にある。表土はほとんど推積せず、礎石が散在していた。

(平面形、方向) 東西 4.24 m。南北 3.88 m のほぼ方形で、主軸は E-30°-S で、東南東を向く。



第12図 5号住居跡(Ca65住)

(推積土) 3層に大別され、攪乱が多い。

- 1層 10 Y R 2/2 黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく、粘性なし、礫・遺物・焼土若干。
- 2層 10 Y R 3/2 黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく、粘性ややあり、シルト・礫・遺物を含む。
- 3層 10 Y R 2/1 黒色腐植土層 指圧痕ややつく、粘性ややあり、遺物を含む。

(床面) ほぼ平坦で、地山を直接利用する。床面から壁への立上がりは急角度で、壁高は32～40cmである。床面に堀立柱建物跡の柱穴底面が、かなり残存している。

(柱穴・周溝等の施設) なし

(かまど) 東壁北側にある。燃焼部は巾約50cm、奥行60cmで、浅く掘り込まれている。袖石か支脚と思われる礫が入っている。左袖は長さ約70cm、巾35cm、高さ約30cm、右袖は長さ約80cm、巾約50cm、高さ約30cmである。煙道は長さ1.38m。巾28～33cm。深さ10～20cmで、前下がりである。煙出は明確な輪郭を持たない。

(貯蔵穴) なし

(年代決定資料) 土師器。長胴甕12点、小型甕6点、内黒坏4点、須恵器。壺1点、長頸壺1点、坏A 2点、坏B 1点+ 4片である。

出土遺物

土師器

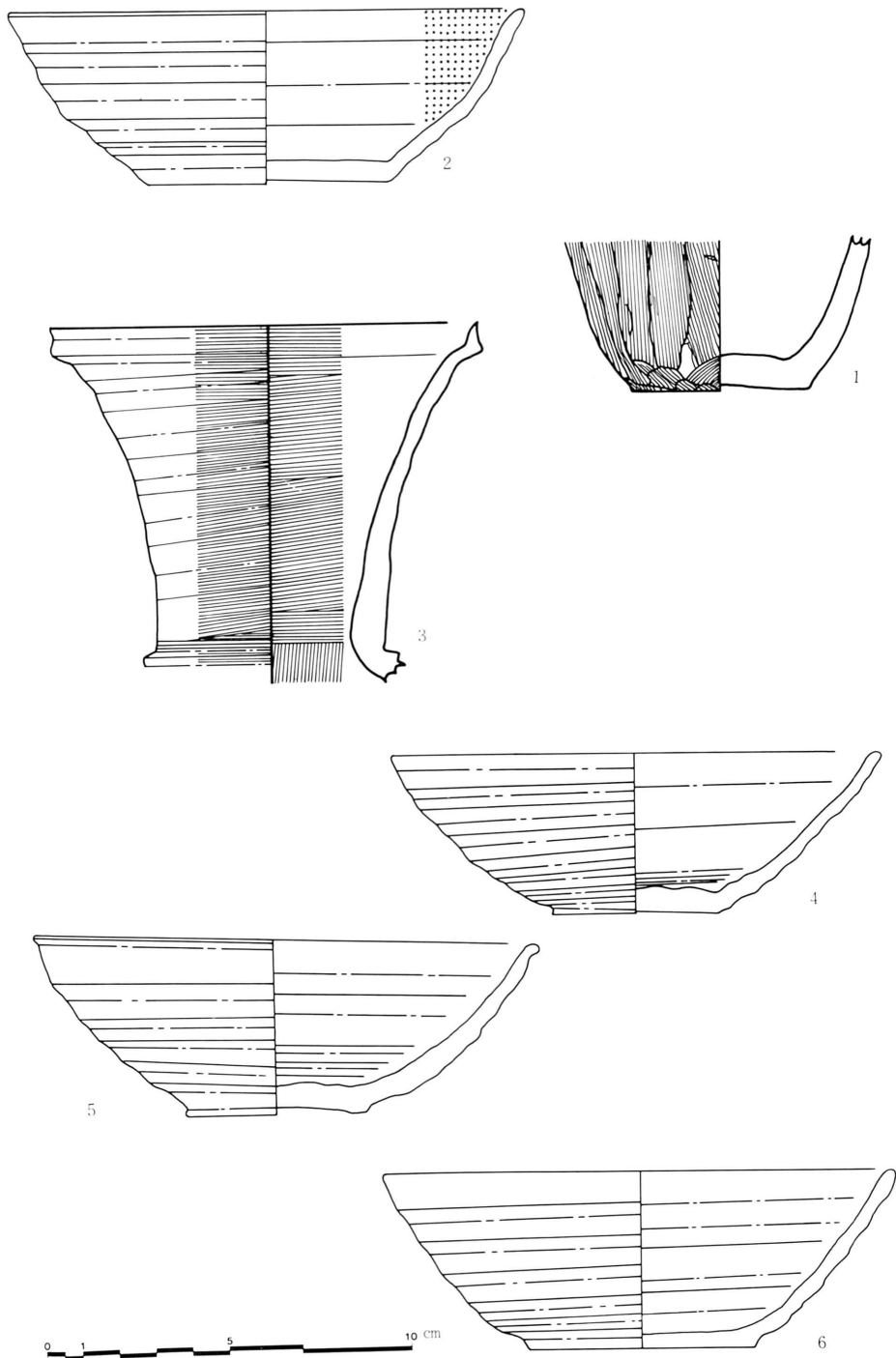
長胴甕、いずれも小破片で、全容不明である。口縁部は1点で、口端が上に挽き出されたものである。他はみな体部小破片で、主にかまど及びその周囲から出土した。

小型甕(13図1) 体下半と底部全部残存で、底径4.9～5.0cmである。体部下半外面は、ヘラ削り調整後、縦に刷毛目を施し、内面も刷毛目のようである。外底面は手持ヘラ削り調整がみられる。北西側3層出土である。他の5点は体部の小破片である。

内黒坏(13図2) は、口縁部 $\frac{1}{4}$ 、体部 $\frac{1}{4}$ 、底部全部残存で、口径約14.2cm。器高4.7cm。底径6.6cmである。口縁部は、やや外反し、口端部は薄くなる。体壁は丸みをもち外傾(39°)する。外面はロクロなどで成形無調整。内面は、口縁～体上半は横磨き、体下半～底部は放射状の磨き、黒色処理。口端部外面の一部にも磨きと黒色処理がみられる。外底面は回転糸切で、かまど周囲床面上から出土した。他の3点もロクロなどで成形無調整、回転糸切である。2点は、内底面に放射状の磨き、黒色処理がみられる。他の1点は口縁部 $\frac{1}{8}$ 以下の小破片である。

須恵器

壺、体部の破片1点で、内外面に直線状の叩き目痕がみられる。外面半分に灰釉が付着している。あまり丸みをもたない。硬質、灰色の破片で、北東側床面上出土である。



第13図 5号住居跡出土遺物

長頸壺（13図3）口縁部、長頸部全部残存である。口径11.2～11.7cm。口端から頸部下端の
高さ6.3cm。頸部下端径6.3cm。口縁部はやや外反し、口端部は上に強く挽き出され薄くなる。
頸部は緩やかに外反し、下端は外側に張り出している。南西側床面出土である。

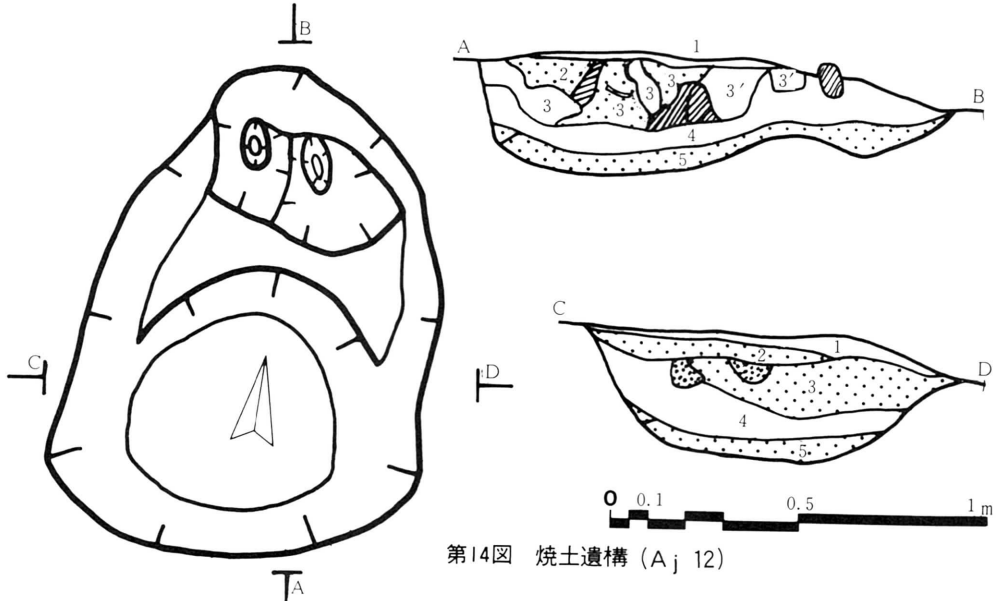
坏A（13図4・5）4は、完形品で、口径13.5cm。器高4.4cm。底径4.5cm。外傾度46°
である。口縁部は直線的で、口端部は丸みをもつ、体壁は丸みをもち、かなり外傾する。やや硬
質で、灰白色、焼成はあまり良くない。かまど周囲出土である。5は、口・体 $\frac{3}{4}$ 、底全部残存
で、口径13.7～13.9cm、器高4.5～5.1cm。底径5.0cm。外傾度38°～42°である。口縁部は
直線的であるが、口端部で急に外反し丸みをもつ。体壁はかなり丸みをもつ。底部はやや下に
張り出している。西壁中央下の床面出土である。4・5共ロクロなで成形無調整、回転糸切で
ある。

坏B（13図6）口縁部 $\frac{1}{2}$ 、体部 $\frac{1}{2}$ 、底部全部残存で、口径14.0cm。器高4.6～4.9cm。底径
6.2～6.4cm。外傾度39°である。口縁部は直線的で、口端部は丸みをもつ。体壁はわずかに
丸みをもち外傾する。底部はやや下に張り出す。ロクロなで成形無調整、回転糸切で煙道出土
である。

6 焼土遺構（A j 12）

（遺構の確認）南北基準線より西へ10.6m～11.65m。東西基準線より南へ26.0cm～北へ1.03
mの地点、A j 12地区に、礫・焼土を伴う黒褐色の落込みを確認した。2号住居跡の北3.7m
の所である。遺構確認面は表土下の褐色シルト層である。

（平面形・方向）長軸（南北）1.29m。短軸（東西）0.92～0.96mで、ほぼ卵形をしている。
長軸は、ほぼ南北を向く、北端は丸みをもち、南側は両端にやや角ばったコーナーをもつ。



第14図 焼土遺構（A j 12）

(推積土) 5層に分れ、2・3・5層が焼土層である。1・4層には焼土はほとんど含まれていない。遺物は1・2・3層に包含され、4・5層にはほとんど包含されていない。4層のみに礫が包含されている。

1層 10 Y R 2/3 黒褐色腐植土層 粗で、粘性なし、遺物を若干含む。

2層 10 Y R 2/2 黒褐色腐植土層 粗で、粘性なし、焼土、炭化物、遺物、シルト包含。

3層 10 Y R 2/2 黒褐色腐植土層 粗で、粘性ややあり、焼土、炭化物、遺物、シルト包含。

4層 10 Y R 2/1 黒色腐植土層 粗で、粘性なし、シルト若干を含む。

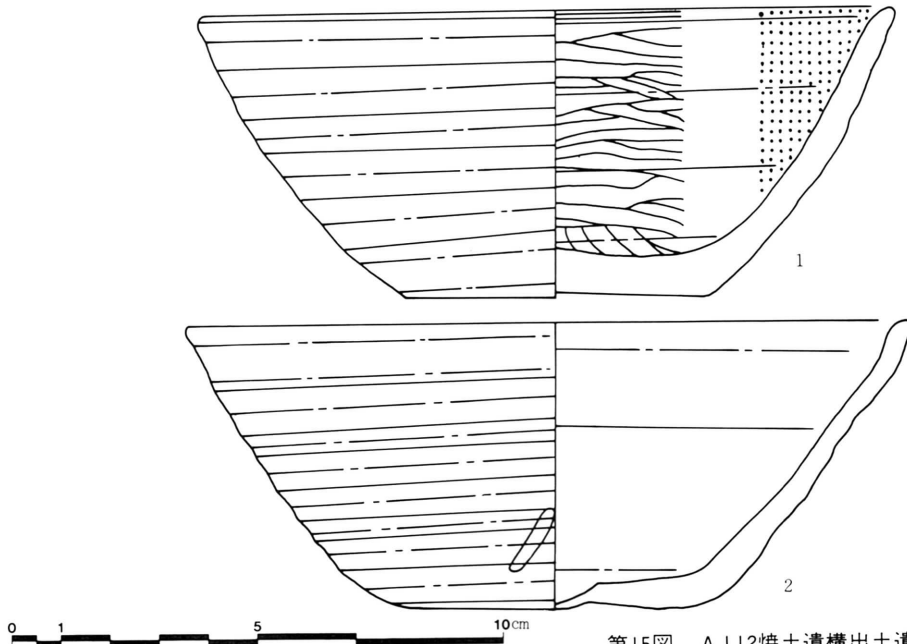
5層 10 Y R 2/2 黒褐色腐植土層 密で、粘性ややあり、焼土、シルト、を包含。

(底面) 南北2つに分れ、境がやや浅くなる。北半分は、深さ約20cmで東西に仕切られ、1つずつ楕円形の小ピットがある。南側はほぼ円形のプランで、径55cm、深さ約30cmである。南側の壁面が急傾斜で、他の壁面は緩やかである。

(年代決定資料) 土師器、長胴甕3点+39片、小型甕2点、内黒坏4点。須恵器、坏A2点、坏B2点+25片が出土した。甕は頸部無段で、刷毛目とヘラなでの2様式である。坏類はみな回転糸切である。

出土遺物

土師器、長胴甕は3点が口縁部と体上半部で、他は体・底部小破片である。1つは、口縁部がかなり外反し、口端が薄くなり、外面に粗い削りが全面にみられ、内外両面に粗い刷毛目様の調整がある破片で、歪み著しく計測不能である。2は、口縁部小破片で、口縁部がかなり



第15図 A J 12焼土遺構出土遺物

外反し、口端が丸みをもつもの。3は、口縁がやや外反し、口端が丸い破片である。体部破片は刷毛目の施されたものと、ヘラなでのものがみられる。

小型甕は、小破片で、全容不明、計測不能で、ロクロなで成形無調整のようである。

内黒坏（15図1）口縁部 $\frac{1}{4}$ 、体部 $\frac{1}{2}$ 、底全部残存で、口径約14.2cm。器高5.7～5.9cm。底径6.2cm。口縁部はわずかに内弯し、口端は薄くなる。体壁は丸みをもち外傾（ 32° ～ 36° ）する。外底面は回転糸切で、黒斑がみられる。口縁部外側と内面が、磨きと黒色処理で、内底は円を画く様に磨きがある。又外体面は全面が回転ヘラ削り調整の様にみられる。他の4点中2点も回転ヘラ削り調整が認められ、他の2点は、磨滅著しく不明である。

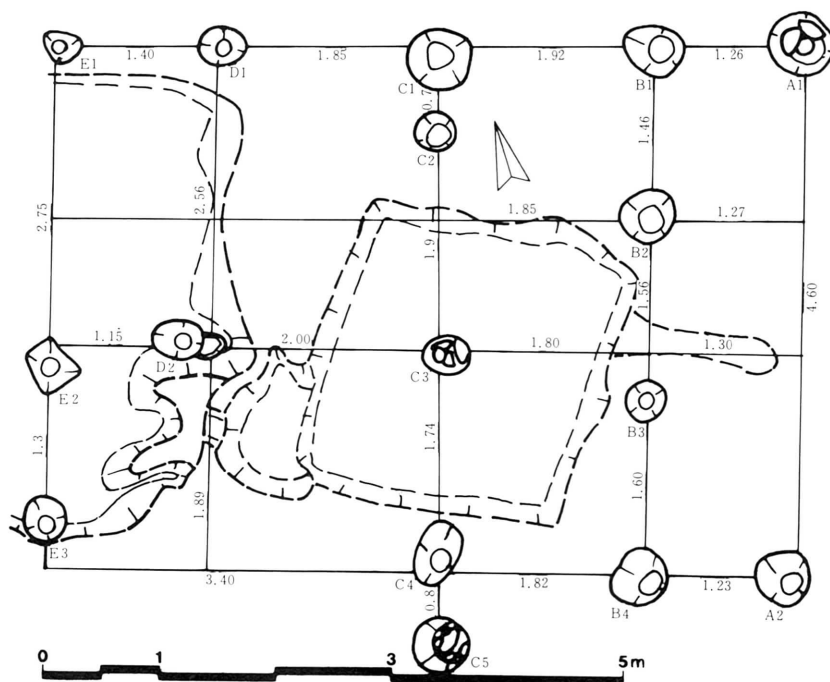
須恵器

坏A、2点共小破片で、全容不明、計測不能である。

坏B、（15図2）口径14.8m、器高5.7～6.0cm、底径5.6cm、外傾度 36.5° ～ 39° である。口縁部は直線的で、口端は丸みをもつ。体壁は弓形に外傾し、上端と下端は丸みをもつ。ロクロなで成形、無調整、回転糸切で、底部中心はかなり薄くなる。他の破片中、口縁部外反するもの6点、直線的なもの5点、他は体部と底部破片で、底部はみな回転糸切である。

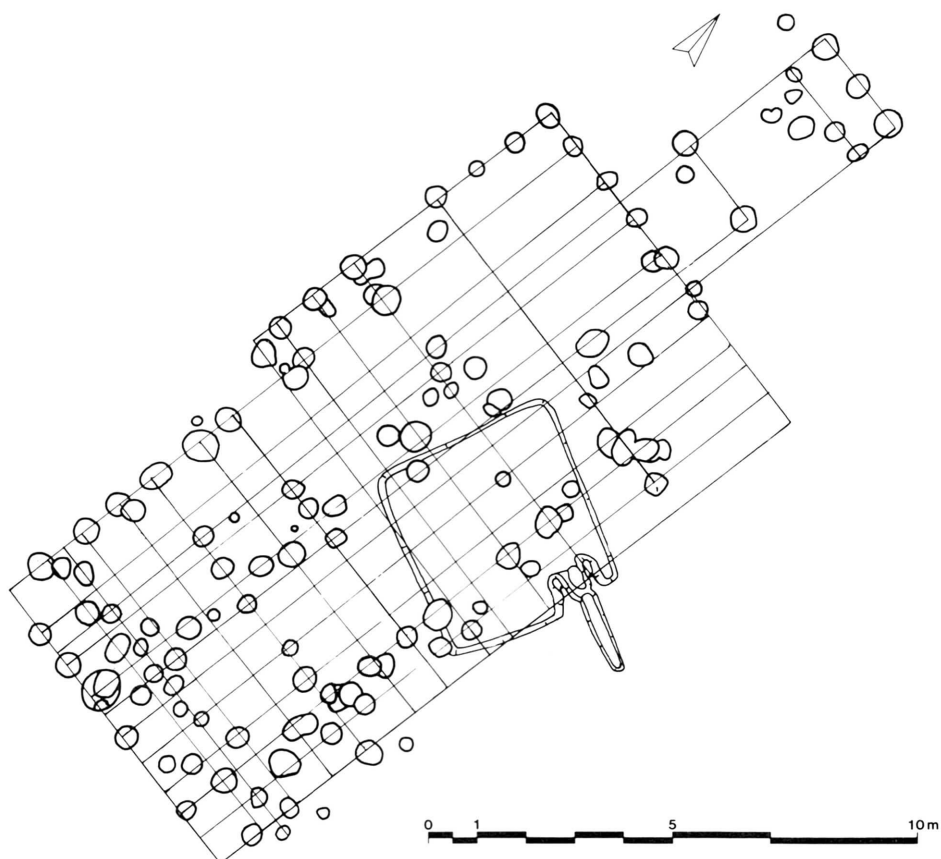
7 B b 15掘立柱建物跡

（遺構の確認）1号住居跡東半分と、2号住居跡全体と重複して、B b 15地区及びその周囲から確認された。遺構確認面は、表土下の褐色シルト層である。



第16図 Bb 15掘立柱建物跡

(規模・方向) ほぼ南北に5列、全部で16基の柱穴跡が確認されたが、西端の列は明確ではない。北端東西間の長さ6.43m、南端東西間の長さ6.45m。東端南北間の長さ4.6m。西端南北間の長さ4.05mで、各柱穴間の距離は、第16図の通りである。各柱穴の規模は、A1 = 上場径46~54cm、下場径15~17cm、深40cm、底面に礫有。A2 = 上場径44~45cm、下場径21~23cm、深34cm。B1 = 上場径39~48cm、下場径14cm、深51cm。B2 = 上場径41~45cm、下場径17~24cm、深60cm。B3 = 上場径36cm、下場径12cm、深40cm。B4 = 上場径44~47cm、下場径20cm、深80cm。C1 = 上場径55cm、下場径20cm、深77cm。C2 = 上場径36cm、下場径24cm、深67cm。C3 = 上場径不明、下場径35cm、深40cm。底面に礫有。C4 = 上場径37~55cm、下場径19cm、深57cm。C5 = 上場径47cm、下場径20cm、深60cm、底面に礫有。D1 = 上場径40cm、下場径14cm、深67cm。D2 = 上場径不明、下場径20cm、深70cm。E1 = 上場径不明、下場径9cm、深60cm。E2 = 上場径不明、下場径15cm、深74cm。E3 = 上場径不明、下場径18cm、深50cm。東端列は庇と思われ、C列の北から2番目と、南端の柱穴は東西に並ぶ柱穴はみられない。



第17図 Ca62掘立柱建物跡

(推積土) 10 Y R 1.7/1 黒色腐植土で表土下層と同じである。径10～20cmの平たい礫を含む。

(年代測定資料) 柱穴B 4の埋土から寛永通宝が1点、北側からも1点出土した。

8 C a 62 堀立柱建物跡

(遺構の確認) 南北基準線より東へ 9.7 m。東西基準線より南へ 21.8m～42.4mの地点、C a 62地区及びその周囲に、柱穴群が在ることを確認した。遺構確認面は、褐色シルト層である。

(規模・方向) 南北15.0 m、東西 8.0 mの長方形で、買収時までであった。曲家の農家と同位置、同規模で、北へ 5.4 mほど張り出しを持ち、台所を増築した跡という。現曲家は、北端から東へ、厩屋部分が伸びていたが、丸太材が置かれており、搬出先がなく、調査不能であった。従って、柱穴群は、現時点では、礎石の上に柱を建てていたが、改築以前は、堀立柱建物で、その跡と思われる。柱穴群の中に10個所、切り合っている柱穴があり、2～3回の改築がおこなわれたと思われる。

柱穴群は、高さ約20～30cmの基段の上のみ存在し、現曲家も、その上に建てられていた。5号住居跡は、この床下から検出され、住居跡西壁南寄りにある柱穴中から、寛永通宝が出土した。又陶器片、鉄製器具等が多数表採された。

IV 遺構と出土遺物のまとめ

調査の結果、住居跡5棟、焼土遺構1基、堀立柱建物跡2棟分、それに西側南半から、浅いピット約50基。溝1基が検出された。

住居跡は、一辺約4 m台のもの1棟、4 m弱のもの2棟、3 m台のもの1棟、2.5 m台のもの1棟でみなかまどが東壁にある。北寄りが2・4・5号住居跡・南寄りが1・3号住居跡である。柱穴は無く、周溝は回っていない。床面も、みな地山を利用しており、堀方もなく平坦である。

住居跡の出土遺物で、特徴的なのは、内黒坏が少なく、坏はA類よりB類の数が多い事である。特に2号住居跡は、坏A類の出土がない。又、4号住居跡は、内黒坏と長胴甕の出土が無かった。又、2号住居跡、5号住居跡の煙道から、ほぼ完成の坏Bが出土している。坏B類の器形は、底径が小さく、器高がやや高いものが多く、口縁部はやや内弯するものと、外反するものとあり、ロクロなどで成形無調整、回転糸切のもので、胎土、色調、焼成が、坏Aとかなり異なるが、器形については、それほど大きな差はない。又内黒坏の器形についても差はあまり無く、三者の大きな違いはない。胎土は、内黒坏や坏Aが良好で、焼成も坏Aと内黒坏が良好の方であるが、坏Aにしても、それほど良好でなく、重ね焼きの痕が残りに、火の当たらない部分は不良である。2号住居跡床面から出土した緑釉陶器は、11世紀という鑑定結果が出ている。

焼土遺構出土の遺物は、5棟の住居跡出土の遺物と比べ大差はなく、2号住居跡出土の遺物と同一個体と思われるものもある。

第1表 遺構一覽表

項目 遺構名	規 模 (東西× 壁 高)	形状	主軸方向	か ま ど				床 面 掘方	主 柱 穴	周 溝	貯藏穴
				位置	掘方	煙 道	煙 出				
1号 B a 21住	3.70 × 3.60 m 60cm	方形	E-29°-S 東壁 東南東	東壁 無 南端	破壊され 無 大部分無し	不明	有 無 袖石	無 無 無	西壁 北側の のみ有	不明	
2号 B b 15住	2.60 × 2.5 m 32-40cm	方形	E-30°-S 東壁 東南東	東壁 無 北端	長 87cm 巾 20~35cm 深 22~30cm	上場径25~30cm 下場径20~25cm 深 55cm	無 無 無	無 無 無	無	無し	
3号 B b 53住	3.75 × 4.20 m 34-40cm	方形	E-14°-S 東壁 東	東壁 無 南寄	長 70cm 巾 30~40cm 深 20~27cm	上場径37~50cm 下場径35~37cm 深 42cm	有 無 無	無 無 無	無	無し	
4号 C a 21住	3.0 × 2.90 m 32-35cm	方形	E-10°-S 東壁 東	東壁 無 北寄	長 106cm 巾 24cm 深 30~50cm	上場径30~40cm 下場径20~25cm 深 57cm	有 無 無	無 無 無	南壁 下に有	北東隅1 南西隅1	
5号 C a 65住	4.24 × 3.88 m 32-40cm	方形	E-30°-S 東壁 東南東	東壁 無 北寄	長 138cm 巾 28~33cm 深 10~20cm	不明	有 無 袖石	無 無 無	無	無し	
A J 12 焼土遺構	0.94 × 1.24 m 30cm	卵形	N-S								

第2表 遺物一覽表

遺物 遺構名	土 師 器			須 恵 器				鉄製品	備 考
	長胴甕	小型甕	内黒坏	壺	長頸壺	坏A	坏B		
1号 B a 21住	26	4	3	1	0	3	11	0	煙管 1 坏類回転糸切
2号 B b 15住	15	7	5	2	0	0	14	1	釘 1 帯金具1 緑釉陶器 1 坏類回転糸切
3号 B b 53住	11 +28片	7	4	0	2	11	13	0	刀子1 坏類回転糸切
4号 C a 21住	0	3	0	1	2	4	5 +4片	0	刀子1 坏Bに回転ヘラ 切1、他は回転 糸切
5号 C a 65住	12	6	4	1	1	2	2 +4片	0	0 坏類回転糸切
A J 12 焼土遺構	3 +39片	2	4	0	0	2	2 +25片	0	0 坏類回転糸切

堀立柱建物跡のうち、B b 15からは古寛永銭2個。C a 62からは新寛永銭1個出土した。

V 表土、堀立柱建物跡から発見された遺物

18図1・2は、B b 15堀立柱建物跡B 4柱穴と表土から出土したもので、古寛永銭、3は、西側南端表土、4はC a 15堀立柱建物跡柱穴中から、5はC a 15堀立柱建物跡北側表土から、6・7は、西側中央部表土から出土したものである。他に1号住居跡攪乱層から、煙管の火皿を欠損した雁首（銅製）。東南区から屋根の茅葺に使う鎌、失立、鉄製農具、陶器片が出土した。



第18図 表土・堀立柱建物跡出土遺物

VI 遺跡の構成

検出された遺構は、住居跡5棟、焼土遺構1基、堀立柱建物跡2棟分。ピット約50。溝1基である。

住居跡5棟は、出土遺物等から平安時代後半と思われ、多少時期差はあると思われる。例へば、1号住居跡の壊されているが、煙道部と、2号住居跡の西壁は、あまりにも接近し過ぎており、同時存在とは思われない。

焼土遺構は、焼土中にかなりの遺物を包含しており、野がまかと思われたが、遺物中に須恵器坏Aが2点あり、性格は不明であるが、時期は、柱居跡と、それほど差は無いと思われる。

堀立柱建物跡は、住居跡と重複し、検出段階で、柱穴の輪郭が、住居跡推積土にみられ、セクション図でも、住居跡推積土を掘り下げてつくられているし、柱穴内から寛永通宝が出土している事から、かなり新しいものと思われる。特にC a 62堀立柱建物は、現農家と同一プランで、改築以前のものと思われる。又柱穴に切り合いのものが10個所程ある事から、改築も1度だけではない事が判明した。

西側南寄りのピット群と溝については、性格も不明であるし、時期も不明であるが、底面までの深さは約5cm～10cmで、推積土も1層で、表土と同質同色で、不規則に点在しており、建

物跡ではなく、時期も、そう古いとは思われない。

Ⅶ まとめ

竹花前遺跡は、南面する低段丘の縁に立地し、東西に長い輪郭をもつ。遺跡の東側が今回の調査地区である。高速自動車道の路線から西へ外れるが、南約 100 m の畑地と果樹園にも遺物の散布地がある。又北約 120 m ～ 200 m の地域も、田貝遺跡として遺跡台帳に登録されている。この地域は、太田方八丁遺跡の南側に当り、昭和51年に、太田方八丁遺跡調査の際、関連遺跡の探索調査が行なわれた。その結果住居跡 1 棟が発見され、精査が行なわれた。東壁にかまどをもち、煙道、煙出は無く、出土遺物は、土師器、長胴甕 3 点、小型かめ 2 点、内黒坏 4 点、須恵器、壺 3 点、坏 A 1 点、坏 B 約 20 点、緑釉陶器 2 点と、ほぼ竹花前遺跡発見の住居跡と同様な遺物が出土している。

竹花前遺跡の調査地区からは、今回の調査により、住居跡 5 棟。焼土遺構 1 基。堀立柱建物跡 2 棟分が発見された。

住居跡と焼土遺構は、平安時代後半のものと思われる。各遺構には時期差が考えられるが、出土遺物をみると、それほど大差は無いと思われる。

堀立柱建物跡は、C a 65 に改築の跡がみられる。時期は江戸時代か、その前後と思われる。

図

版

まつ かわ 遺 跡
松 川



1

1 : 調査地遠景

2 : 遺物出土状況

3 : 出土遺物 (縮尺約1/2)

1 ~ 5 縄文後期土器

6 土師器

2



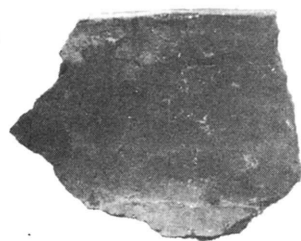
3



1



4



6



2



5



3

と くさ がわ 木 賊 川 遺 跡



遺跡遠景（南より）



遺跡近景（北より）



1：第1号土壤（Cf09）



2：第2号土壤（Ch09）



4：遺物出土狀況



3：遺跡 C区・D区近景



5：深鉢出土狀況



1 : 土偶出土状況

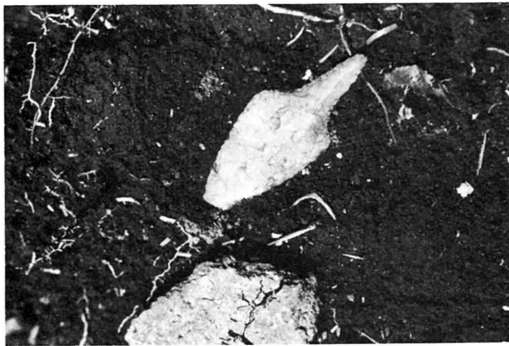


2

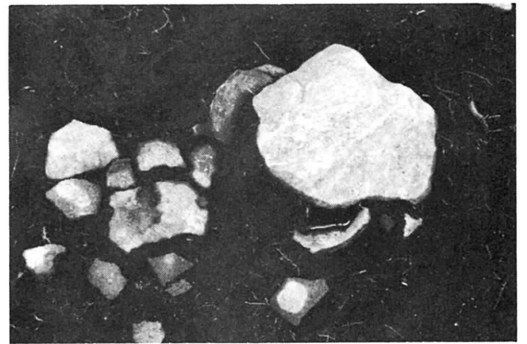


2・3 : 鉢出土状況

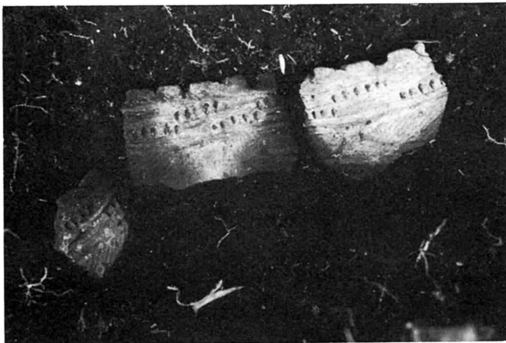
3



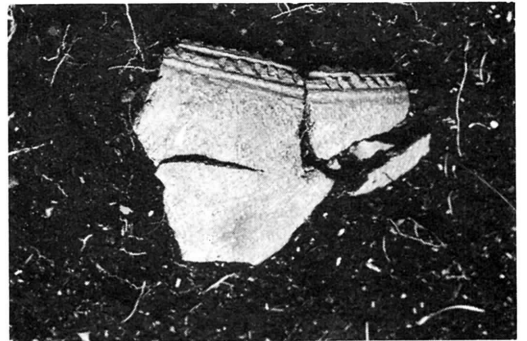
4 : 石鉢出土状況



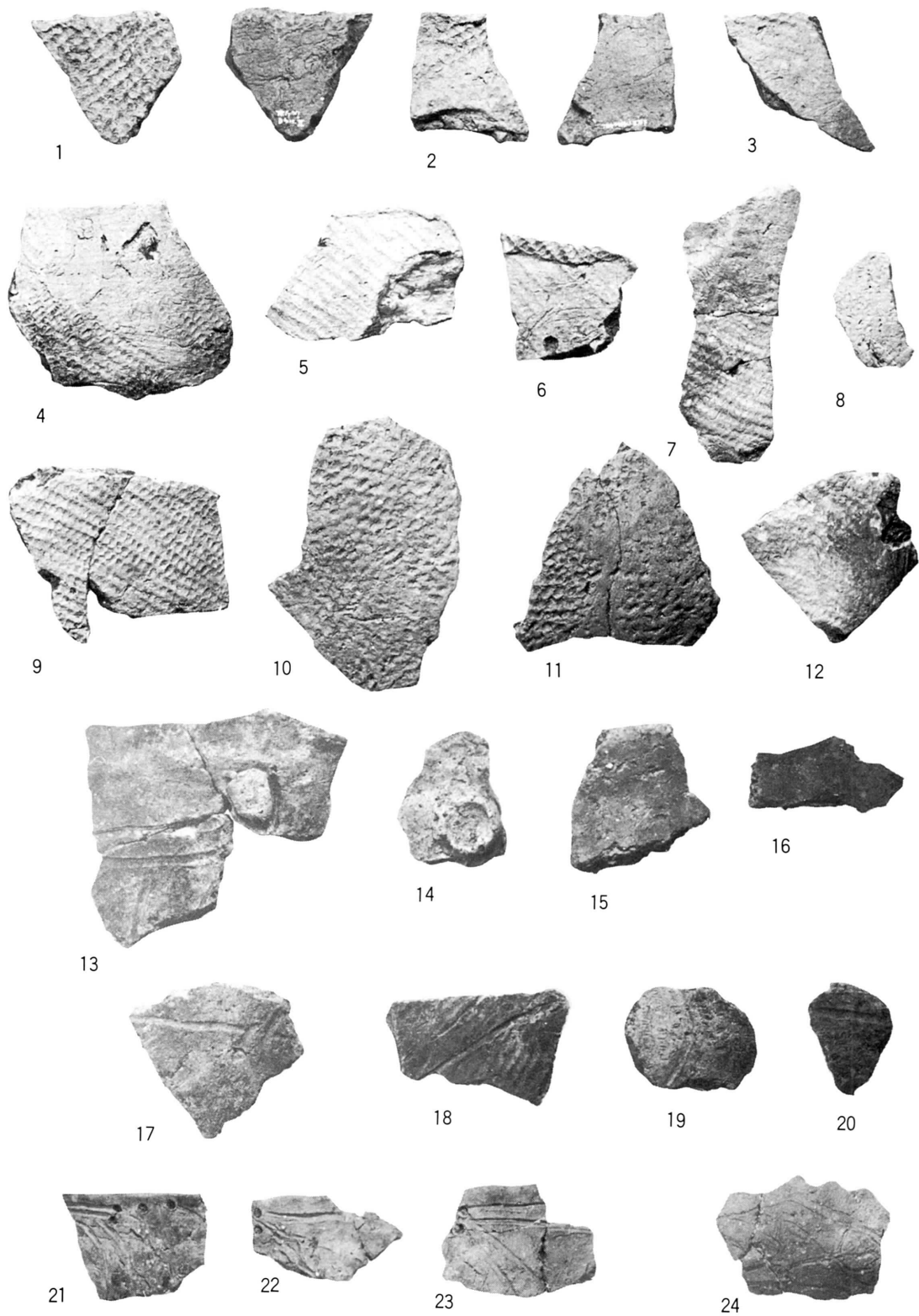
5 : 深鉢出土状況



6 : 鉢出土状況



7 : 鉢出土状況



早期・後期の土器

図版 4



1

S = 1/3



2

S = 1/3



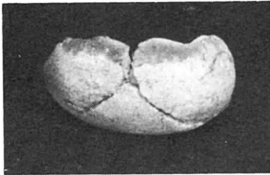
3

S = 1/3



4

S = 1/3



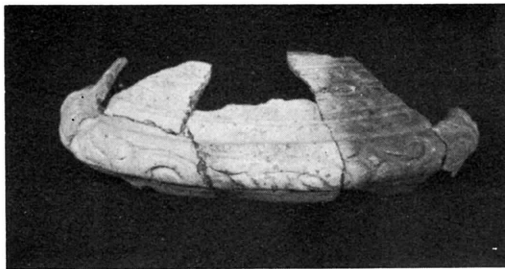
5

S = 1/2



6

S = 1/3

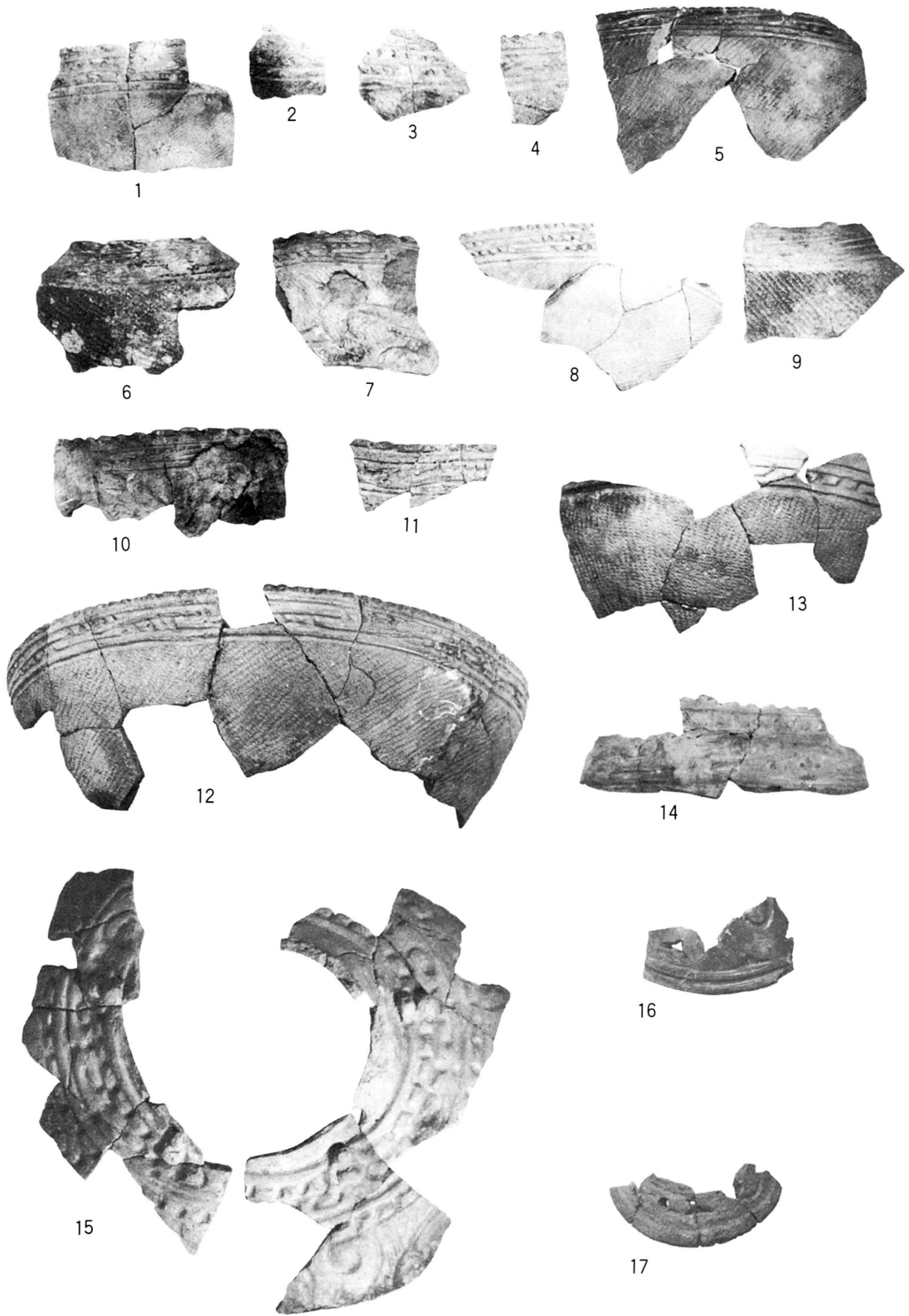


S = 1/3



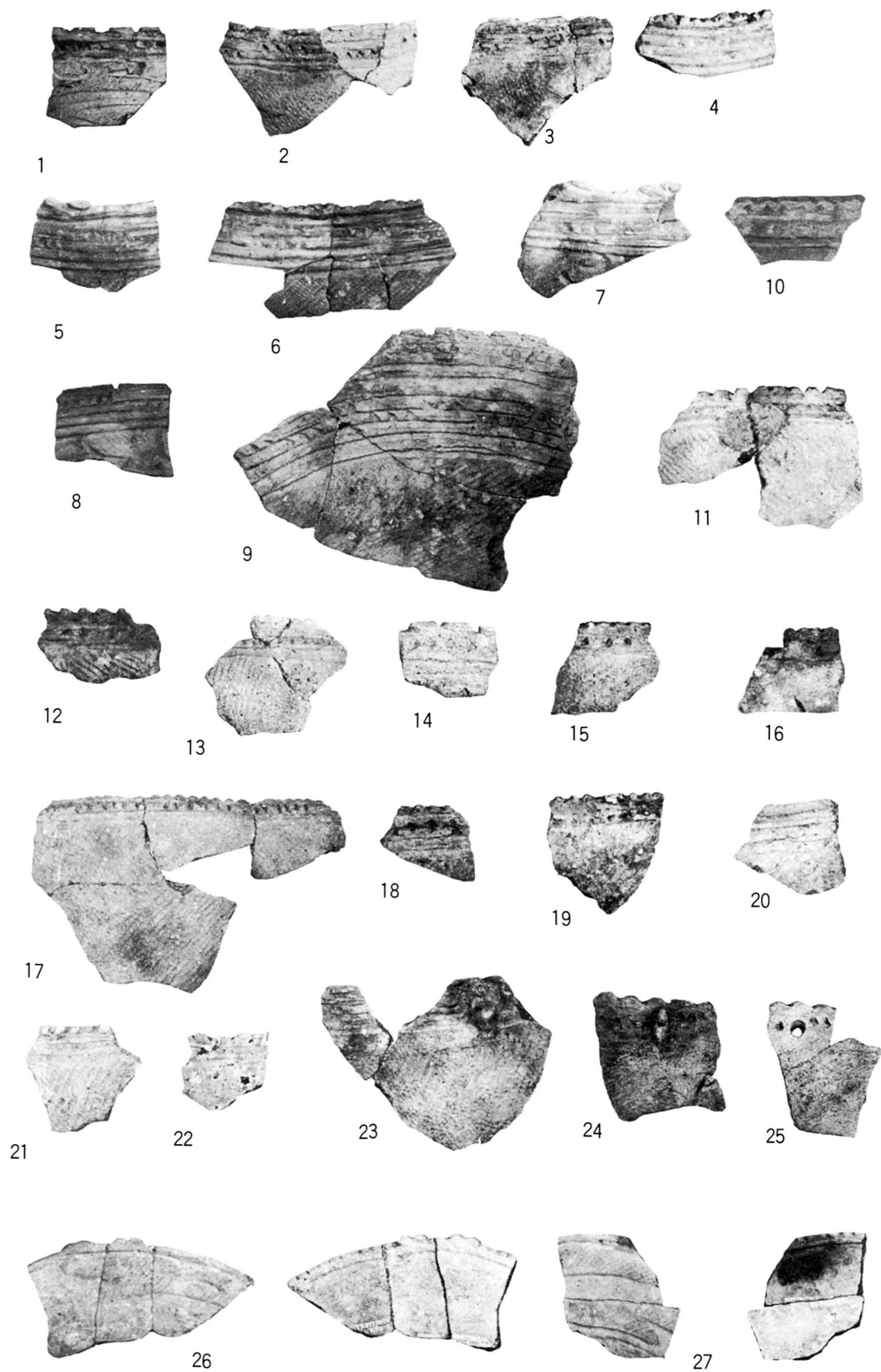
8

S = 1/3



晩期の土器

図版 6



晩期の土器

図版 7



1



2



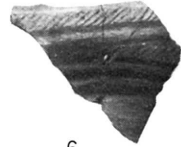
3



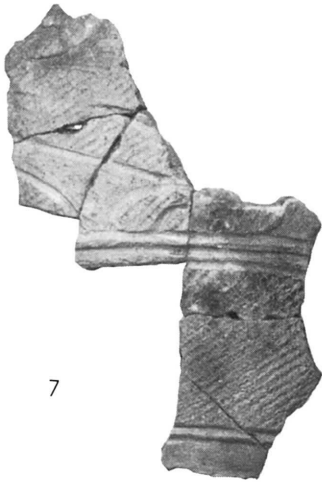
4



5



6



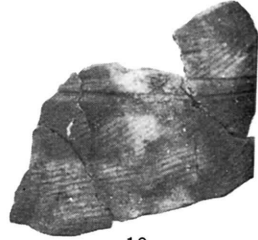
7



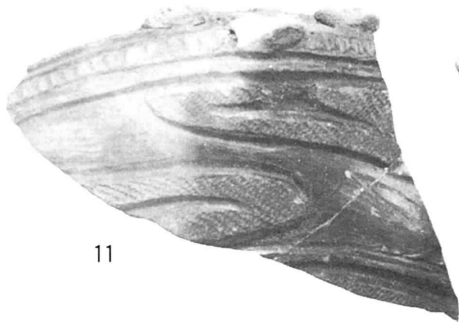
8



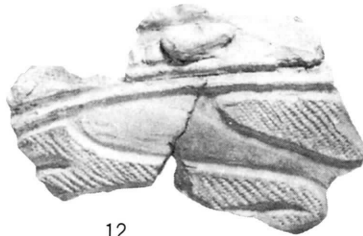
9



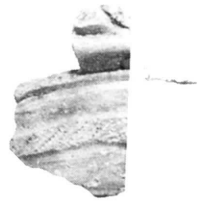
10



11



12



13

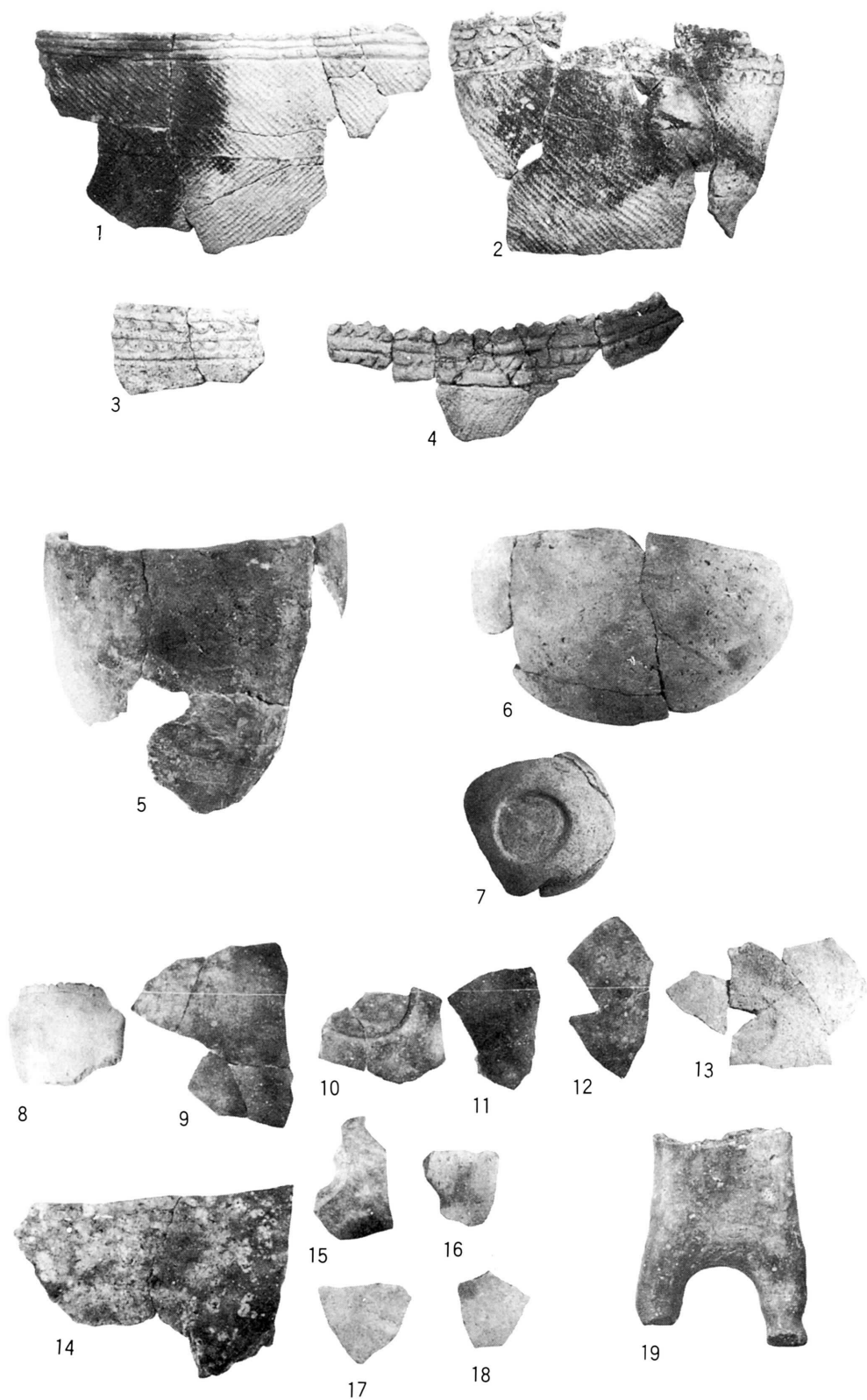


14



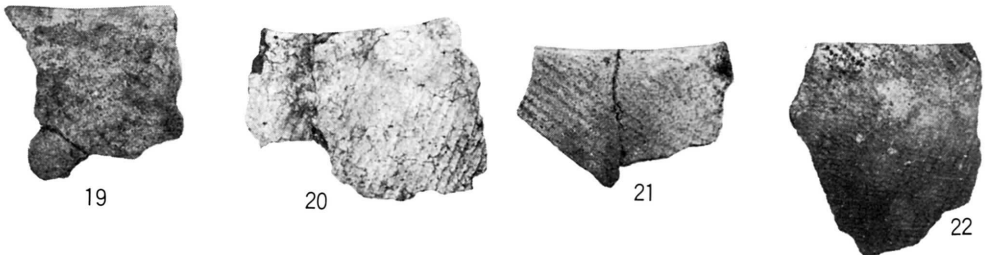
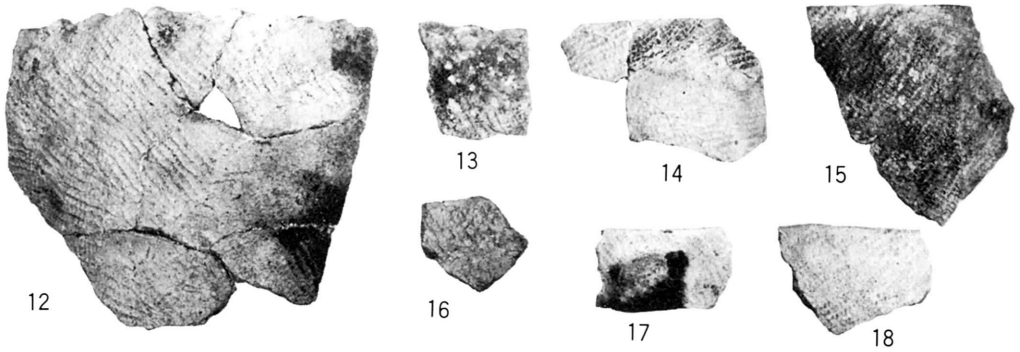
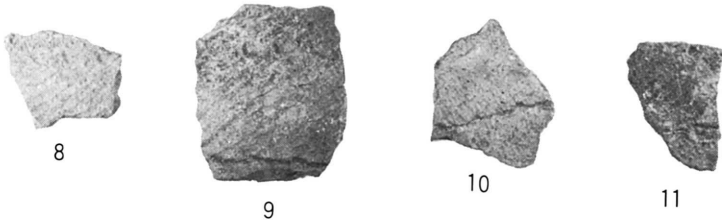
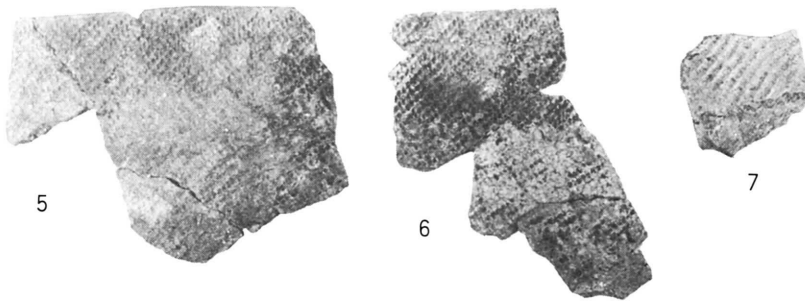
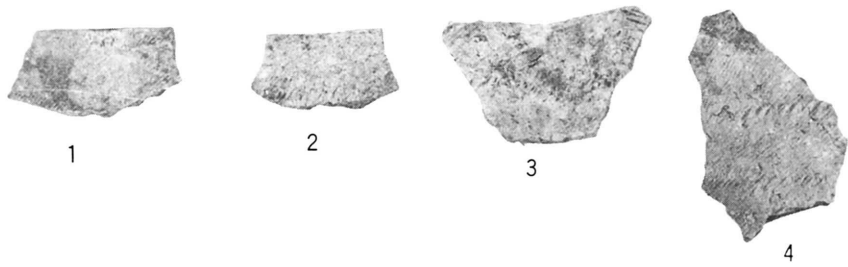
15

晩期の土器
図版 8

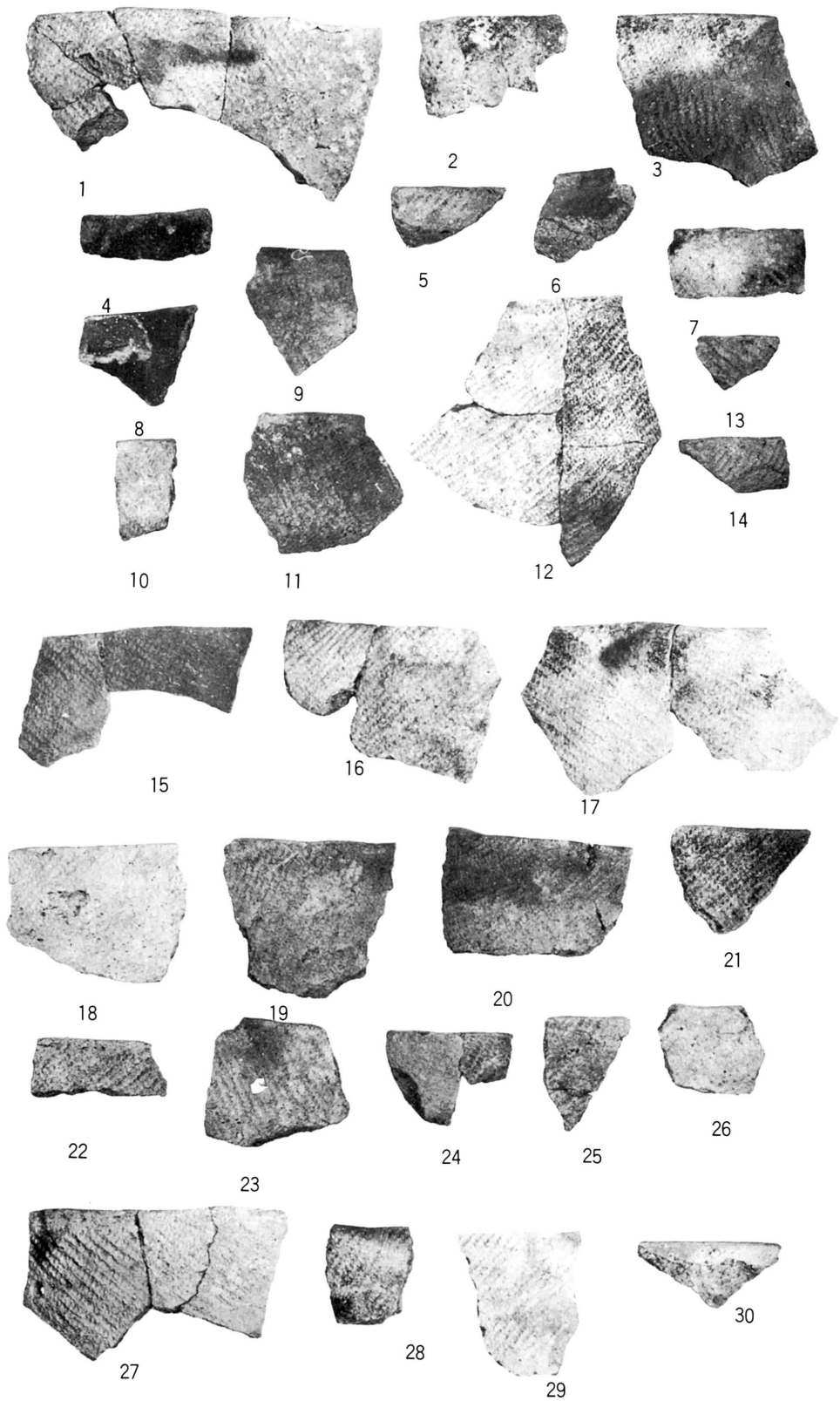


晩期の土器, 土偶

図版 9

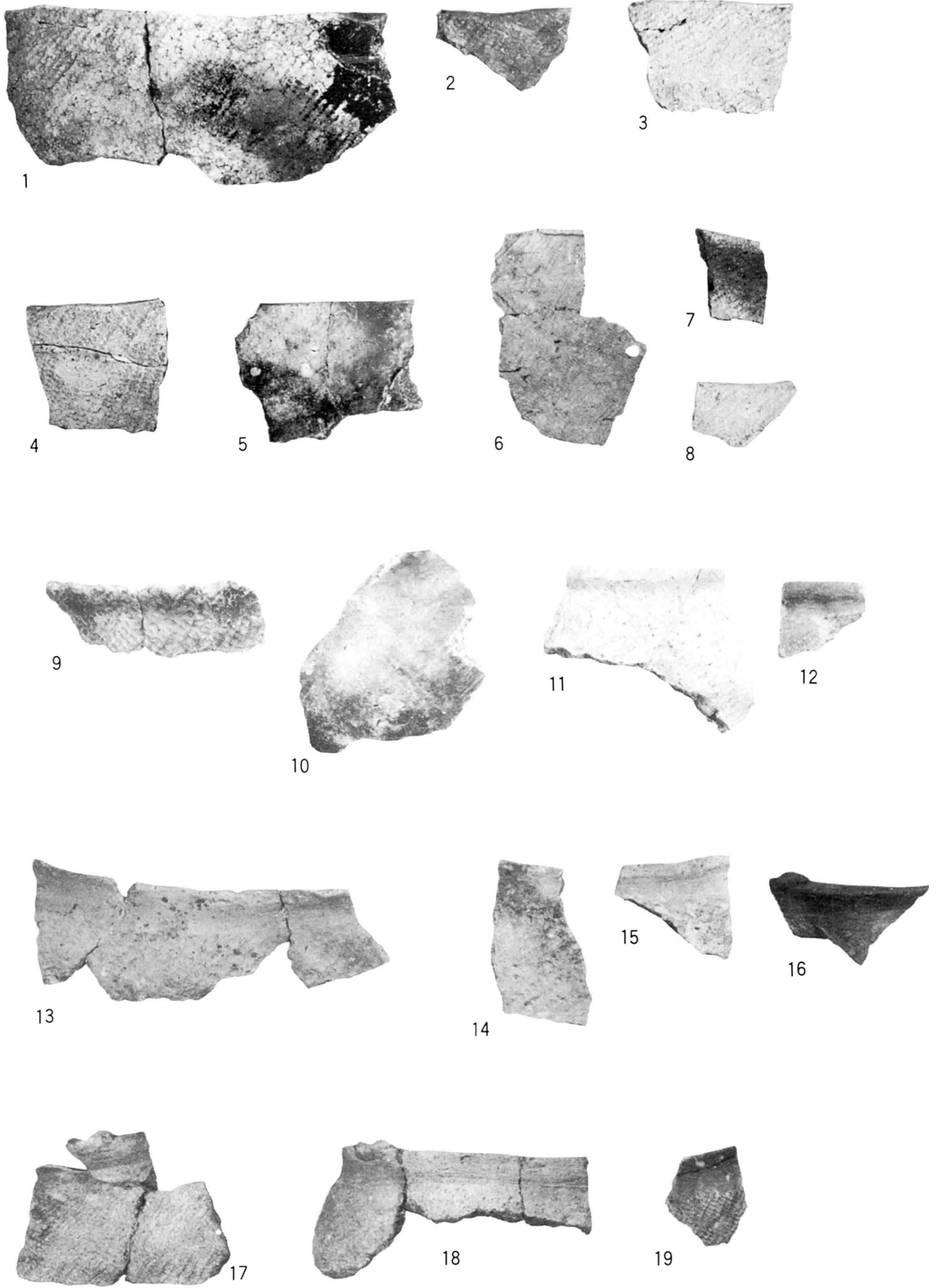


後・晩期の土器
図版10



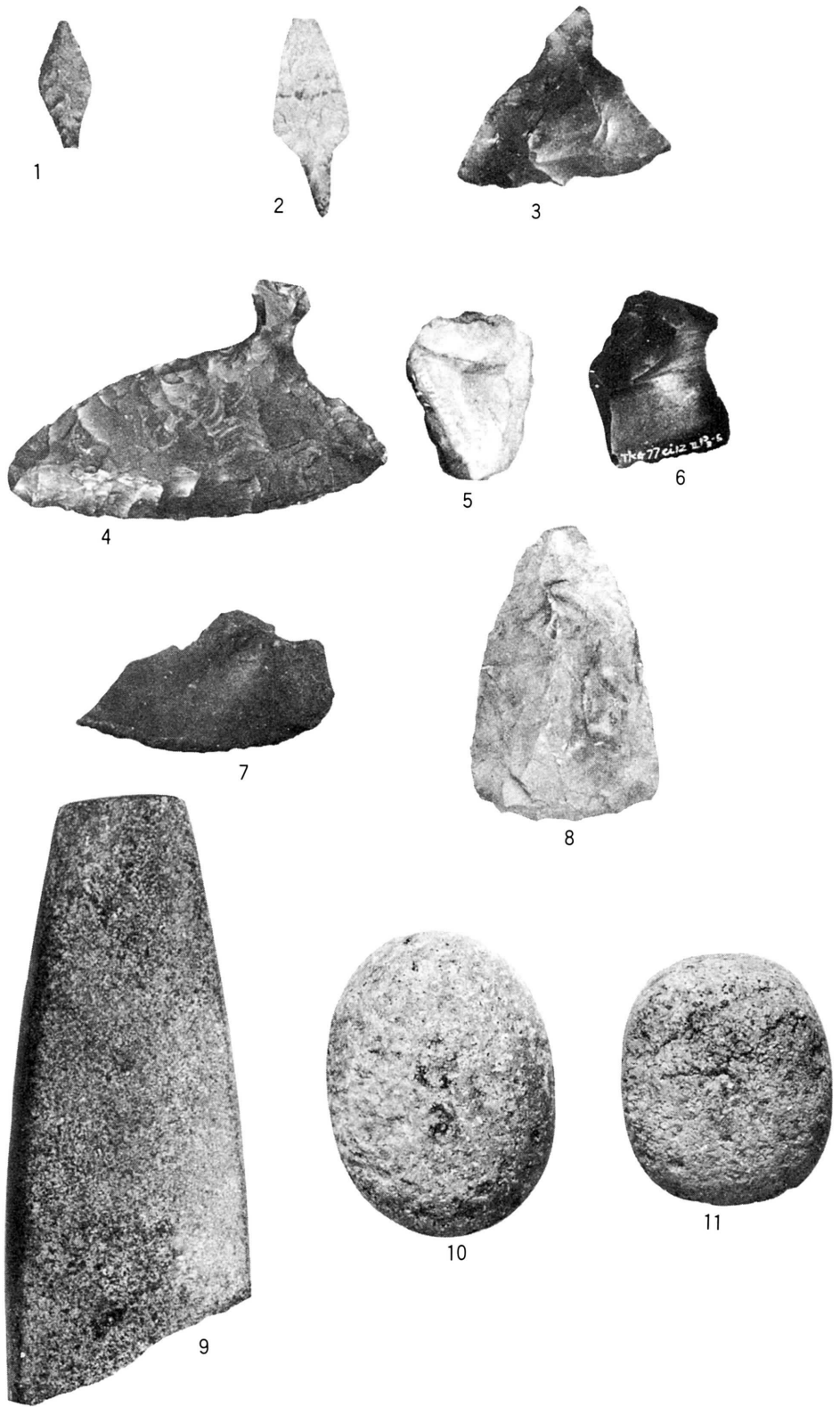
後・晩期の土器

図版11



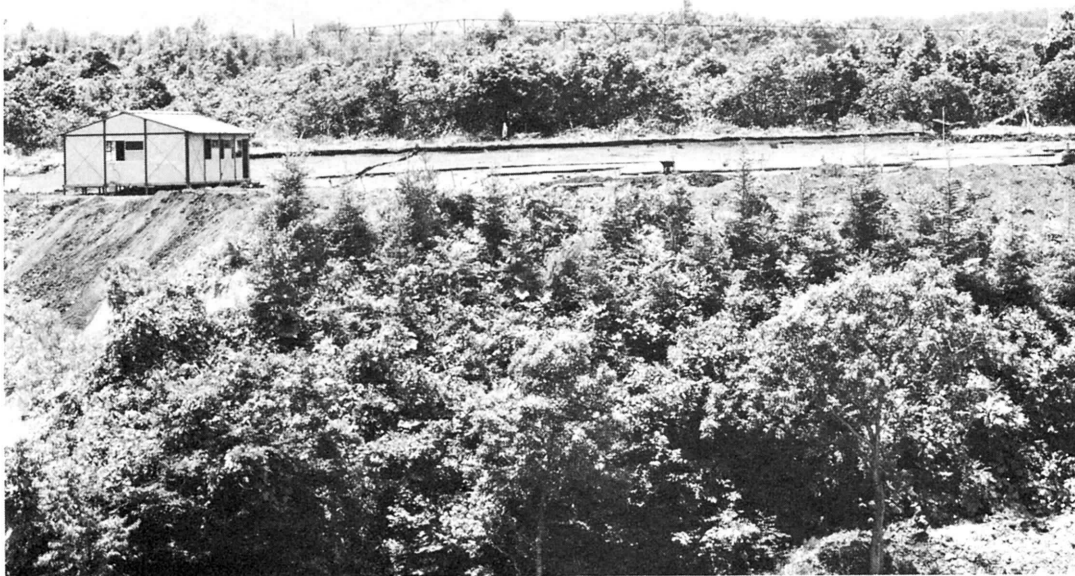
後・晩期の土器

図版12



石器 (縮尺不同)

卯 遠 坂 遺 跡



上：卯遠坂遺跡遠景（東から望む）

下：卯遠坂遺跡全景（南から望む調査前）

図版 1



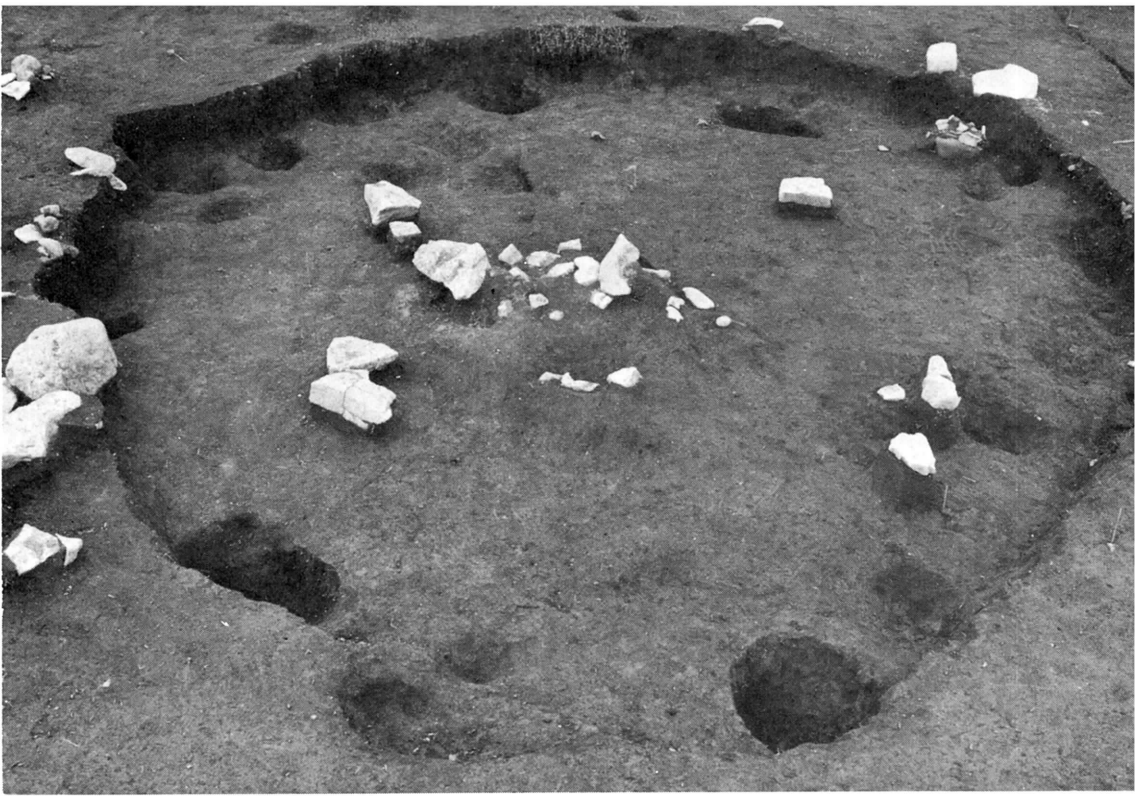
上：第1 豎穴住居跡



中：第1 豎穴住居跡炉跡



下：第1 豎穴住居跡入口



上：第2 豎穴住居跡



中：第2 豎穴住居跡埋設土器



下：第2 豎穴住居跡
ピット内土器出土状況



上：第16豎穴住居跡



中：第16豎穴住居跡炉跡平面



下：第16豎穴住居跡炉跡断面（東西）

上：第11豎穴住居跡
炉跡断面(東西)



中：第14豎穴住居跡
炉跡断面(東西)

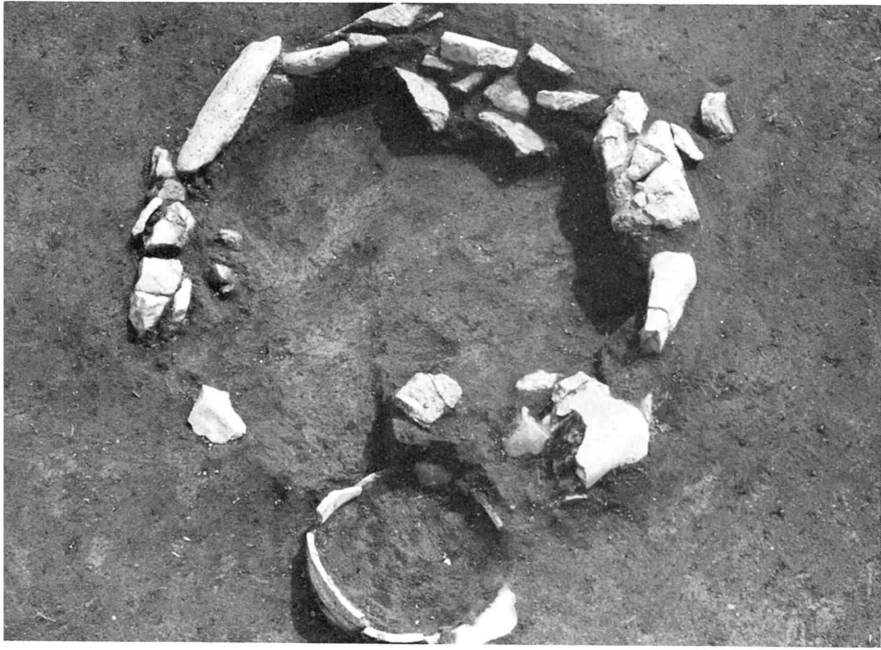


下：第7豎穴住居跡
炉跡断面(東西)





上：第2 炉跡平面



中：第7 豎穴住居跡
炉跡平面



下：第6 豎穴住居跡
炉跡平面

上：第3 フラスコ状土壌



中：第1 フラスコ状土壌



下：第2 フラスコ状土壌

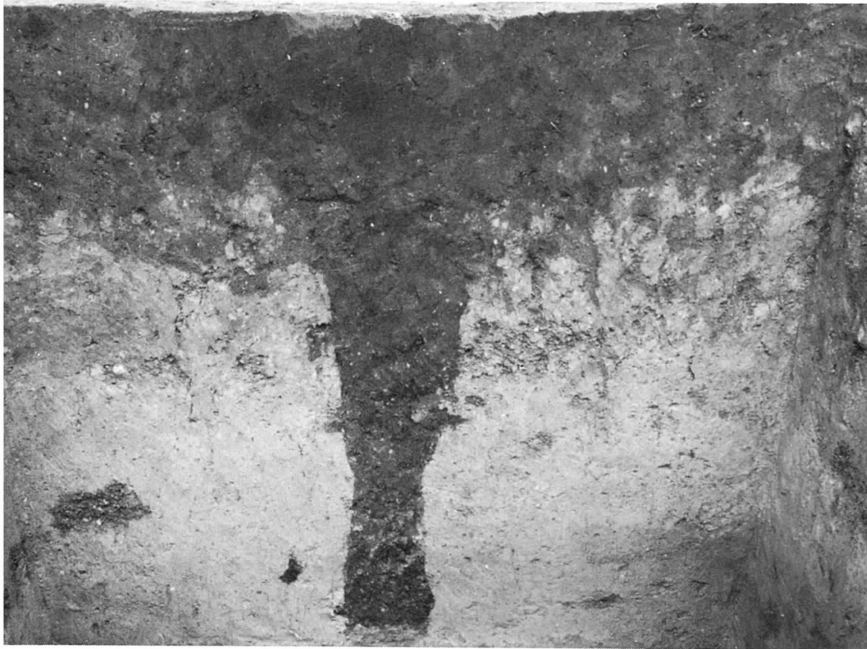




左：第4 フラスコ状土壌断面（東西）



右：第4 フラスコ状土壌壁面小穴



下：溝状土壌断面(南北)

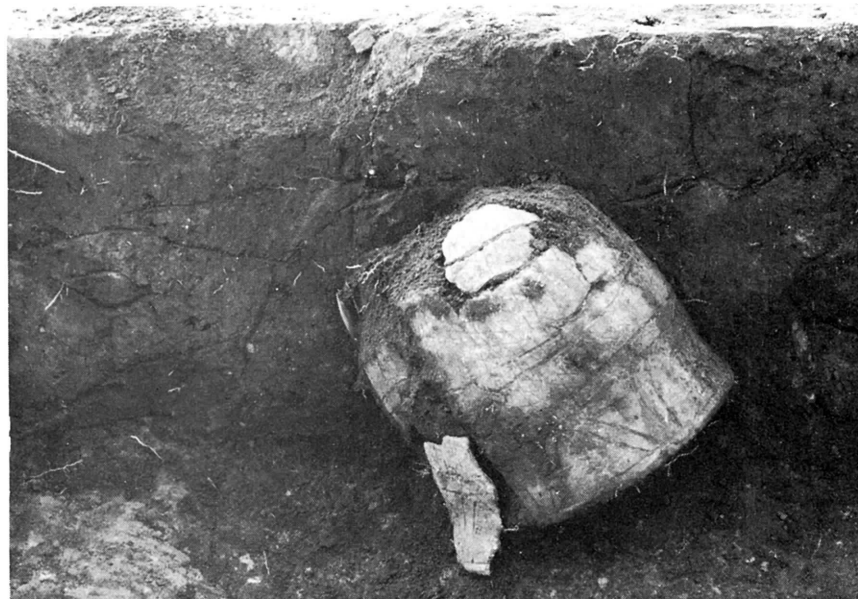
上：第6 フラスコ状土壇
断面（東西）

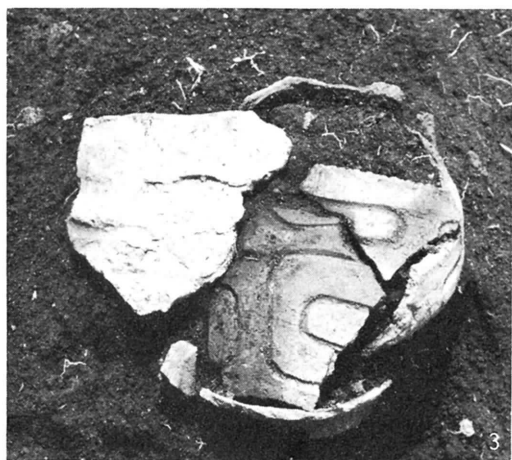
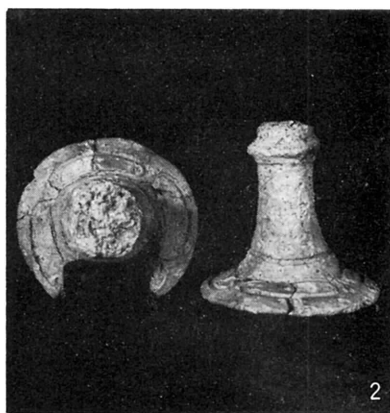
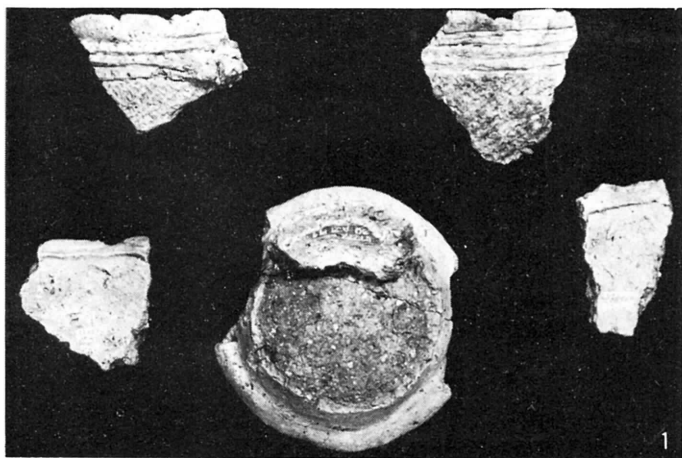


中：第6 フラスコ状土壇
土器出土状況

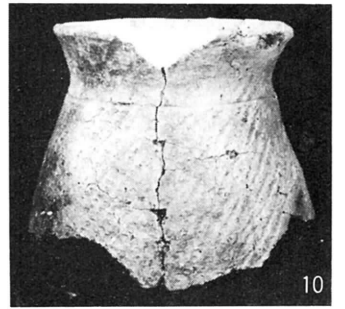
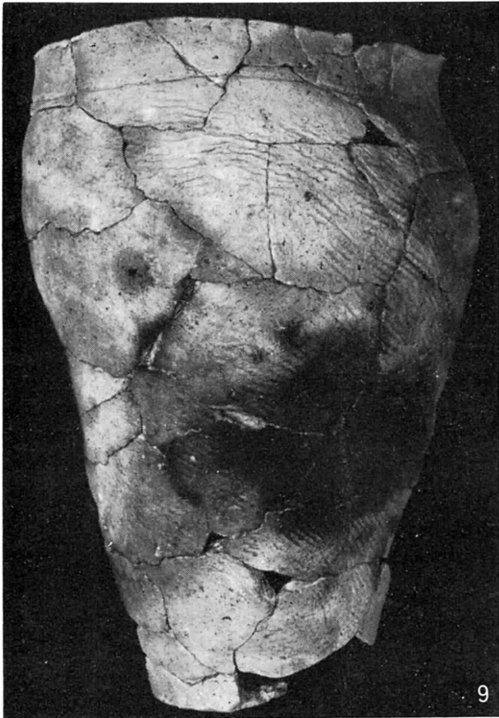
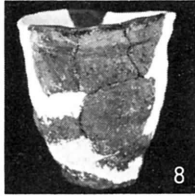
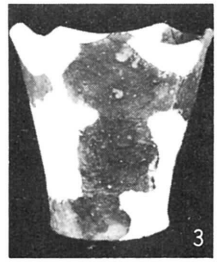
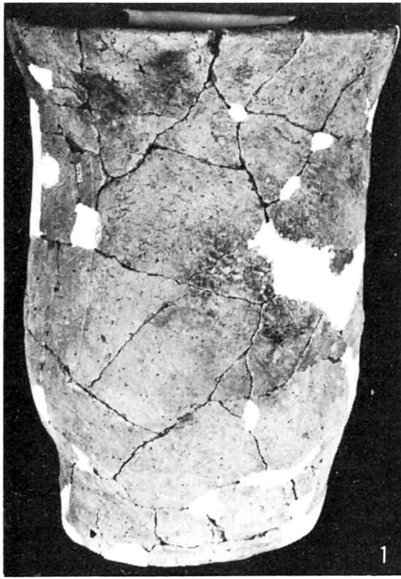


下：埋設土器断面(南北)





1 : IV 2-2 (S=1/2) 2 : 高台 (S=1/4) 3~5 : 出土状況



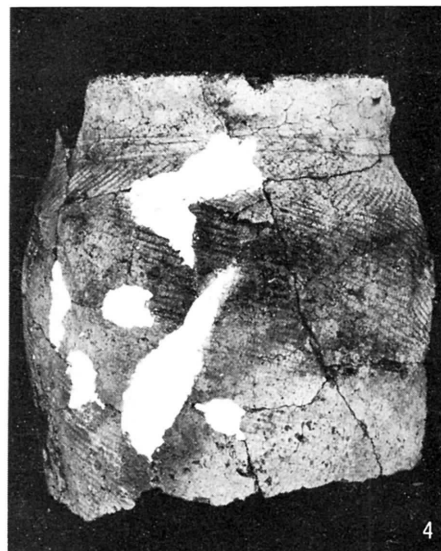
1~8 : IA類 9.10 : IB類 (S=1/4)



1



2



4



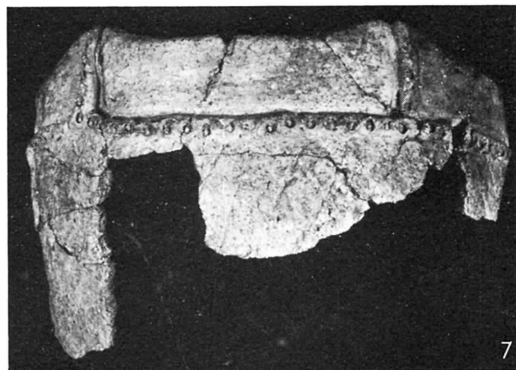
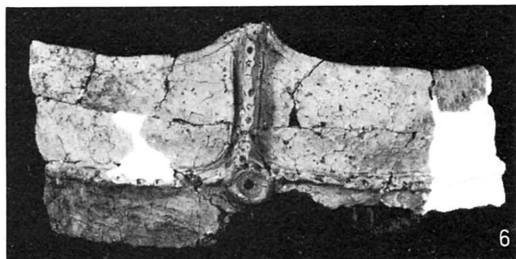
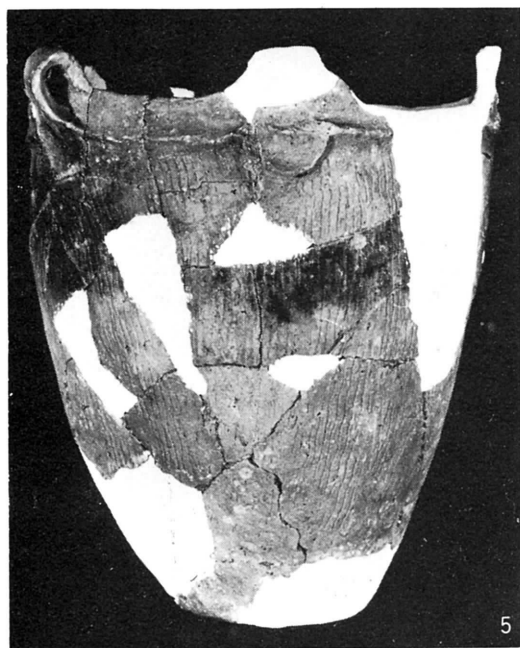
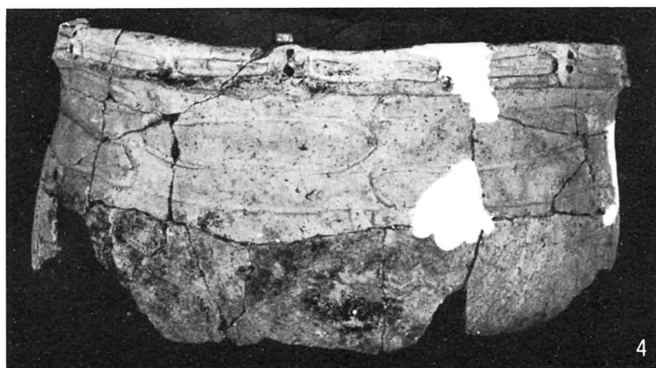
3



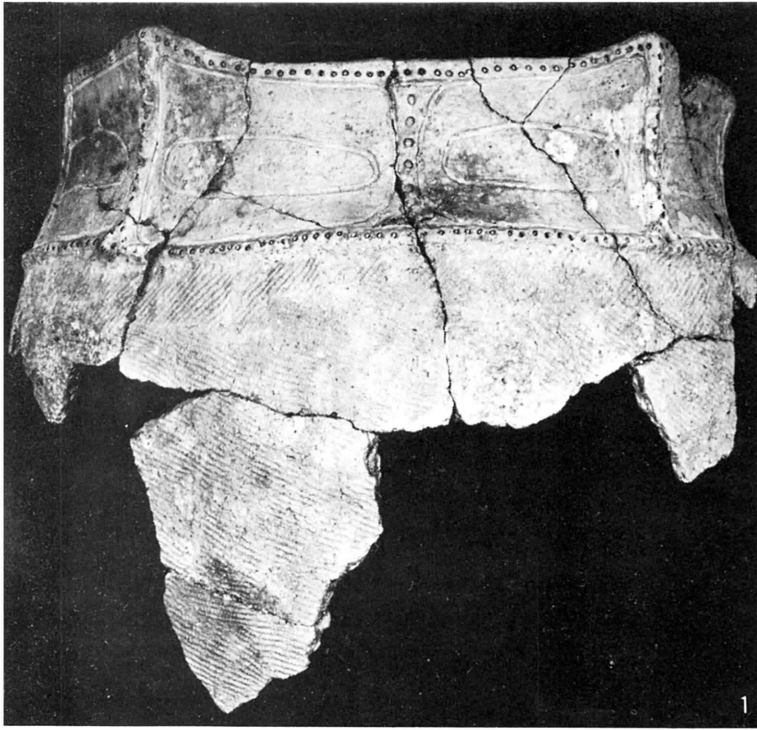
5



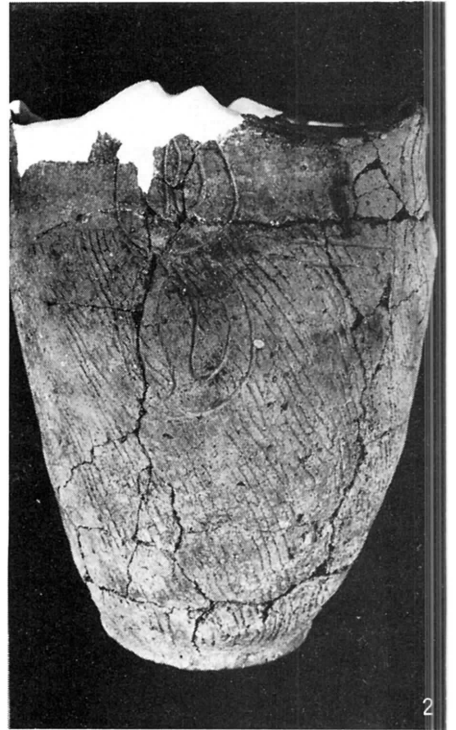
6



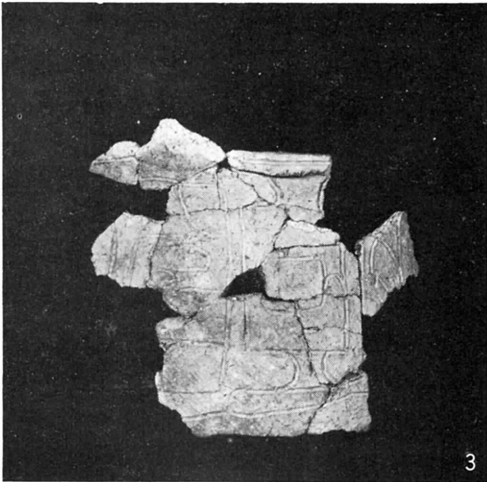
1 : II Aa1-7, 2 : II Aa2-2, 3·4 : II Aa3-5·6
5 : II Aa4-1, 6·7 : II Aa5-5·7 S=1/4



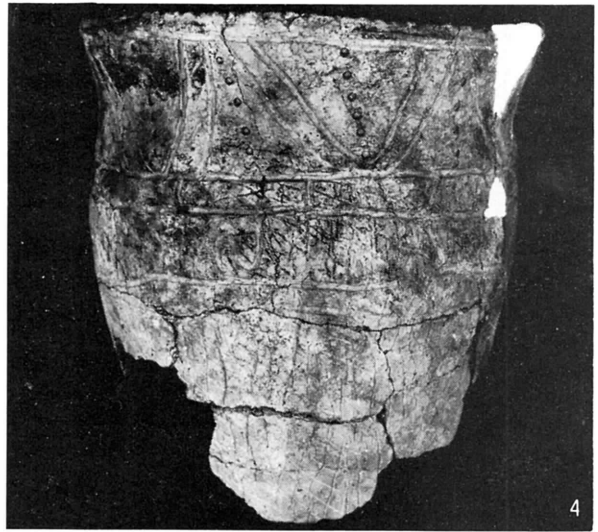
1



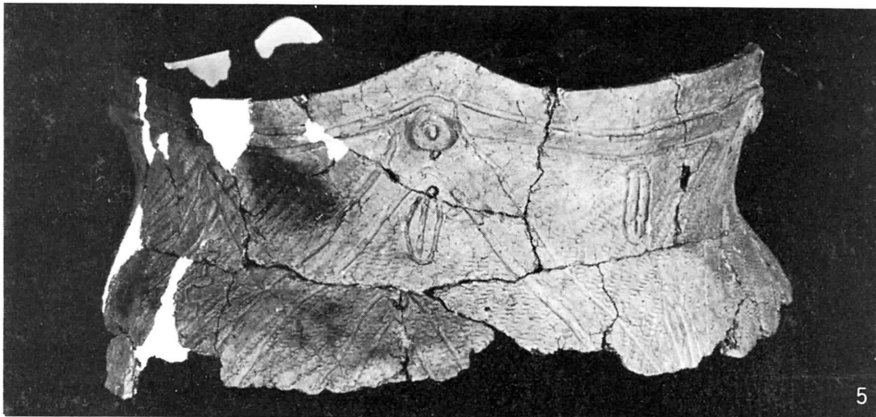
2



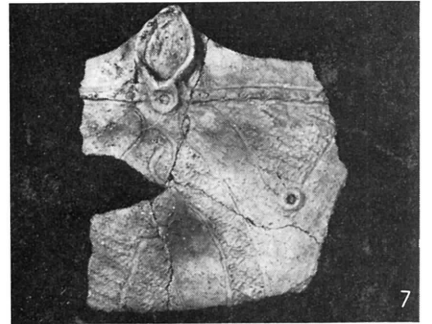
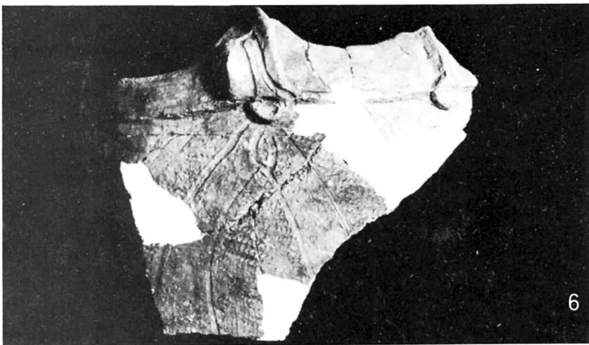
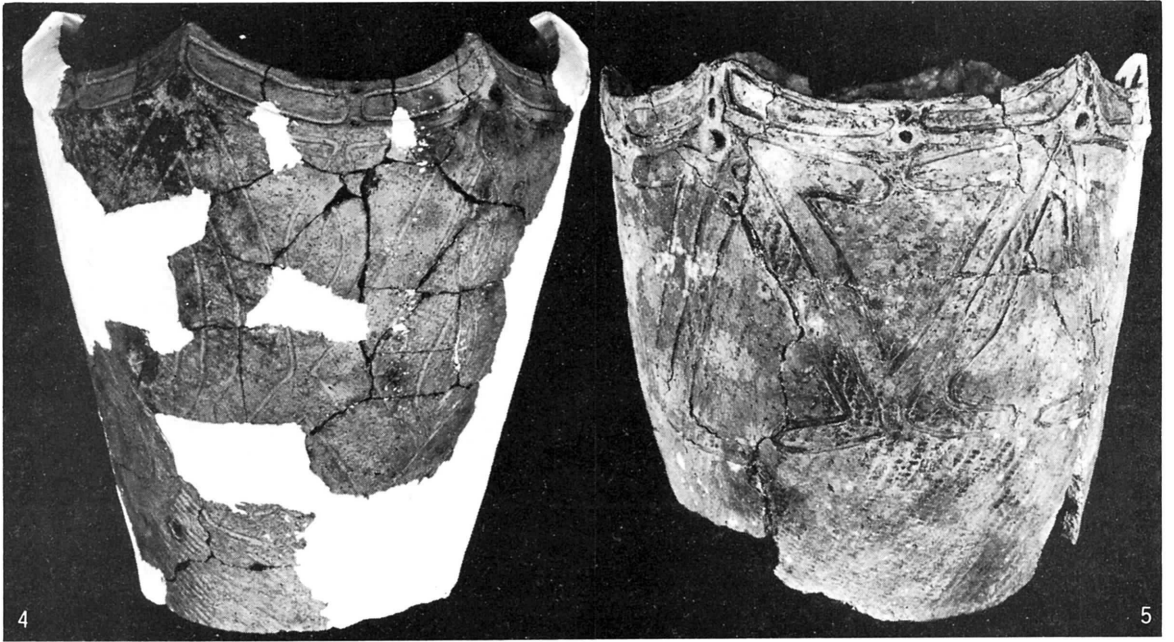
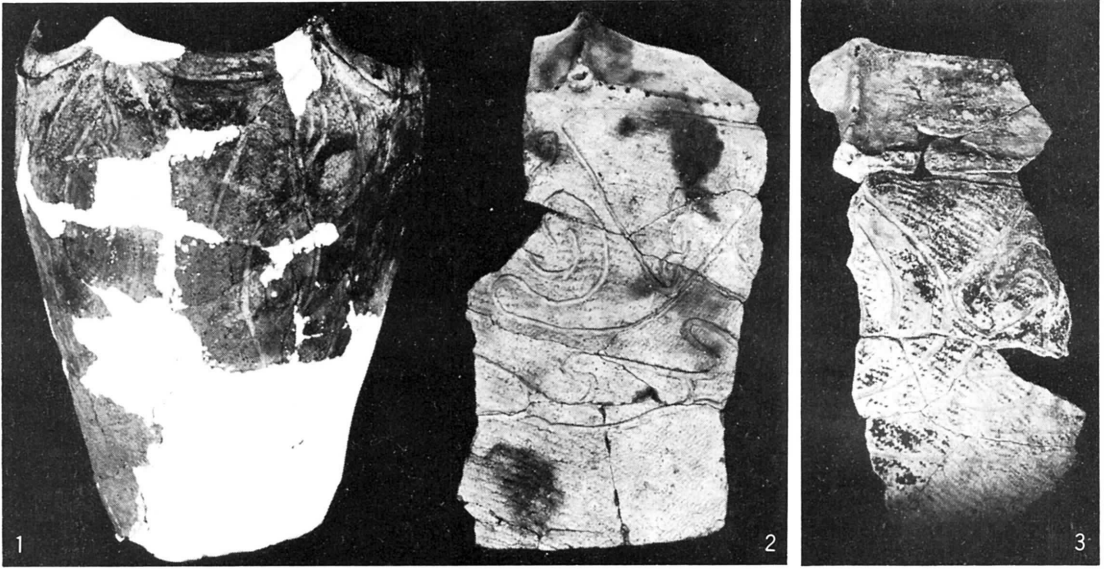
3



4



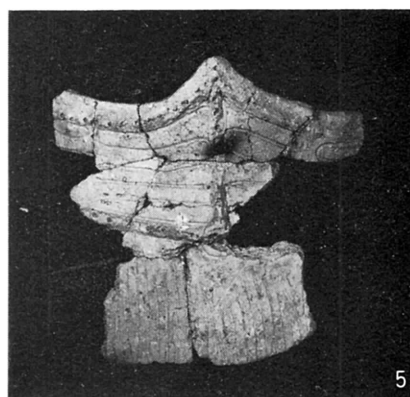
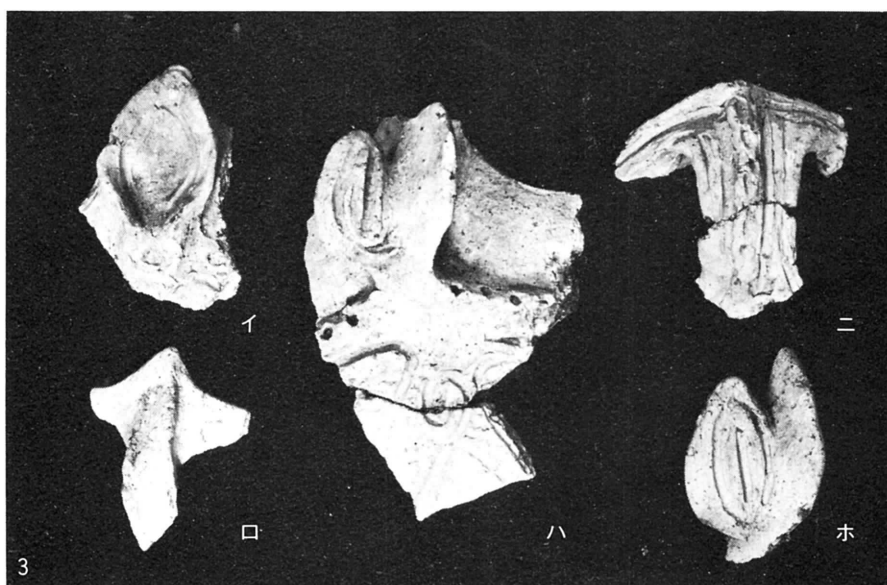
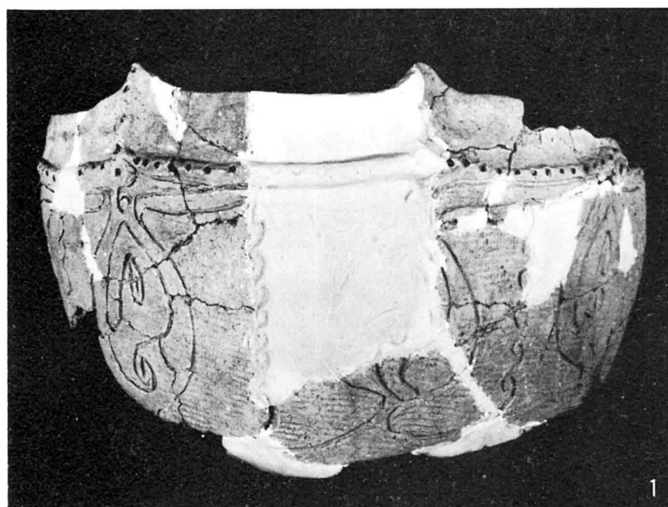
5



图版15

1·2 : IIAb3-7·9, 3 : IIAb3

4·5 : IIAb4-3·4, 6·7 : IIAb5-2·5 S=1/4

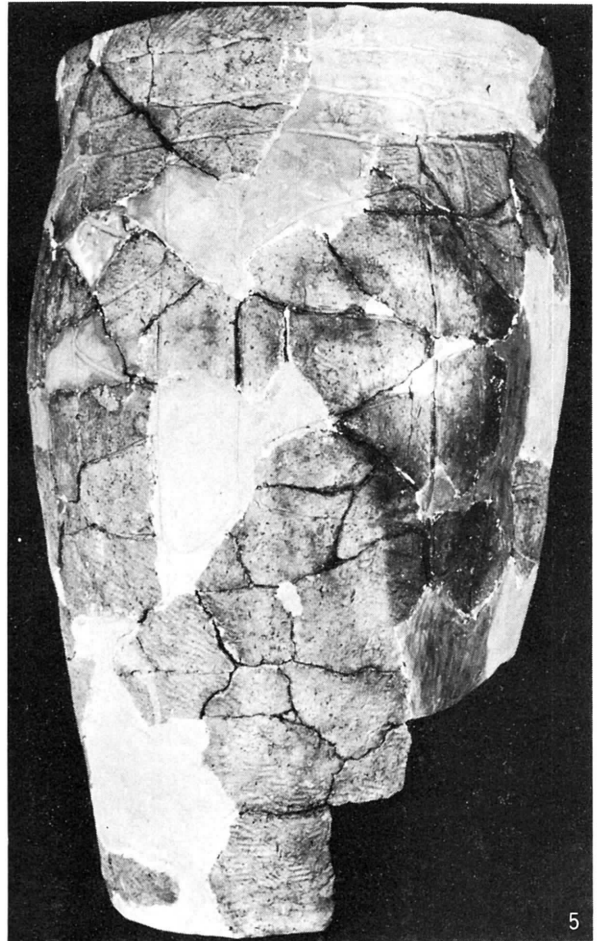
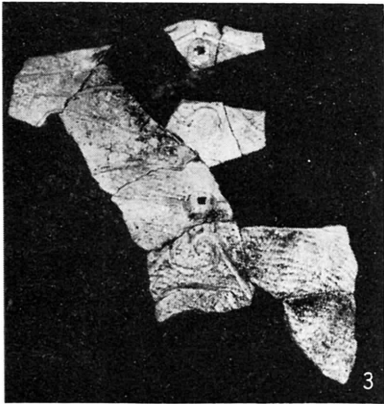
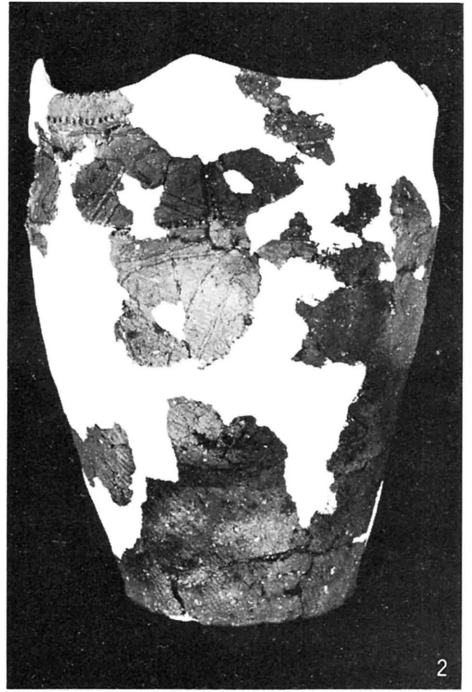
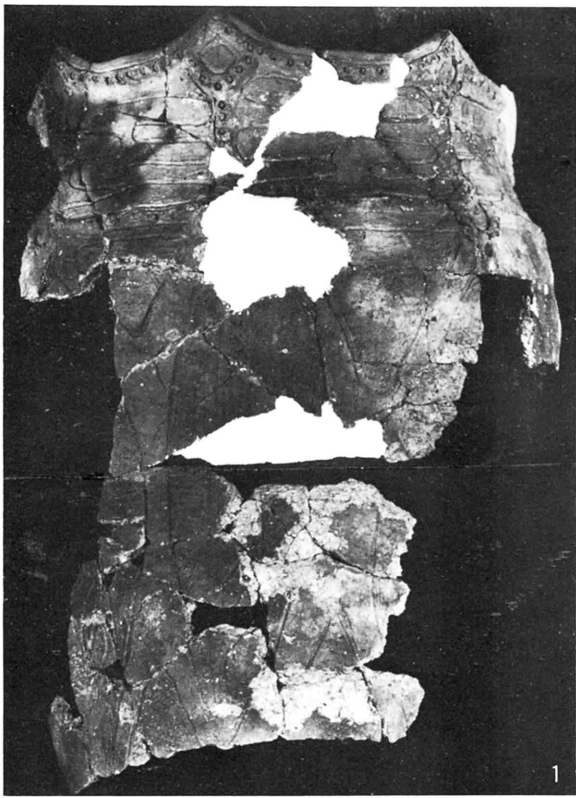


1・2 : IIAb5-4・6
4・5 : IIAb6-1・4

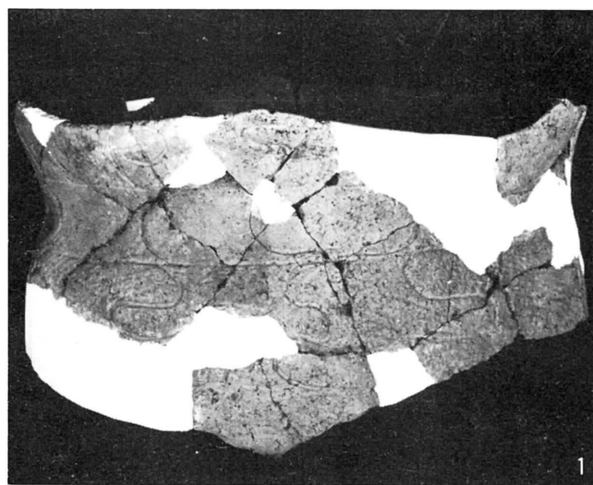
S=1/4

3-イ・口・ニ・ホ:貼付文
3-ハ:IIAb5-3

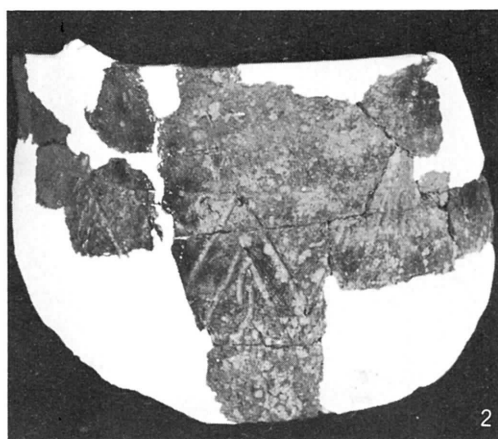
S=1/2



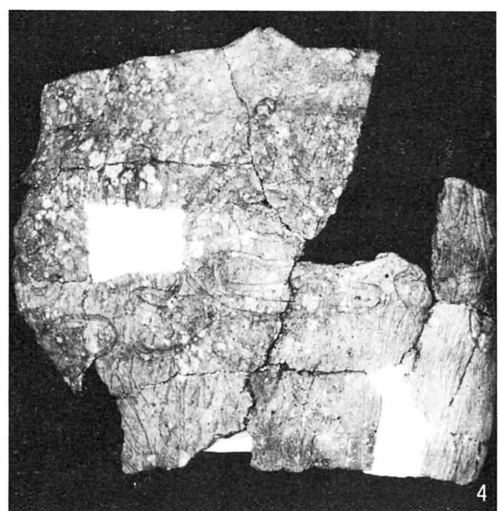
图版17 1·2 : IIAb6-5·7, 3·4 : IIAb7 - 1·2
5 : IIAc1-1 S=1/4



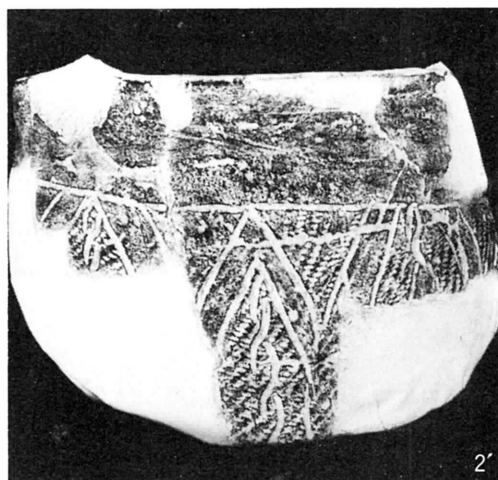
1



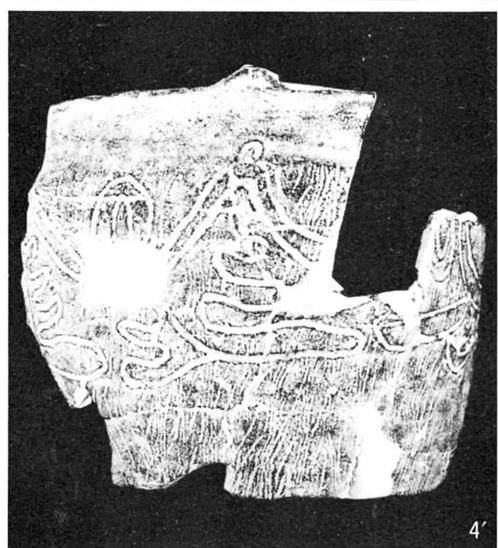
2



4



2'



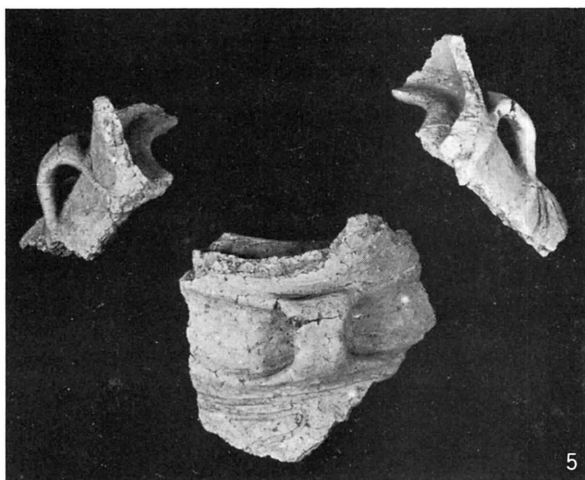
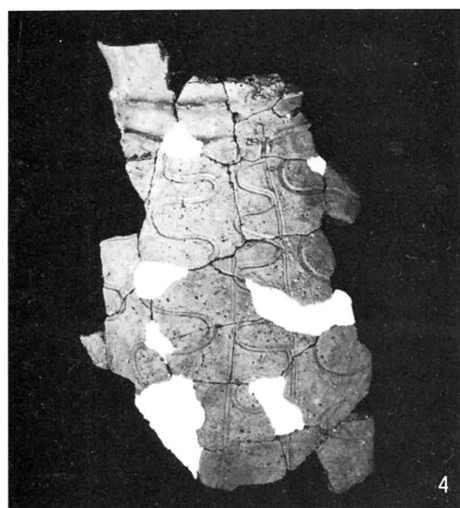
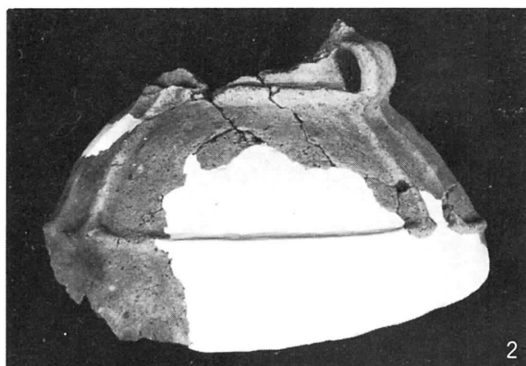
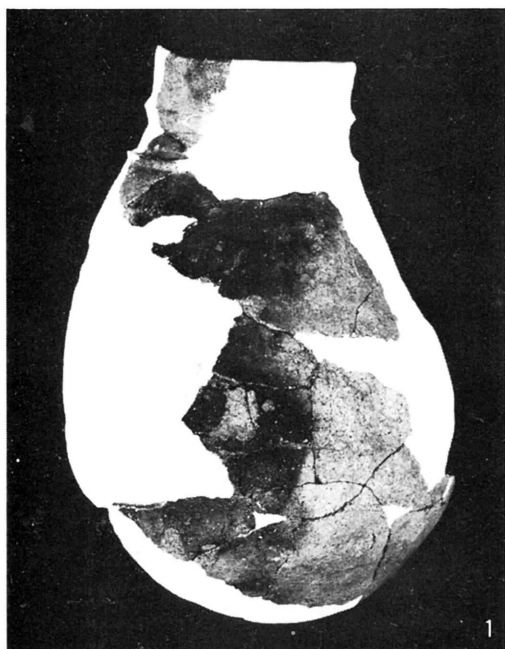
4'



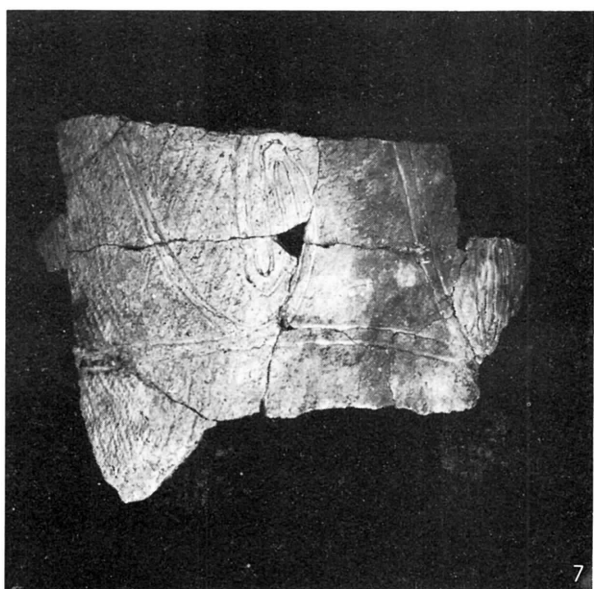
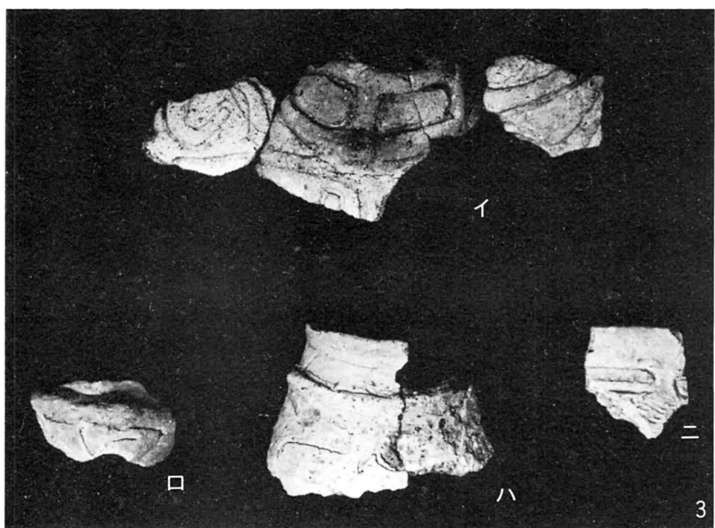
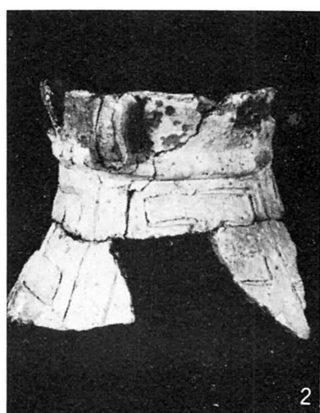
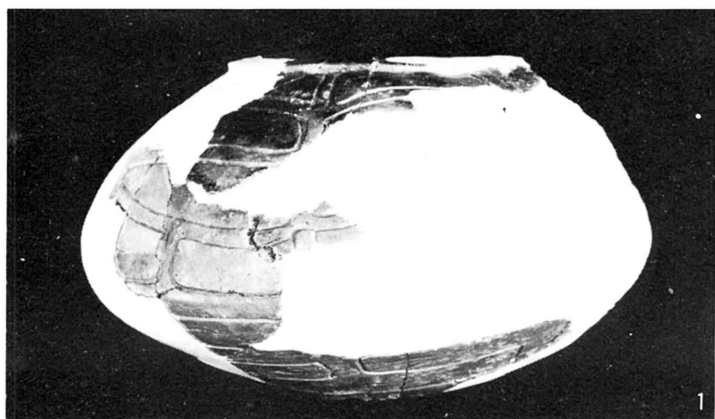
3

1 : IB-4, 2·3·4 : IC1-1·2·3 S=1/4

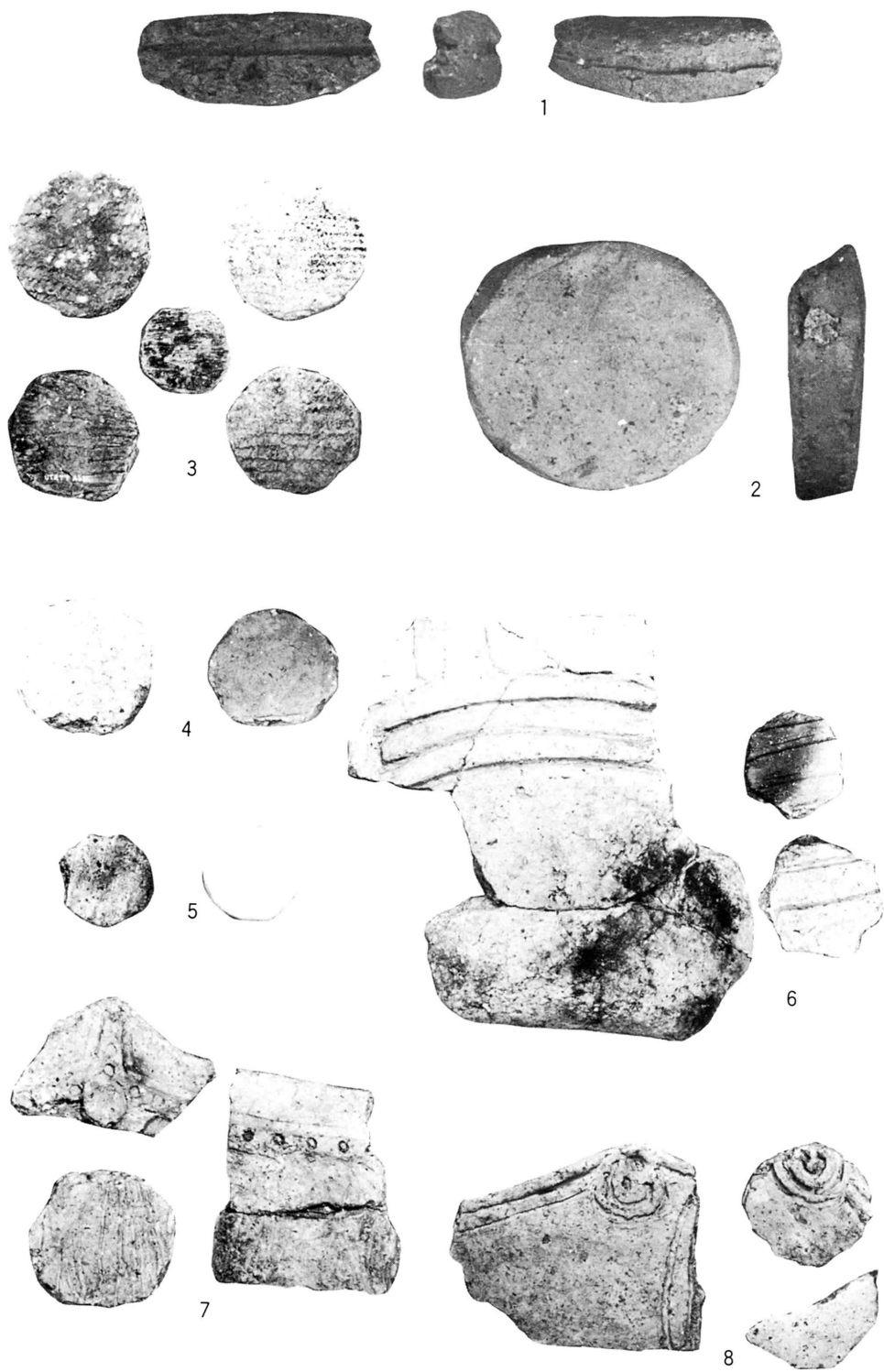
图版18



1~4 : II C2-2~5, 5 : II C2-7
6·7 : II C2-9·10 S=1/4

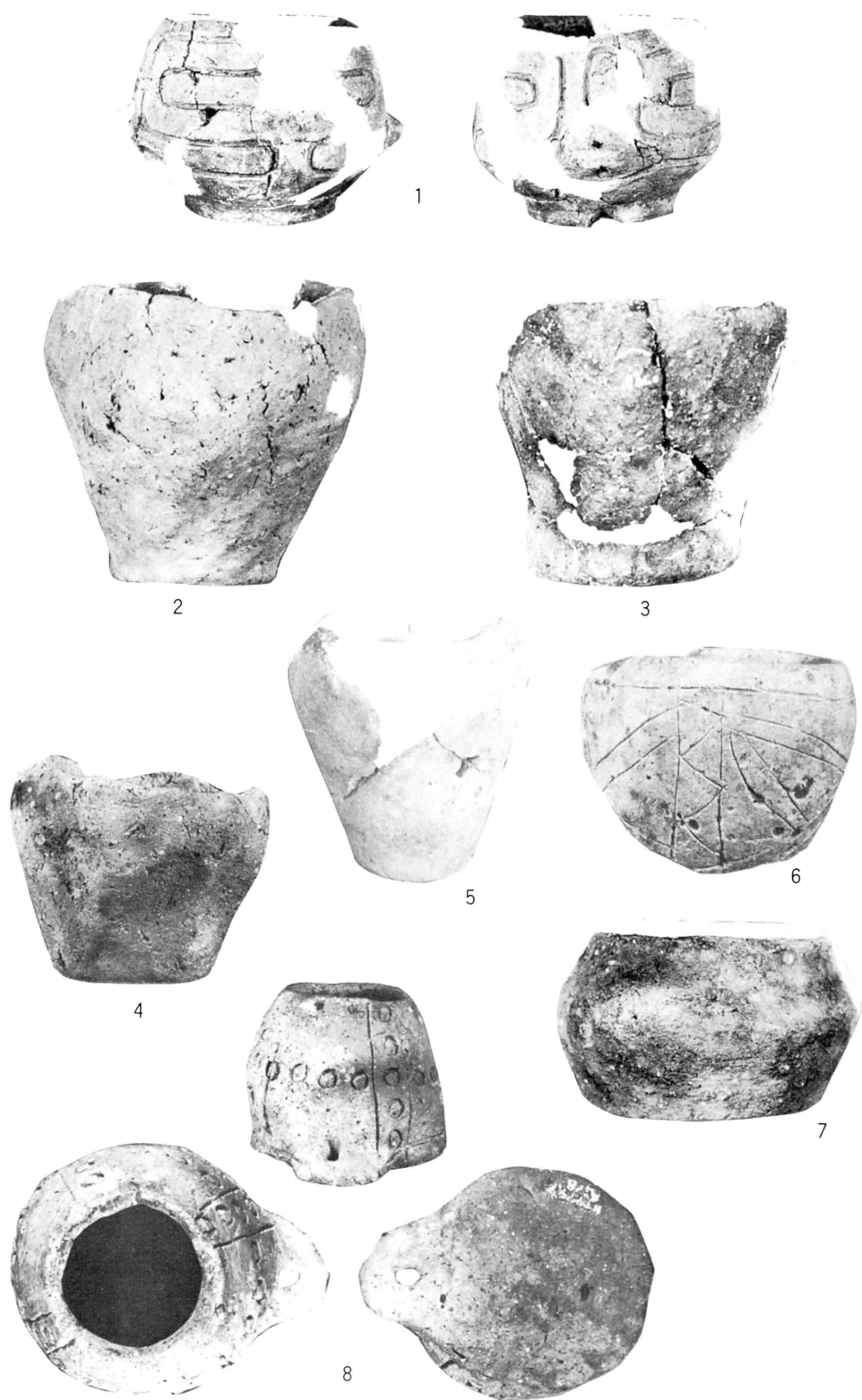


1 : IIAb1-12, 2 : IIAb4-5 S=1/4 3 : 小型壺 S=1/2
4·5·6 : III 1·2·3, 7 : IV 1-2

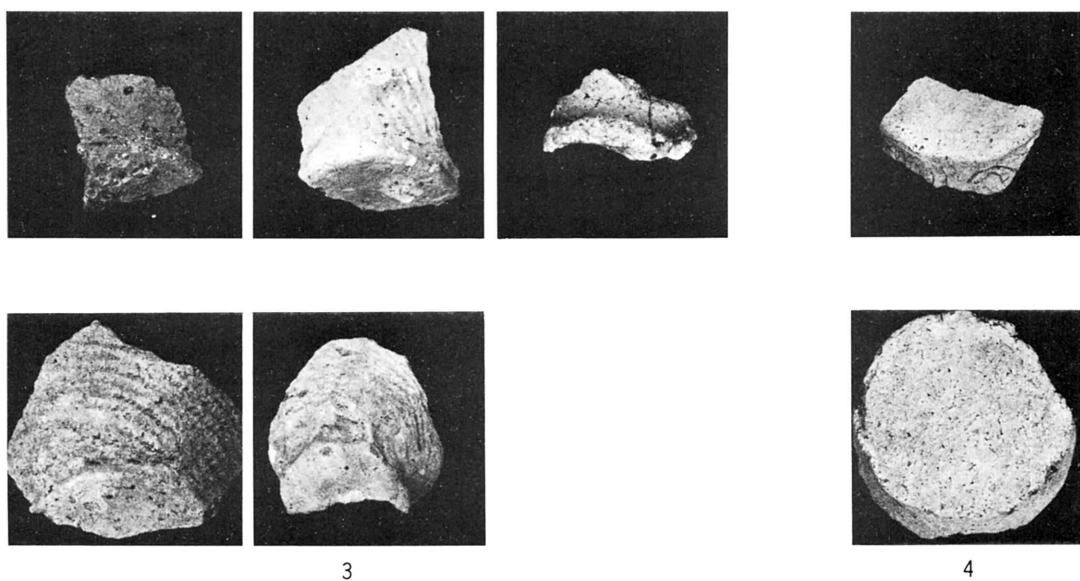
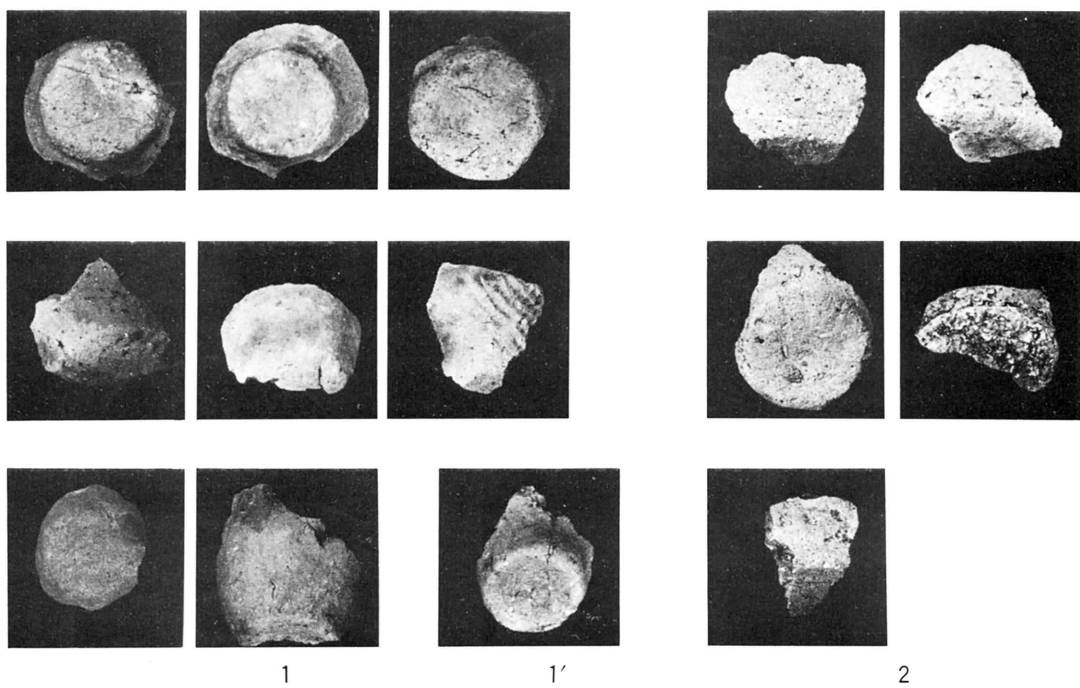


1 : 土錘 2 : 円盤状土製品 S=1/1

3・4 : 円盤状土製品(土器片利用) 6~8 : 土器片との関係 S=1/2
 (5 : 円盤状石製品)



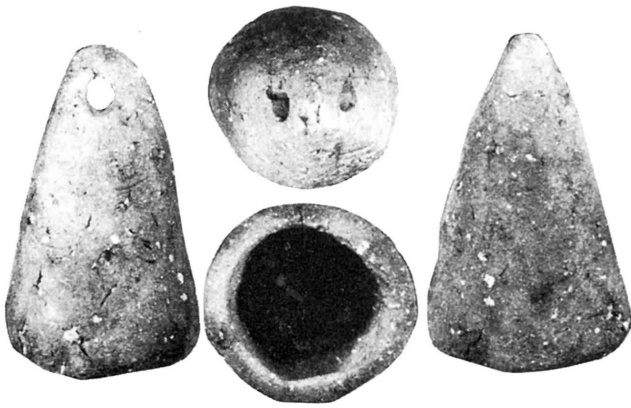
小型土器 1 : S=1/2 2~8 : S=1/1



小型土器 (底部) S=1/2



1

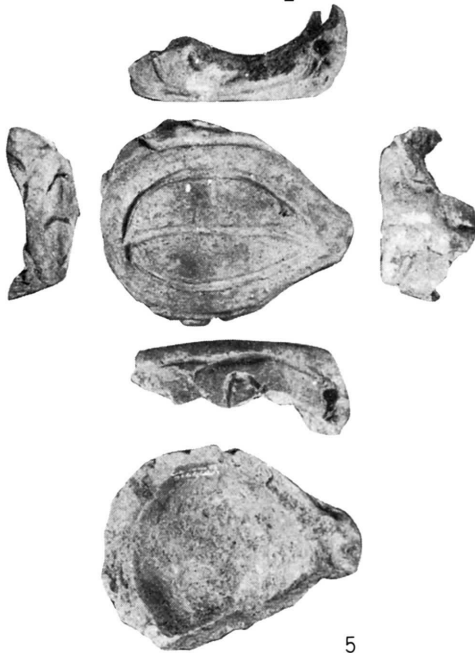


2



3

4

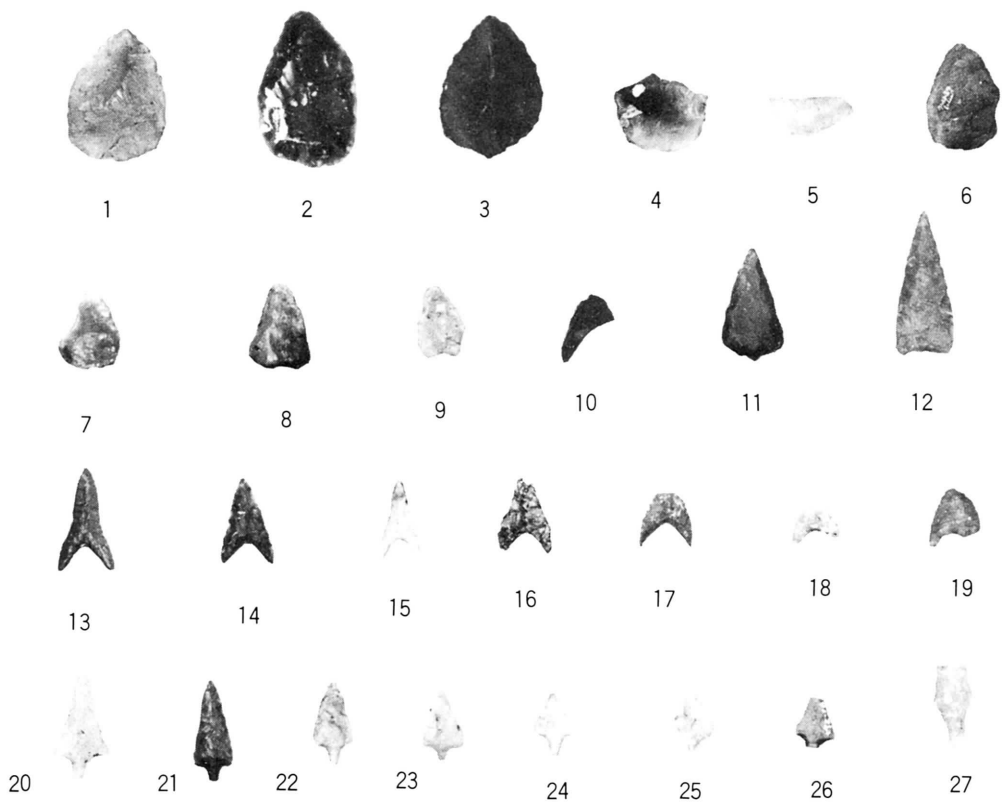


5

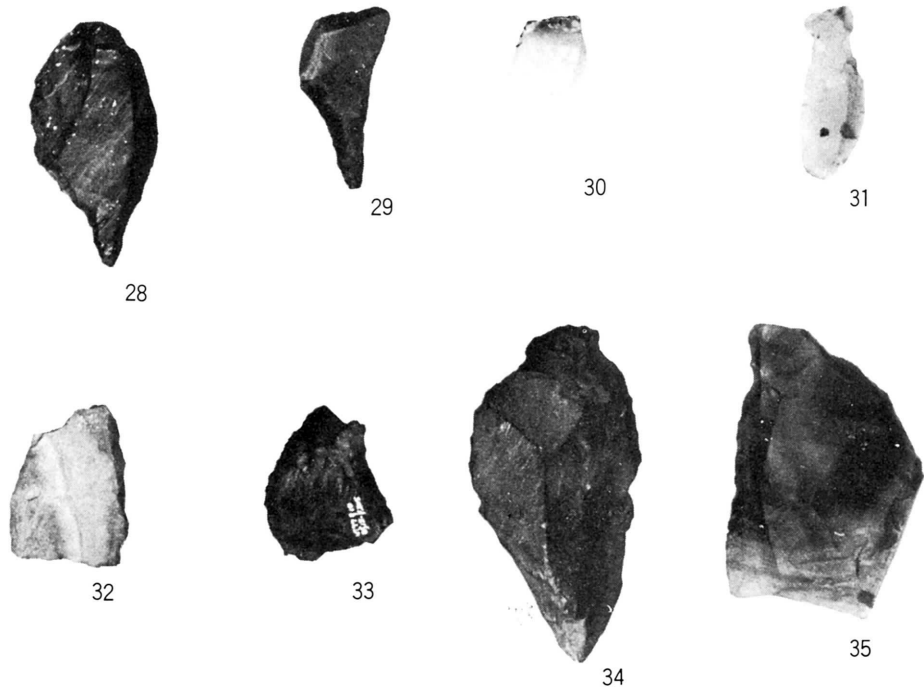


6

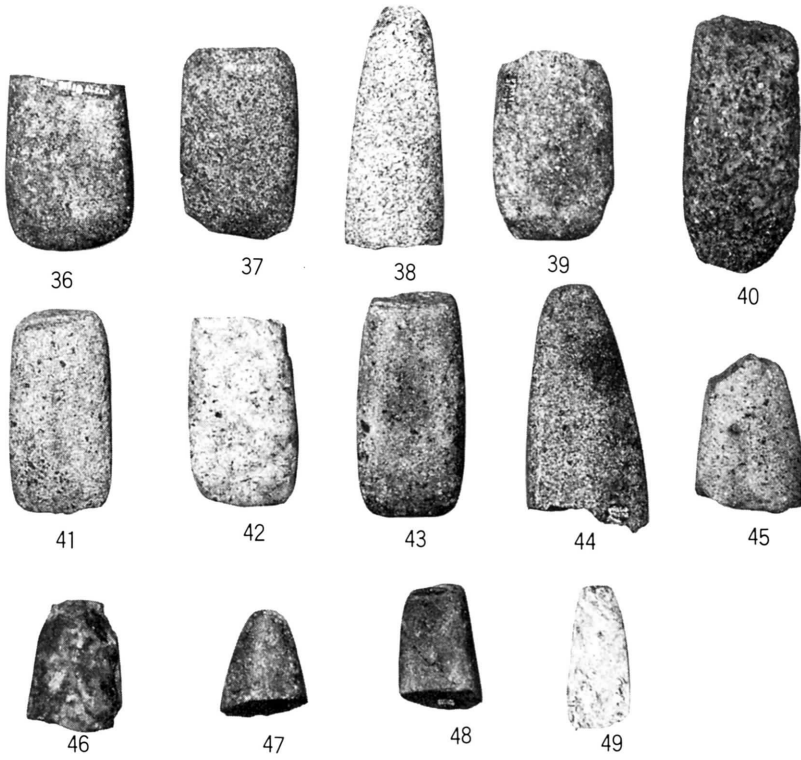
特殊土製品 S=1/1



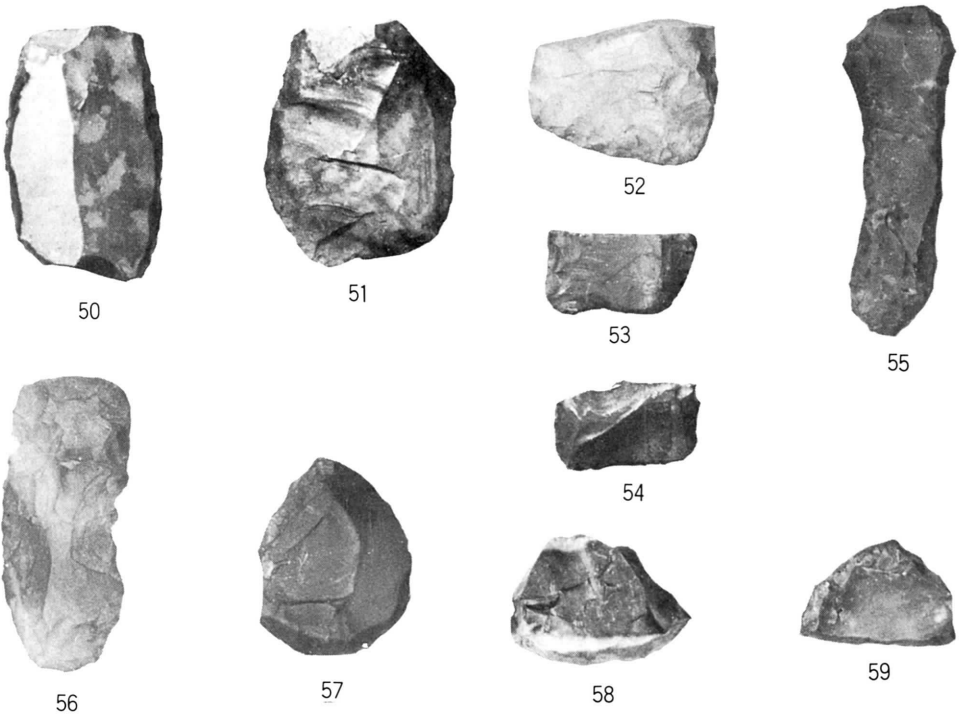
石鏃 I類 1~5 II類 6~11 III類 12~19 IV類 20~27



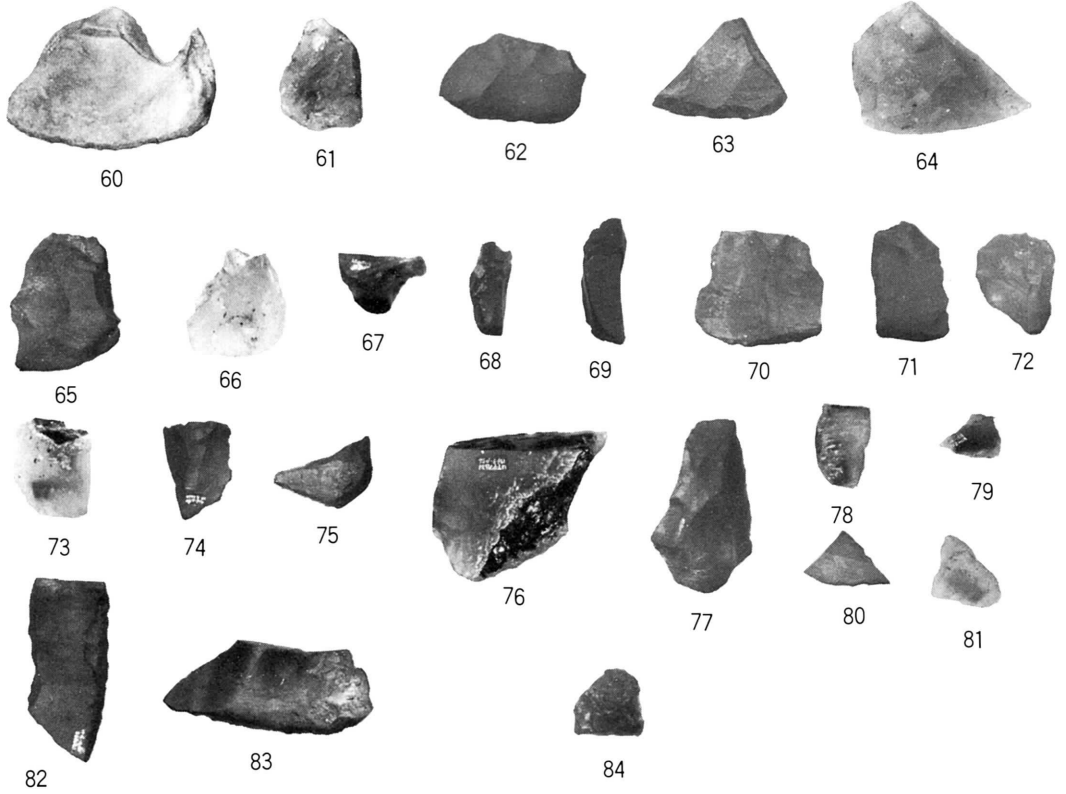
石鏃 28~30 石匙 31~35



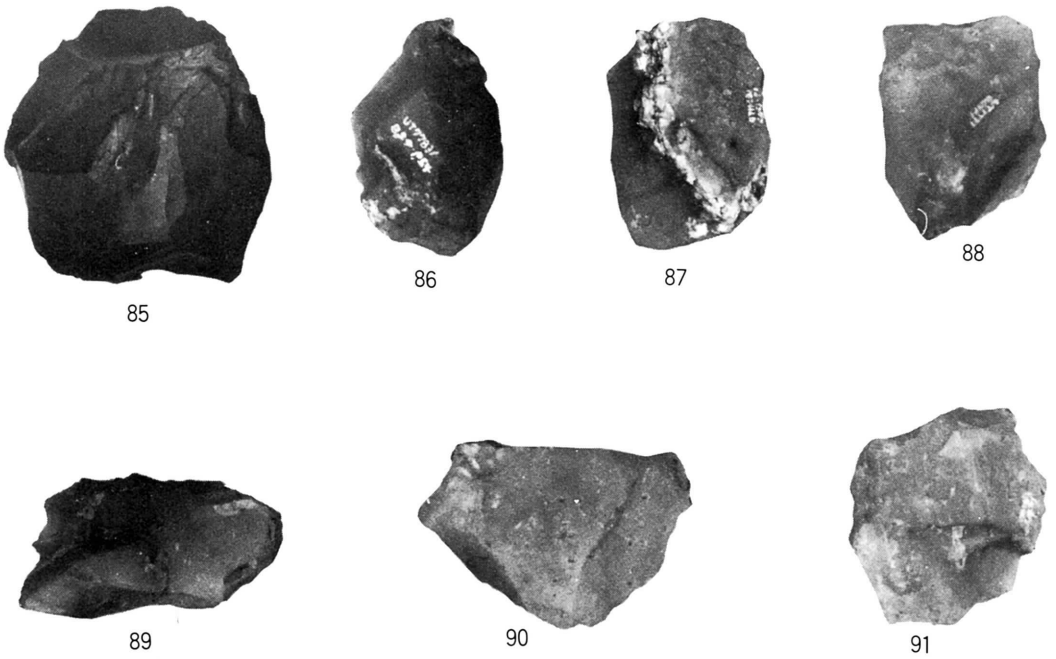
石斧



搔器 I類50~54 II類55·56 III類57~59



搔器 IV類60~83 V類84



石核



92



93



94



95



96



97



99



100



98

石核石器



101



102



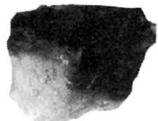
103



104



105



106



107



108



109

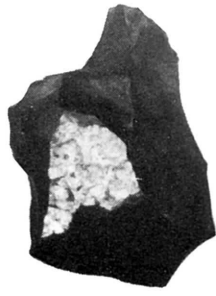


110

使用痕の有る剥片



111



112



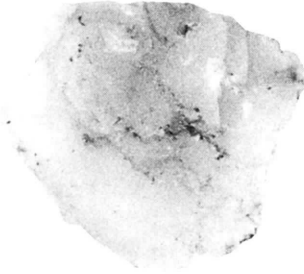
113



114

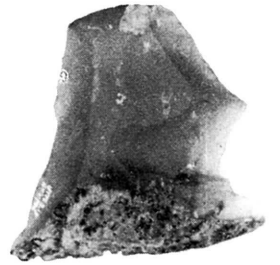


115



116

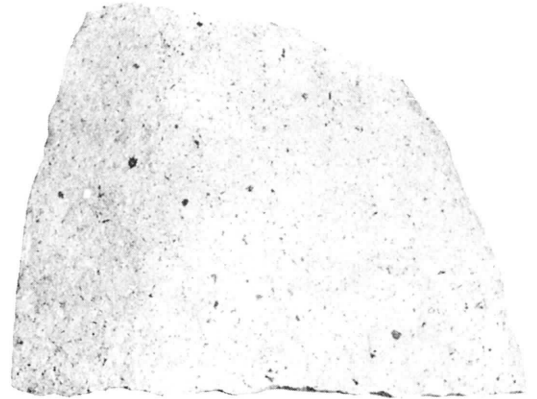
剥片



117



118



119



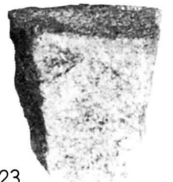
120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



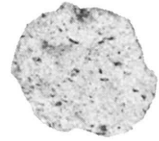
130



131



132



133

凹石 124.125 石錘 126~133



134



135



136



139



137



138



140

擦石
图版30

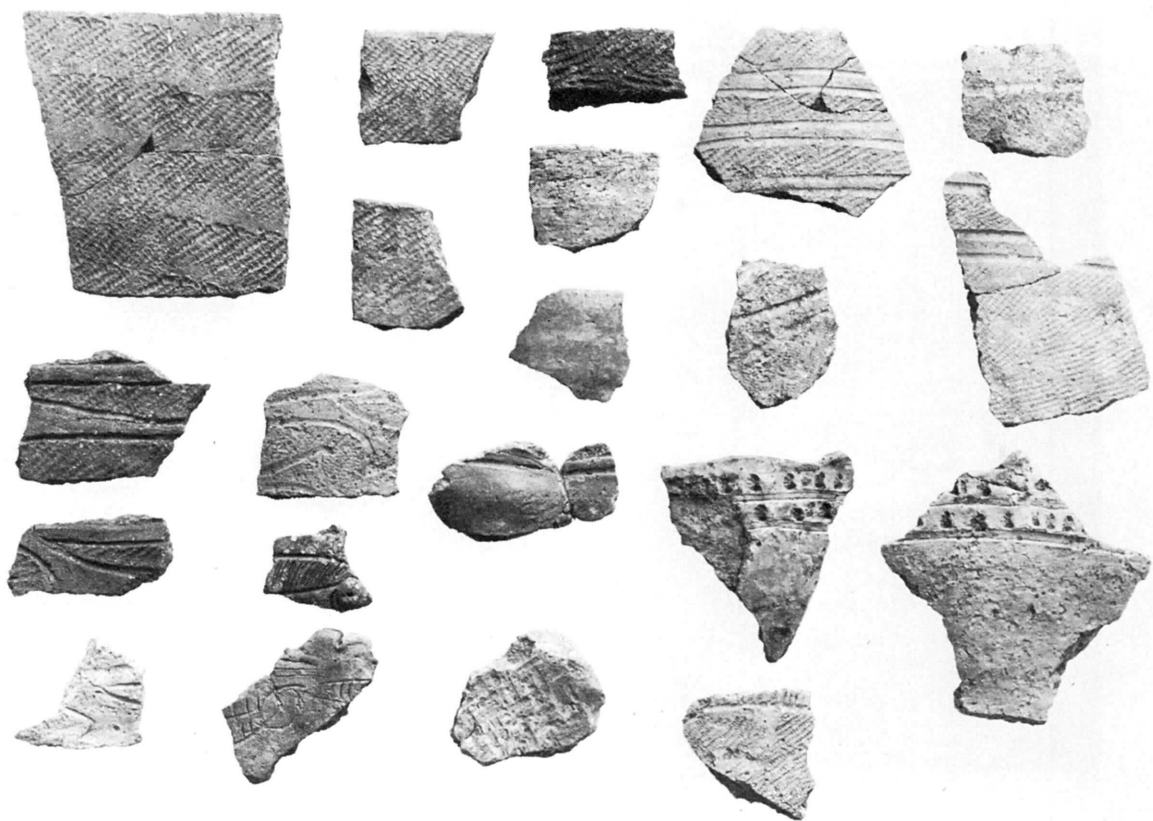
ね ほり ざか 遺 跡
根 堀 坂



1：調査地遠景

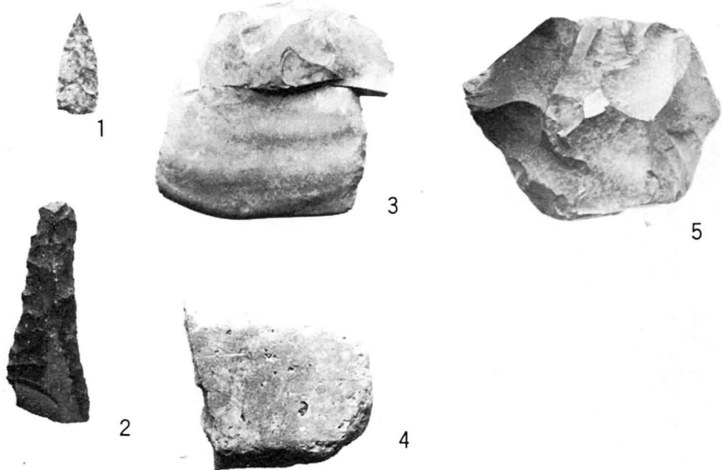
2：沢部における遺物
出土状況





2a

1



1

3

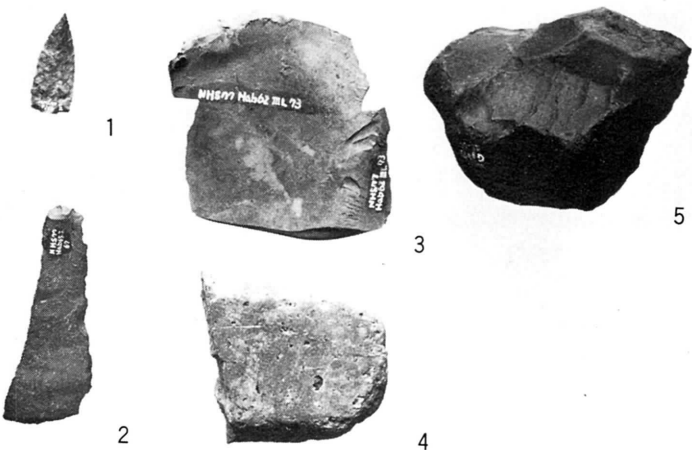
5

2

4

- 1 : 出土土器類 縄文後期主体
- 2a.2b.出土石器
- 3 : 接合資料
下半部を搔器に加工している
- 4 : 用途不明磨製石器
- 5 : 石核

2b



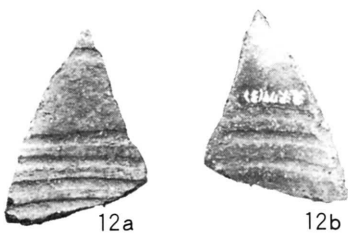
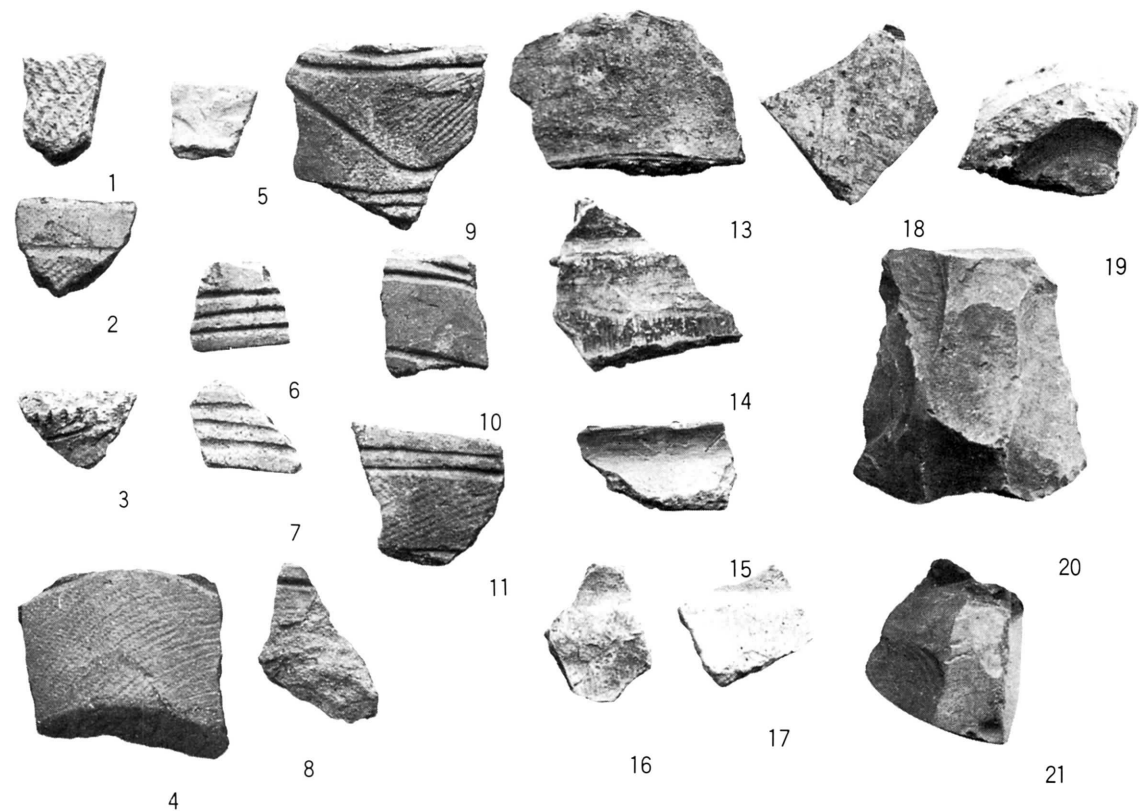
1

3

5

2

4



2：調査地附近における表面採集資料

- 1 縄文前期土器？
- 2～7 縄文晩期土器
- 8～12 弥生式土器
- 2 13～17 土師器甕
- 18・19 須恵器
- 20・21 剥片



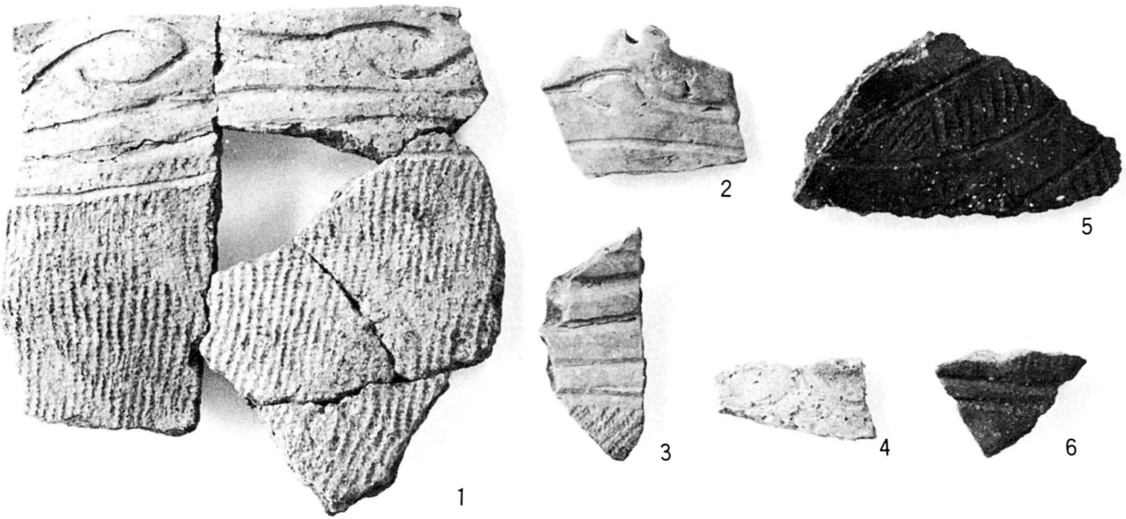
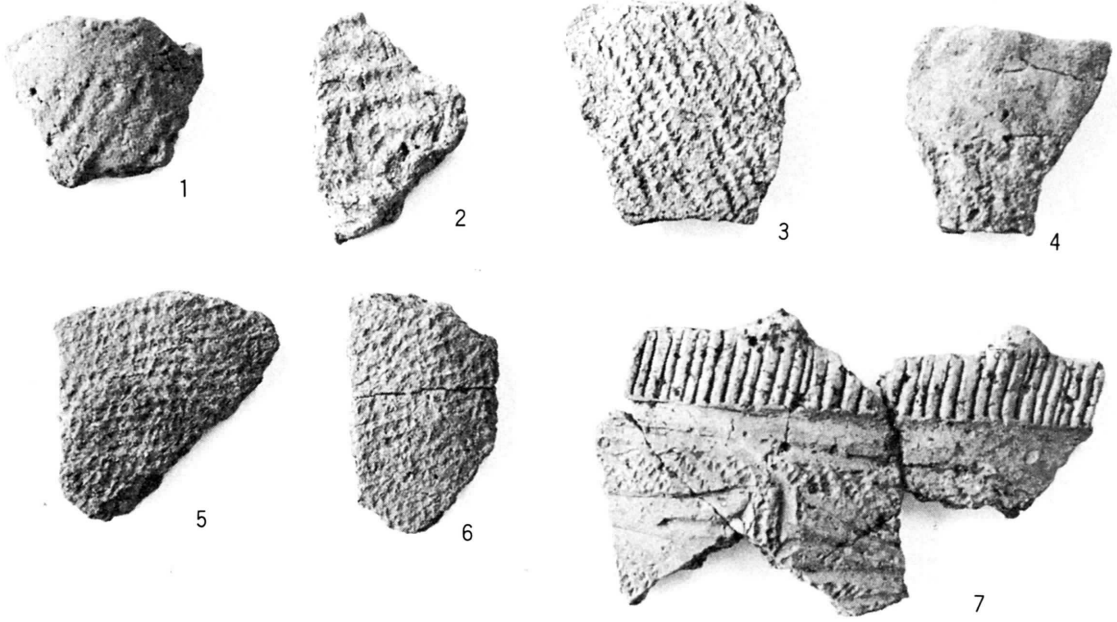
1：沢部出土縄文晩期土器

高屋敷(Ⅲ)遺跡

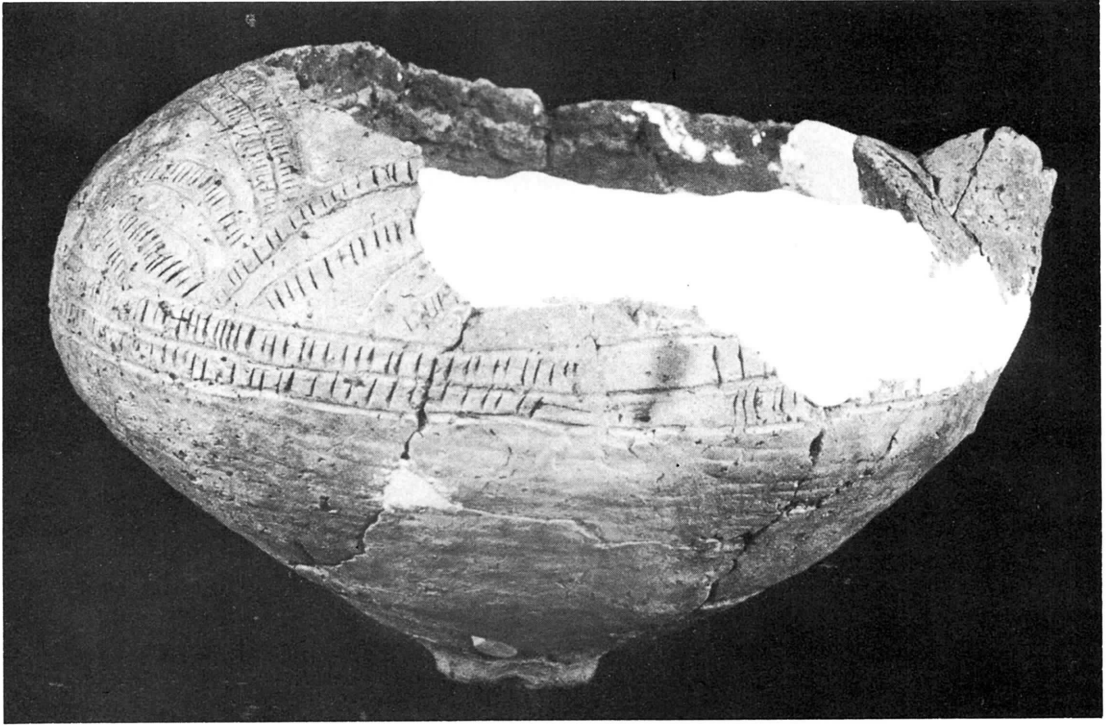


上：高屋敷Ⅲ遺跡遠景（北から望む調査前）

下：高屋敷Ⅲ遺跡全景（南から望む調査後）

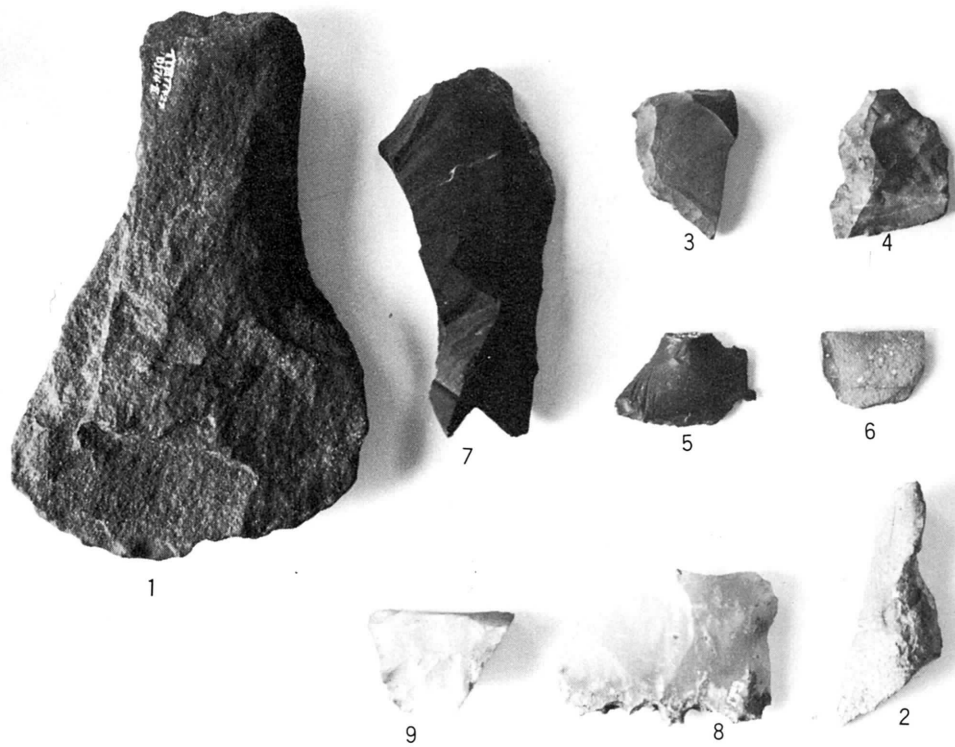
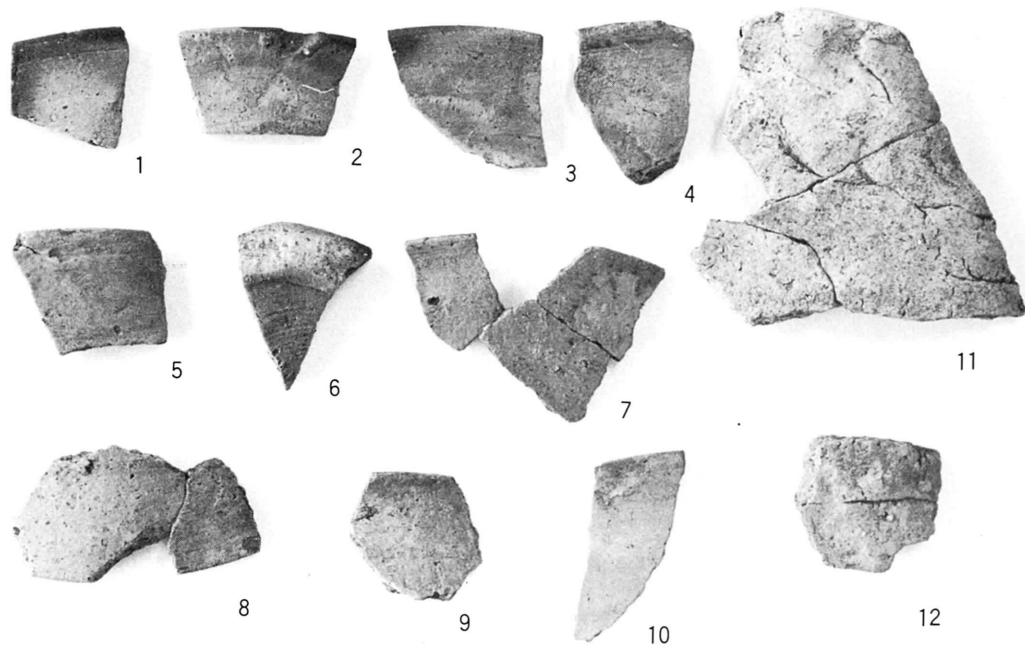


上：第1群土器（1～6） 第2群土器（7）
 下：第3群土器（1～4） 弥生式土器（5·6）



图版 3

上：第 2 群土器
下：第 3 群土器



上：土師器

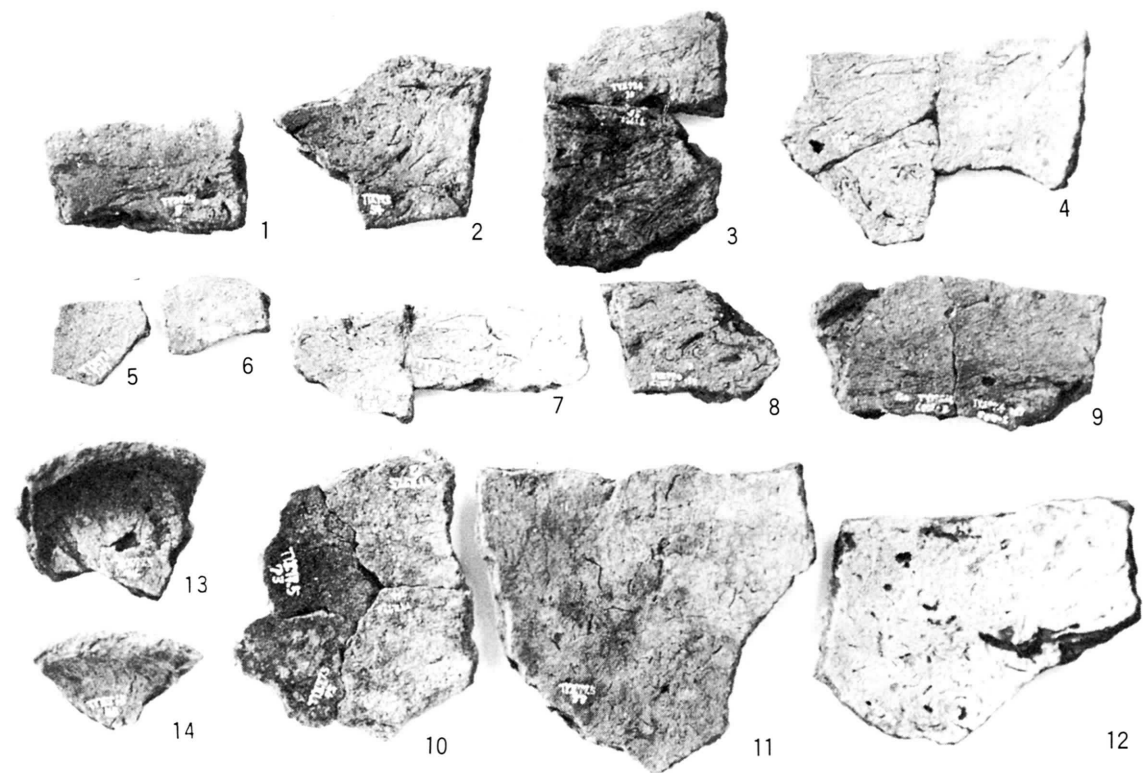
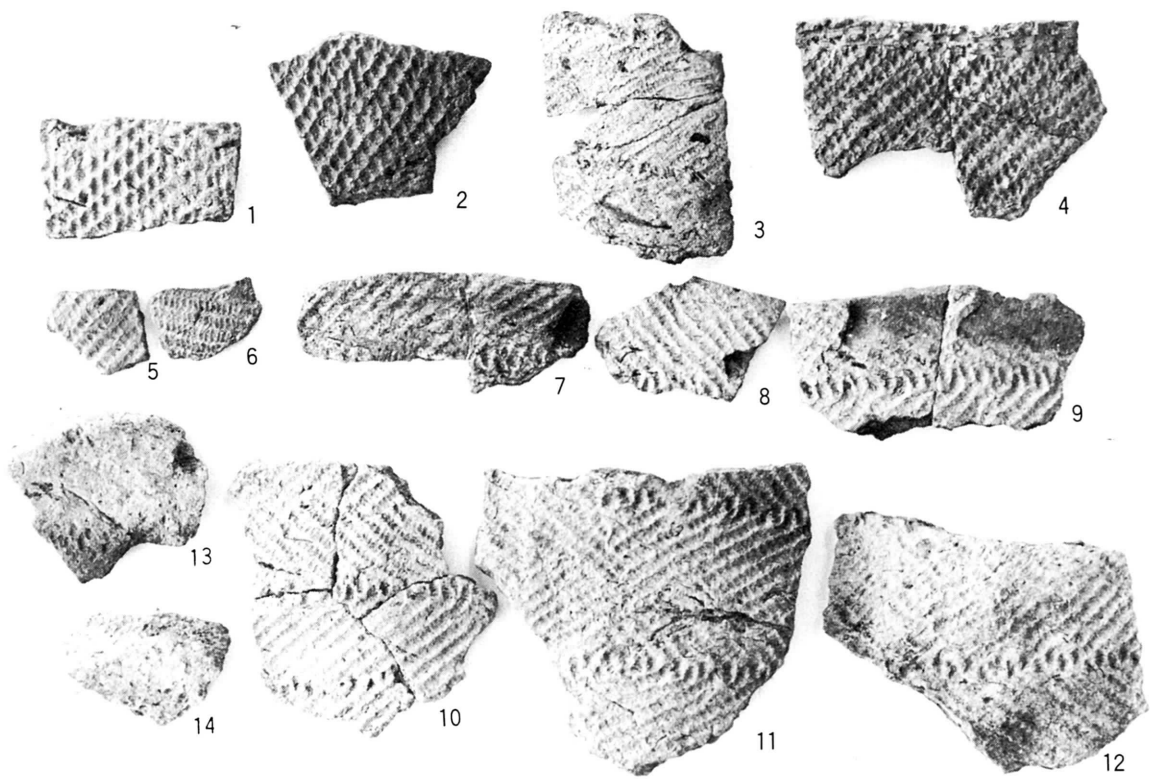
下：石器・石製品

高屋敷(Ⅱ)遺跡



上：高屋敷Ⅱ遺跡遠景（南から望む調査前）

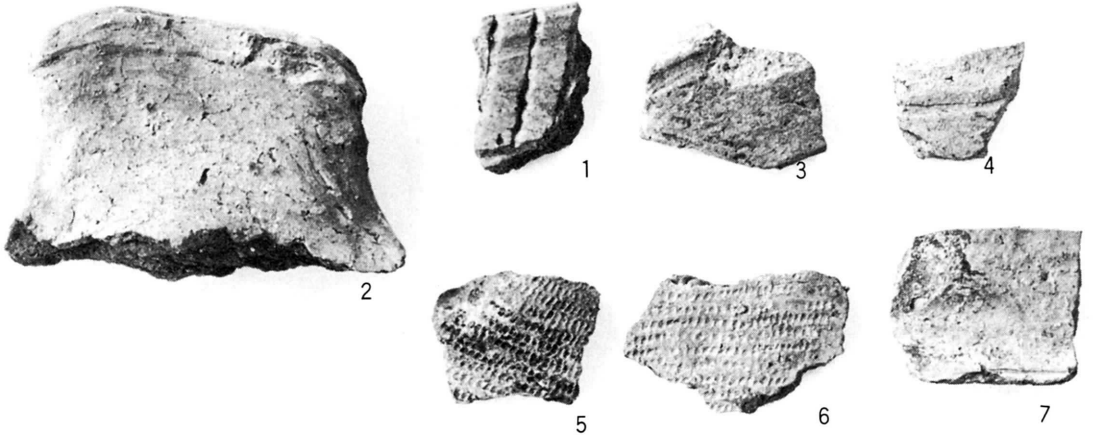
下：高屋敷Ⅱ遺跡全景（北から望む調査後）



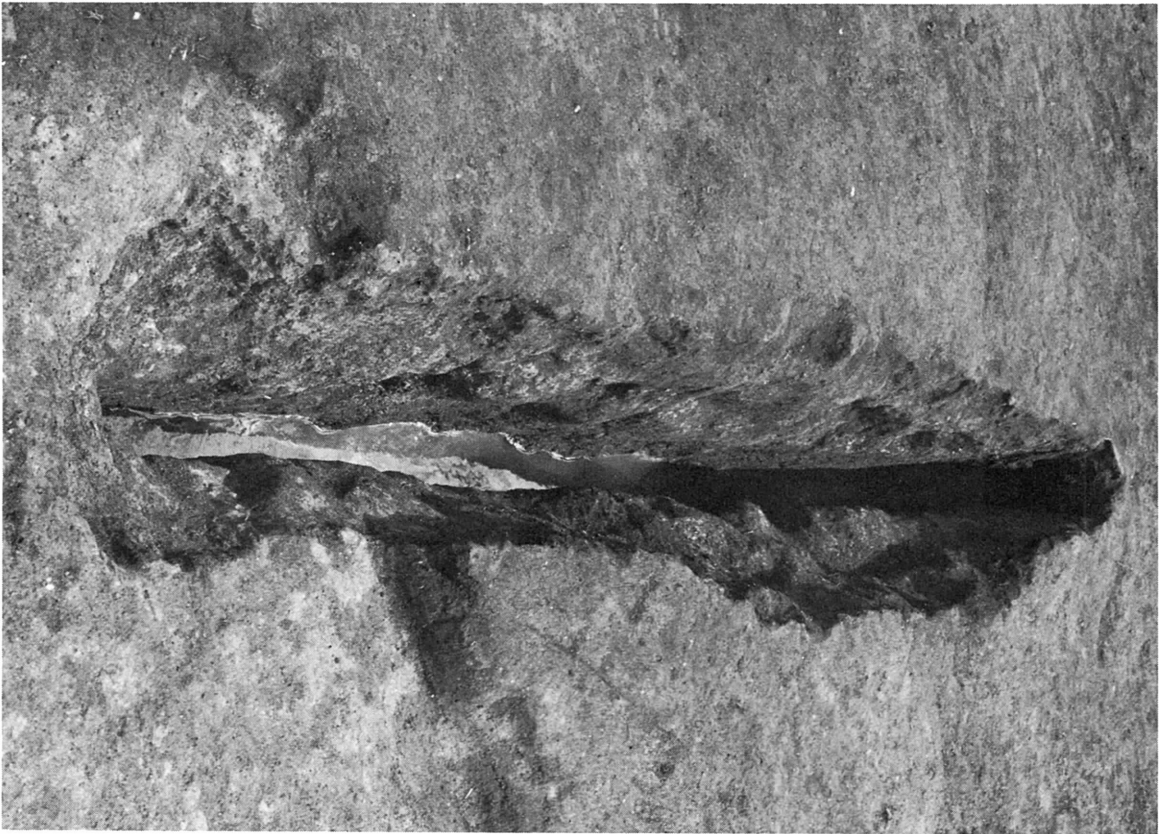
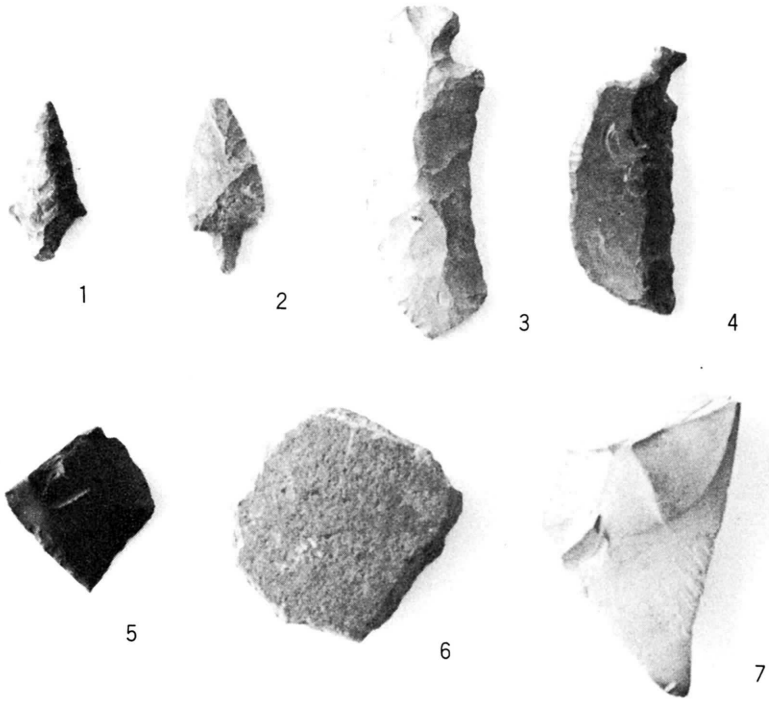
上：第1群土器

下：同裏

図版 2



上：第2·3群土器
下：土器出土状况

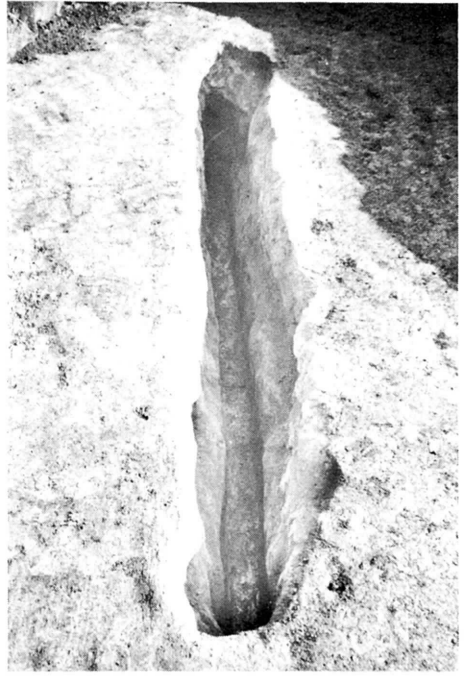


上：石器・石製品
下：溝状土壌

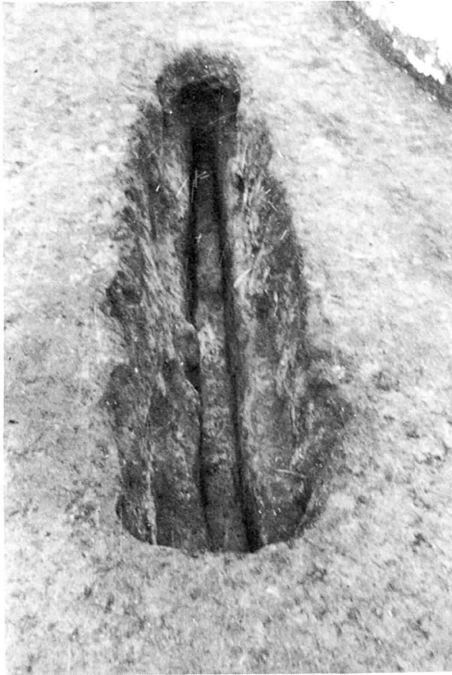
おお 大 く 久 ほ 保 遺 跡



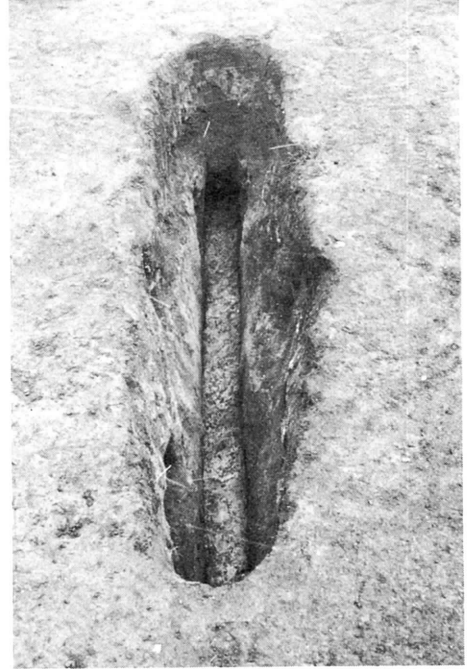
1号沟状土壤



2号沟状土壤



3号沟状土壤



4号沟状土壤



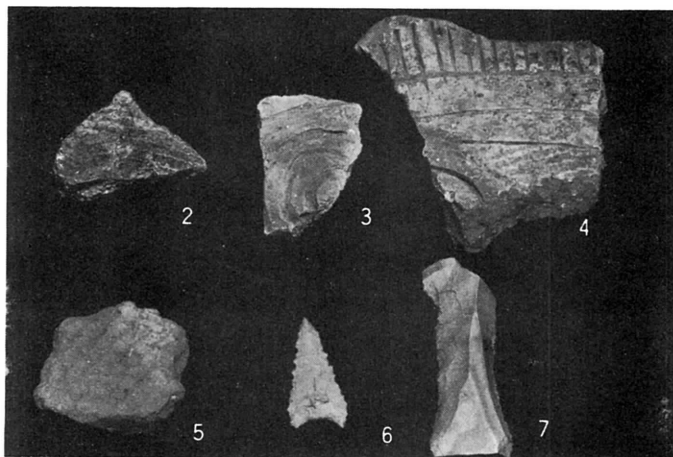
5号溝状土壌



5号溝状土壌短軸断面

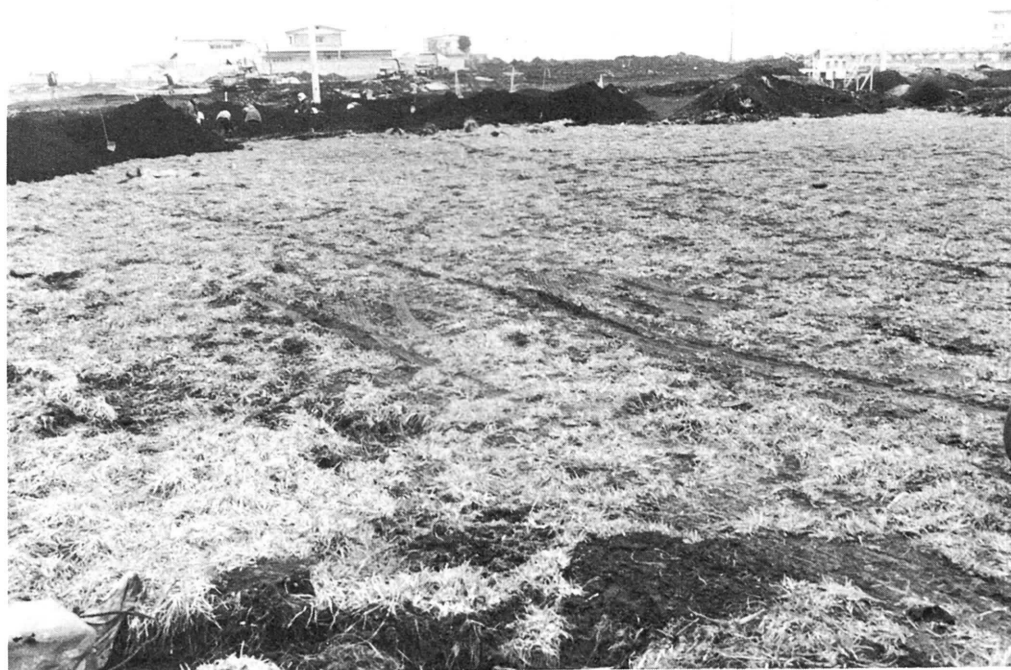


1 : Ff65グリッド1層

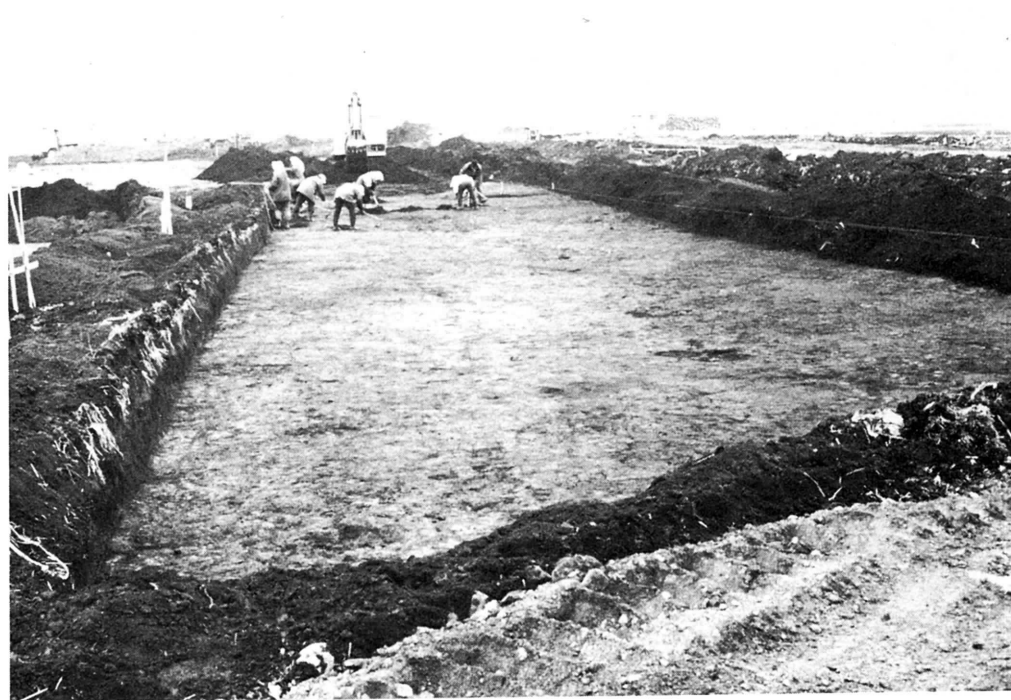


2 : 3号溝状土壌埋土 3 : Di68グリッドII層
 4 : Eg6グリッドI層 5 : Fi6グリッドI層
 6 : Fg6グリッドII層 7 : Dc56グリッドII層
 1~5 : 土器 6~7 : 石器

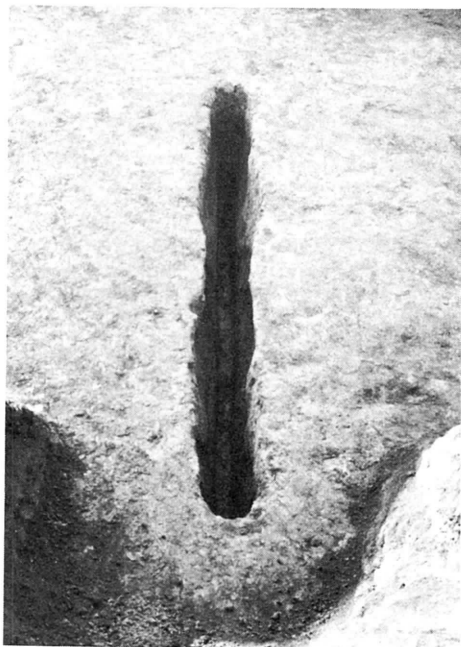
おお だるみ 遺 跡
大 緩



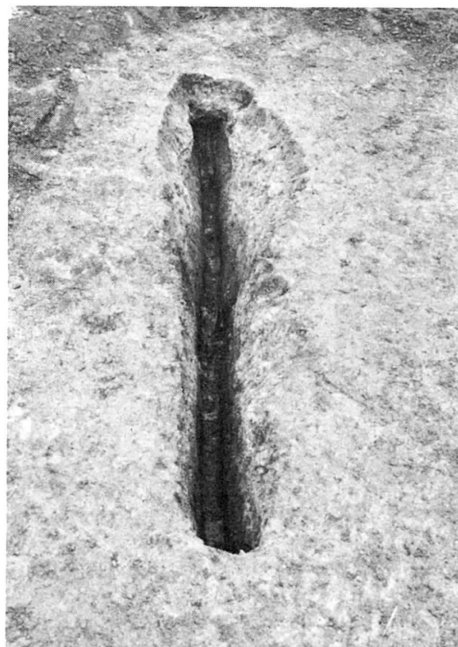
遺跡近景



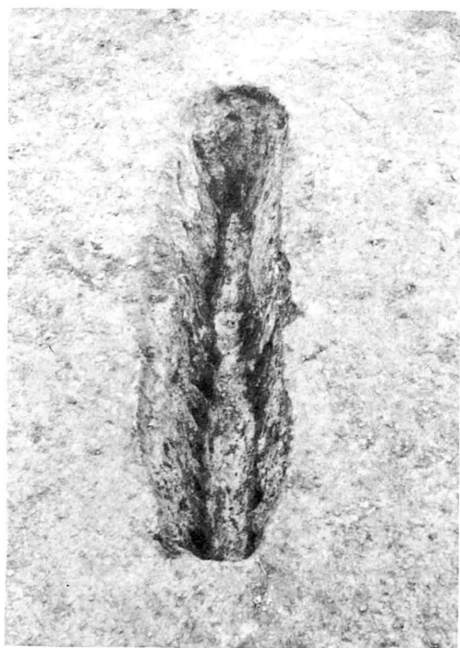
調査風景



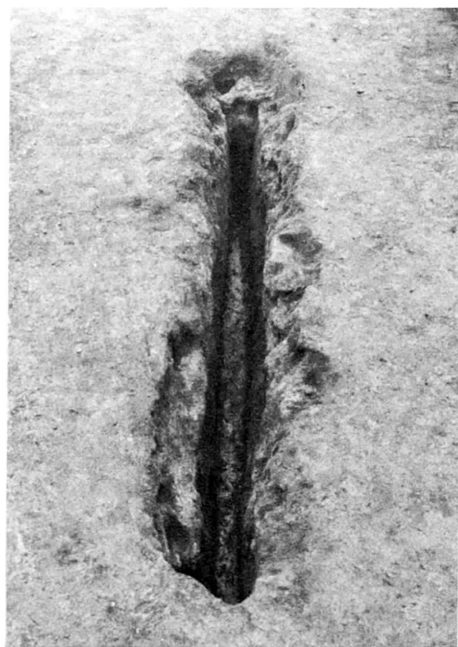
1号沟状土壤



2号沟状土壤



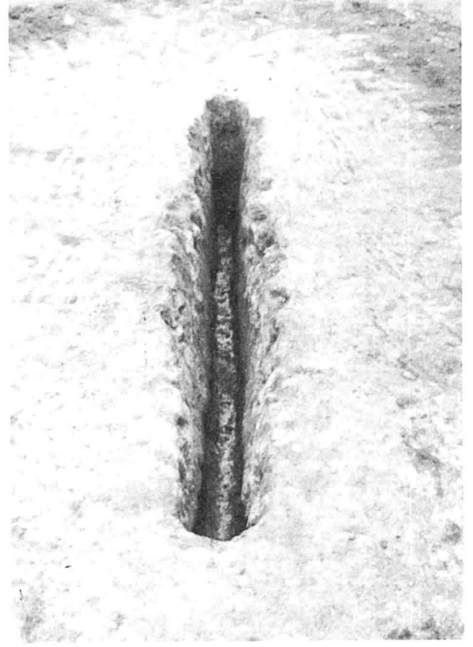
3号沟状土壤



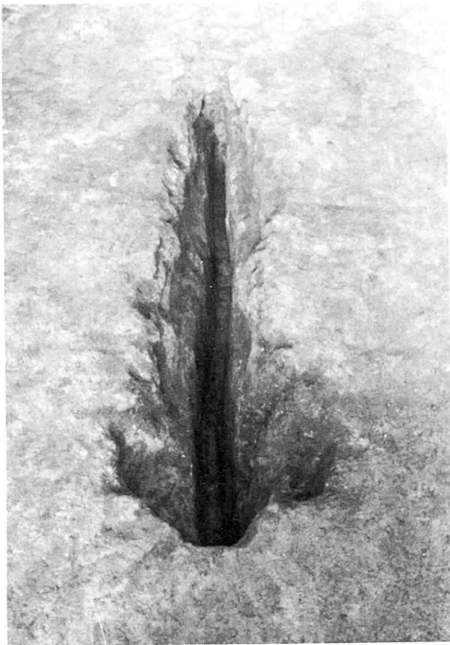
4号沟状土壤



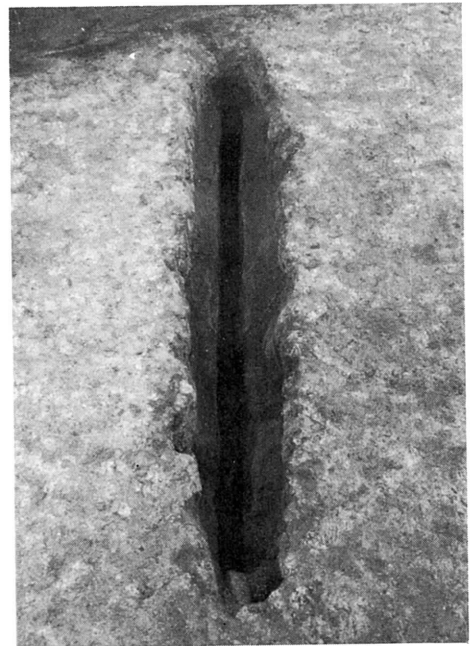
5号沟状土壤



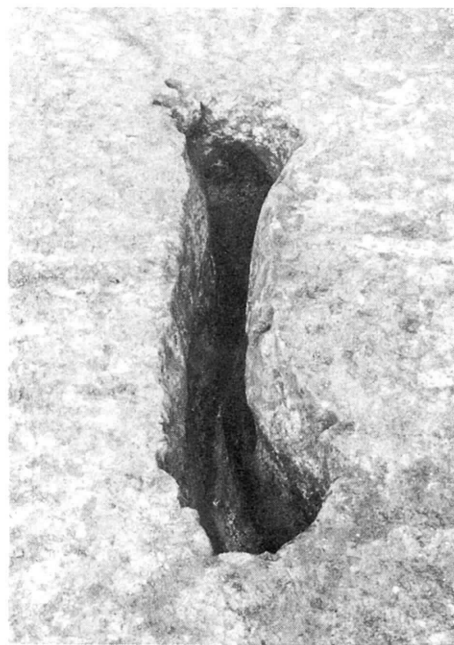
6号沟状土壤



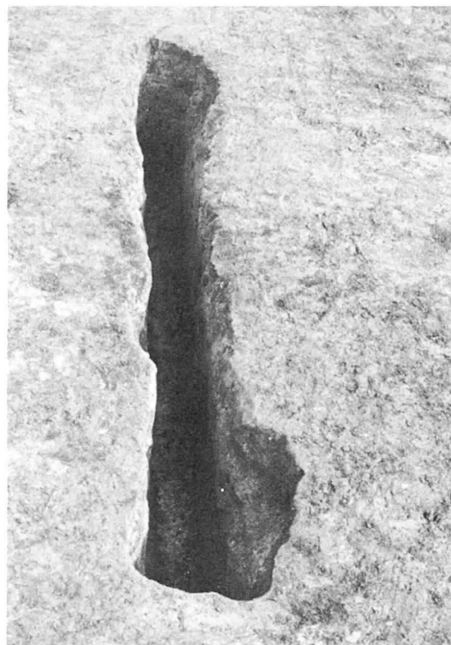
7号沟状土壤



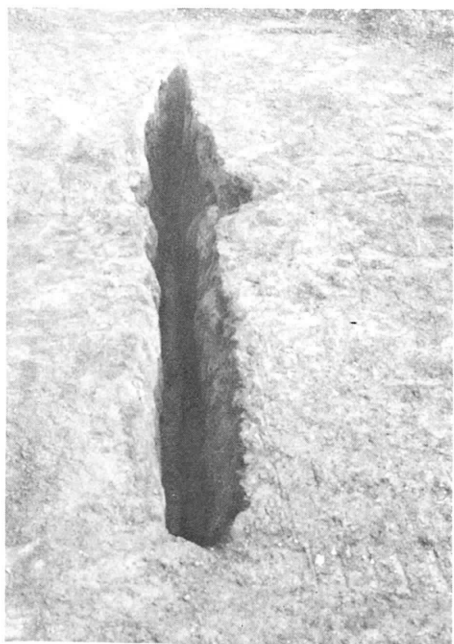
8号沟状土壤



9号沟状土壤



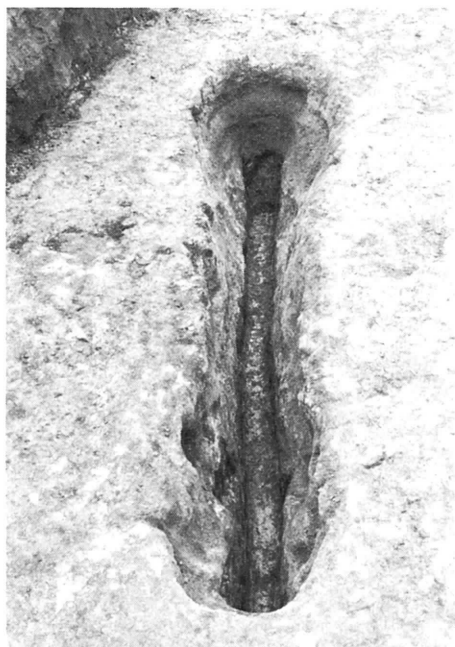
10号沟状土壤



11号沟状土壤



12号沟状土壤



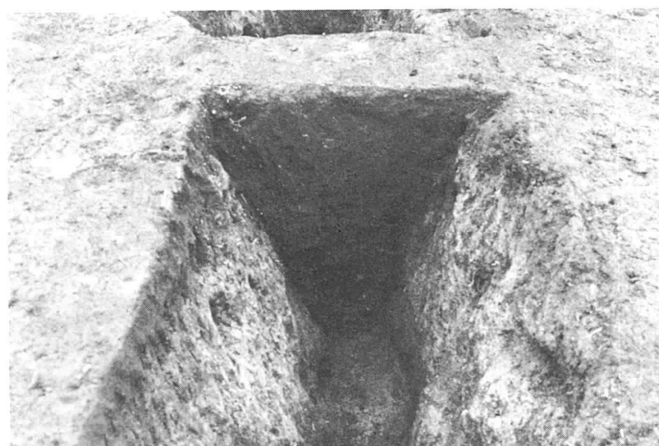
13号沟状土壤



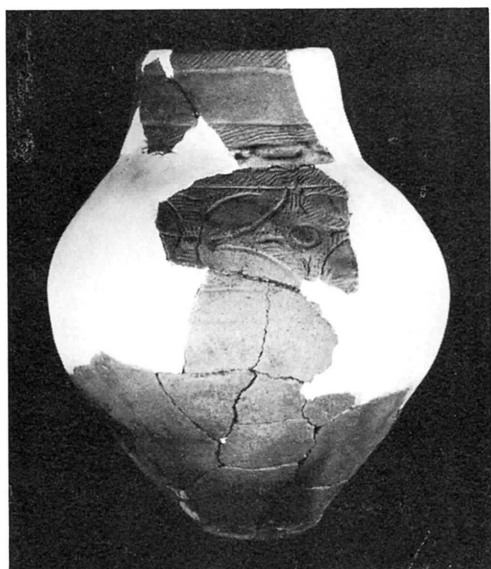
1号沟状土壤断面图



2号沟状土壤断面图



3号沟状土壤断面图



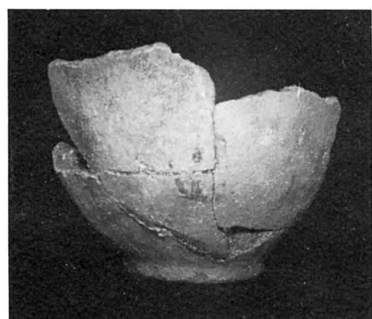
1



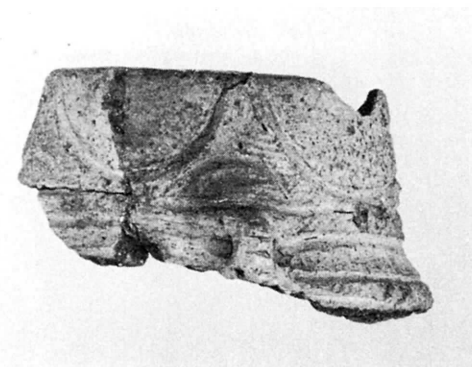
2



3



4



5



6



7

出土遺物(1) (縮尺不同)

図版 6



出土遺物(2) (縮尺不同)



たか
高 やなぎ
柳 遺 跡



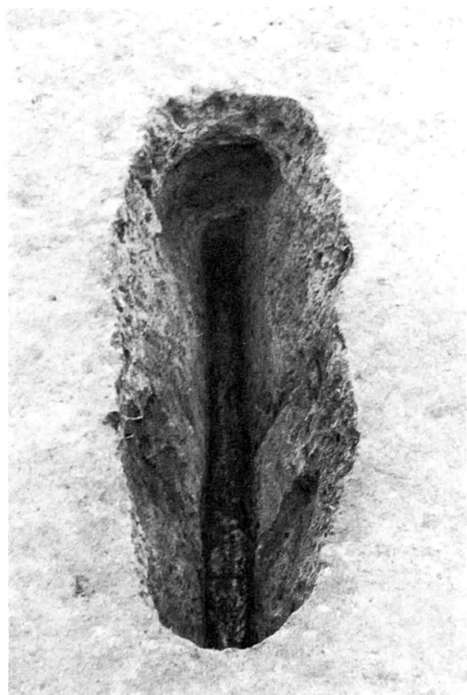
遺跡全景（南から）

発掘状況（北から）

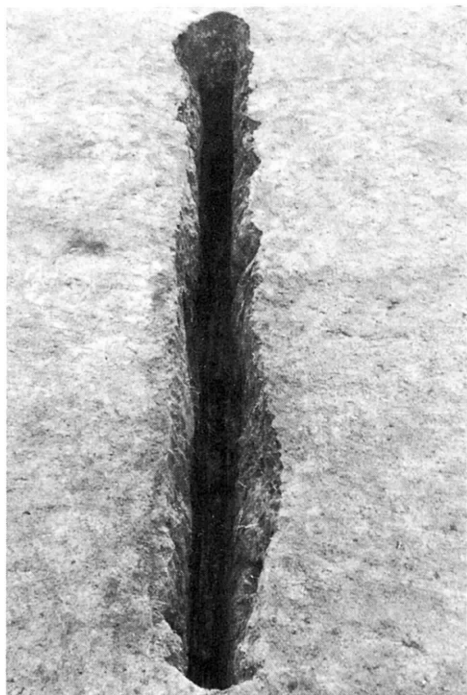


溝状土壌群（東から）

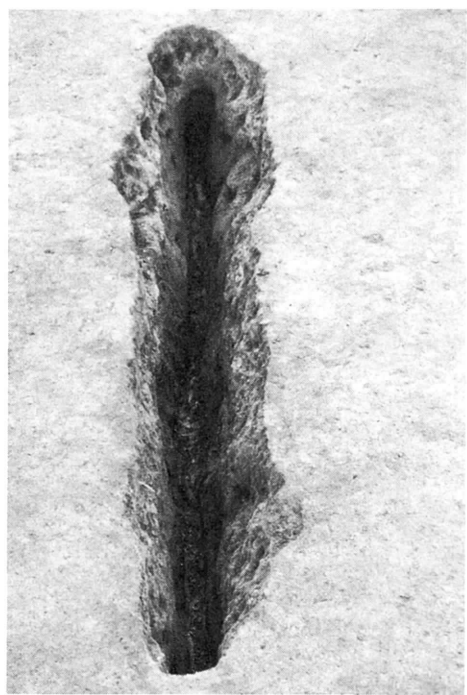




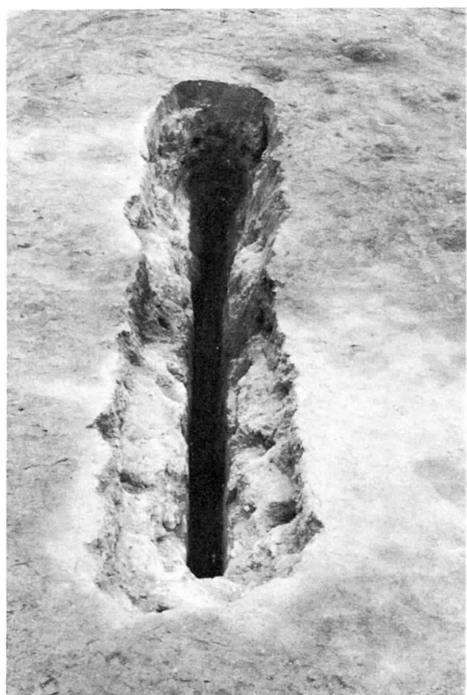
第1号沟状土壤 (Ba68Pit)



第2号沟状土壤 (Bb77Pit)



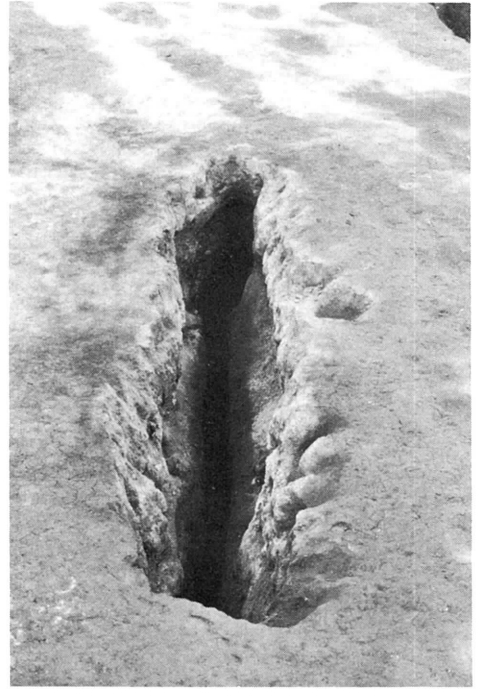
第3号沟状土壤 (Bc74Pit)



第4号沟状土壤 (Bd50Pit)



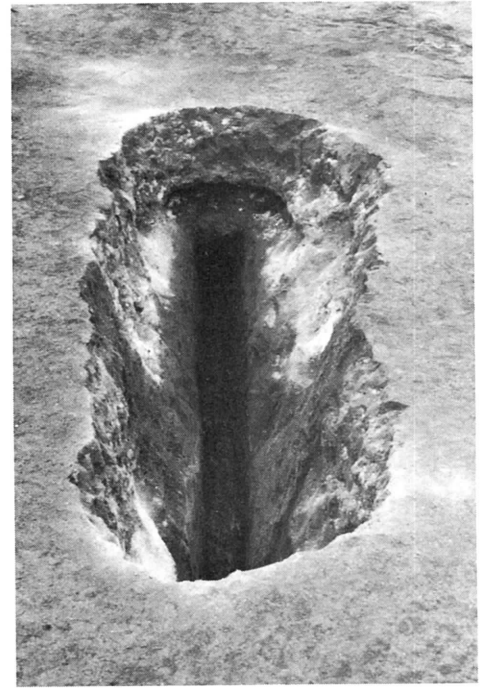
第 4 号沟状土壤 (Bd50Pit)



第 5 号沟状土壤 (Be03Pit)



第 6 号沟状土壤 (Bf53Pit)



第 7 号沟状土壤 (Bf50Pit)



第9号沟状土壤 (Bi15Pit)



第10号沟状土壤 (Cb74Pit)



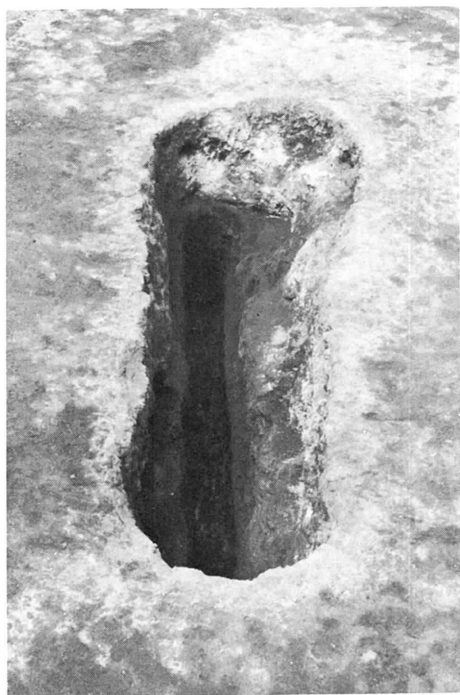
第11号沟状土壤 (Ce09Pit)



第12号沟状土壤 (Cg06Pit)



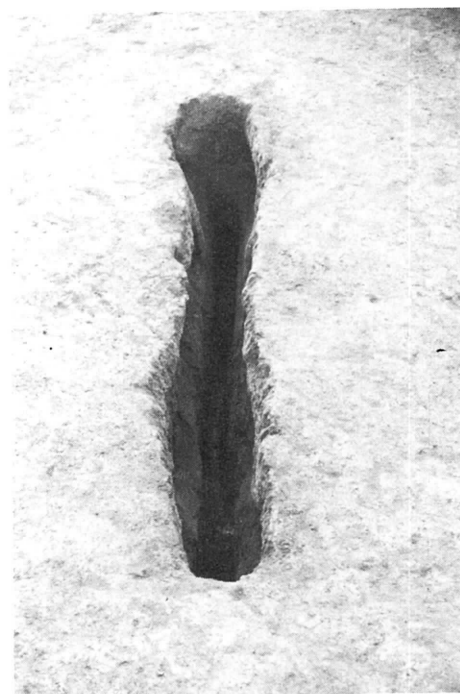
第13号沟状土壤 (Cg18Pit)



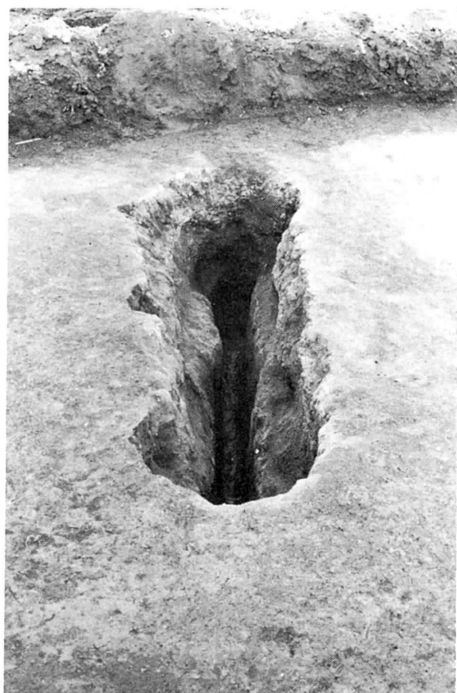
第14号沟状土壤 (Cg12Pit)



第15号沟状土壤 (Cg56Pit)



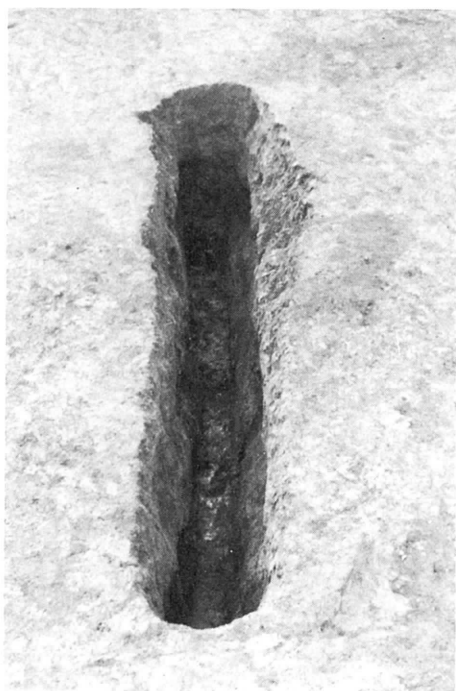
第16号沟状土壤 (Ch71Pit)



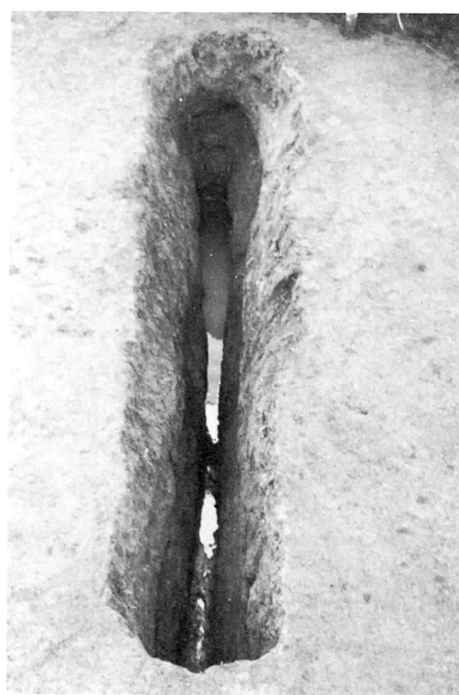
第17号沟状土壤 (Ch21Pit)



第18号沟状土壤 (Ci53Pit)



第23号沟状土壤 (Df09Pit)



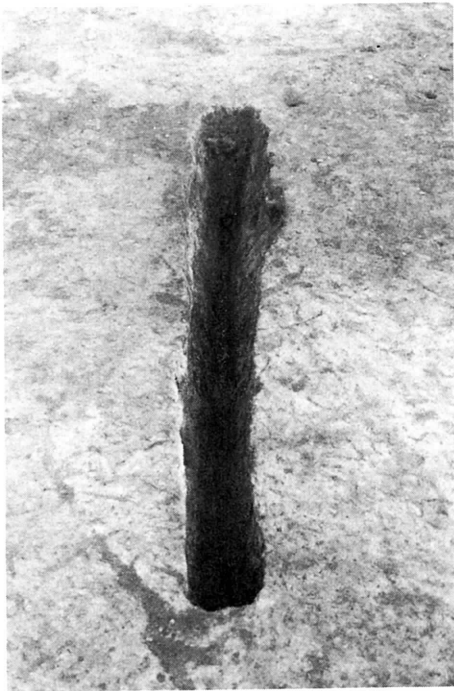
第24号沟状土壤 (Dg09Pit)



第27号沟状土壤 (Ec18Pit)



第28号沟状土壤 (Fg56Pit)



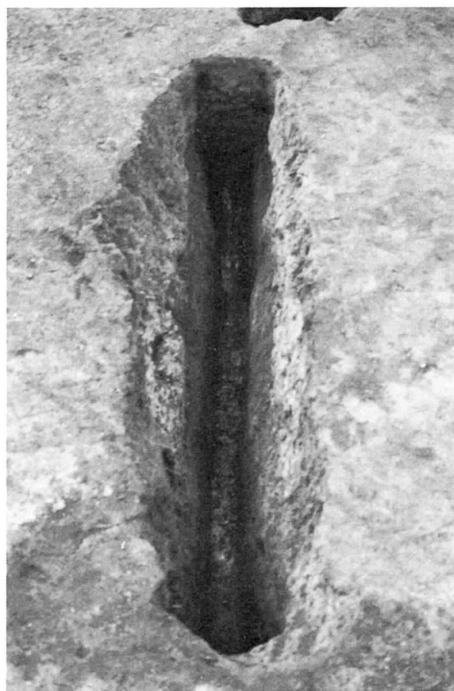
第29号沟状土壤 (Cg15Pit)



第30号沟状土壤 (Gh18Pit)



第31号沟状土壤 (Gh09Pit)



第32号沟状土壤 (Gi09Pit)



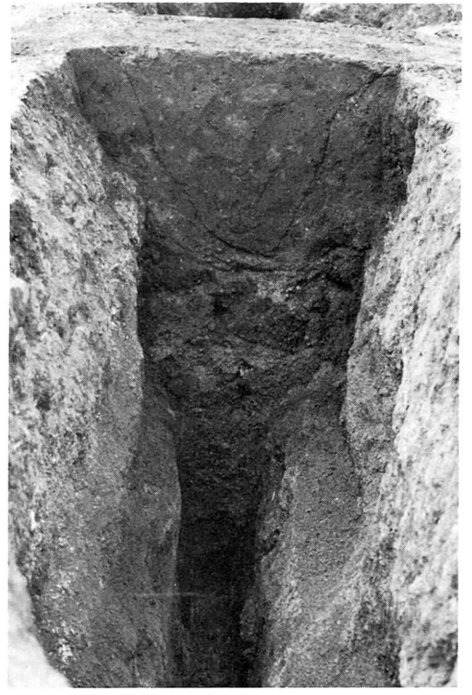
第1号沟状土壤断面



第8号沟状土壤断面



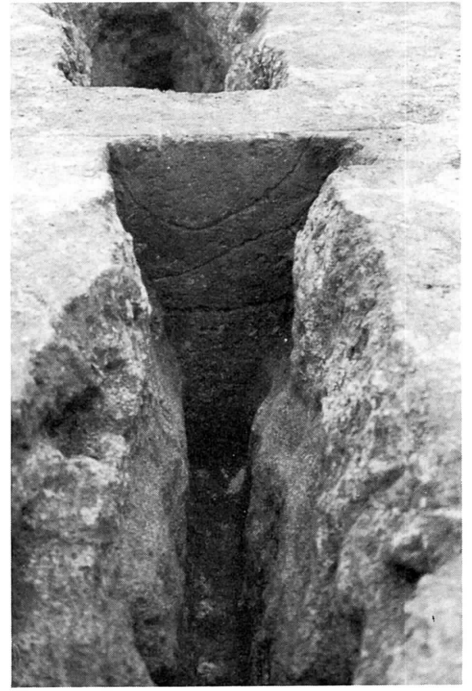
第6号沟状土壤断面



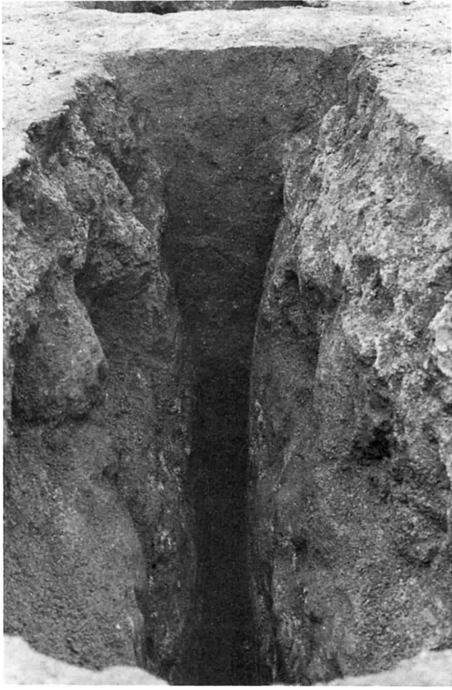
第7号沟状土壤断面



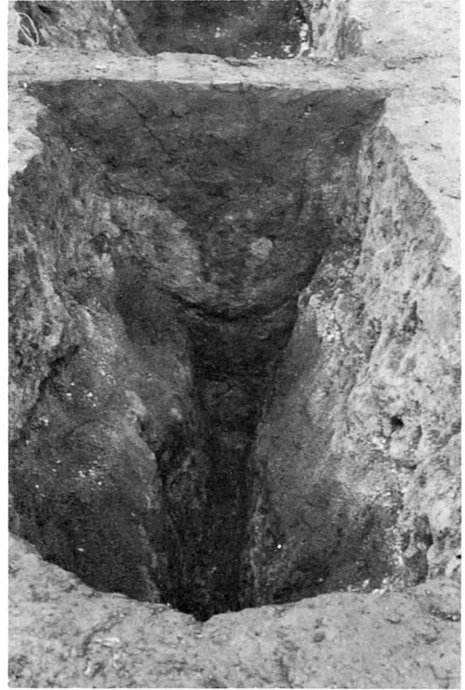
第9号沟状土壤断面



第10号沟状土壤断面



第11号沟状土壤断面



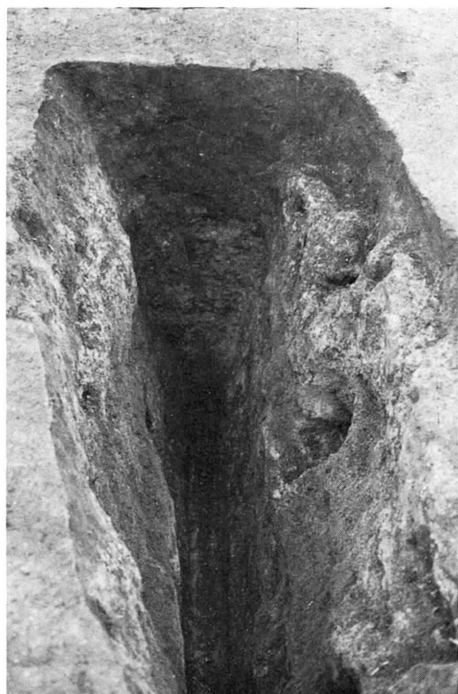
第12号沟状土壤断面



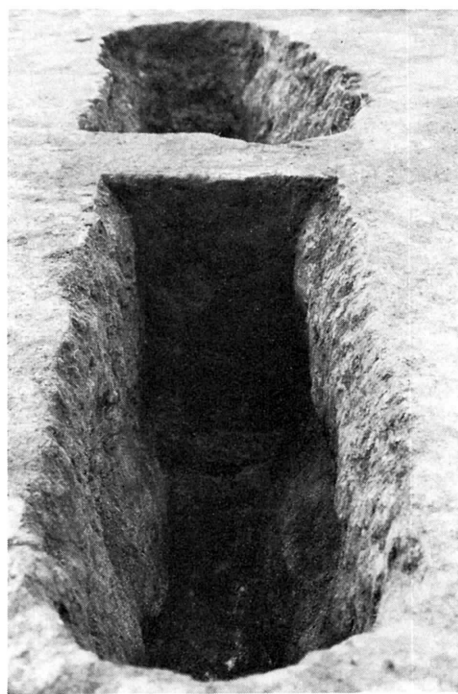
第13号沟状土壤断面



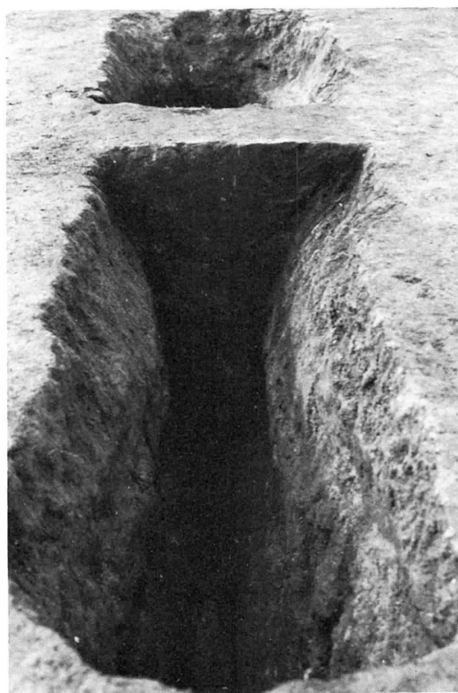
第16号沟状土壤断面



第20号沟状土壤断面



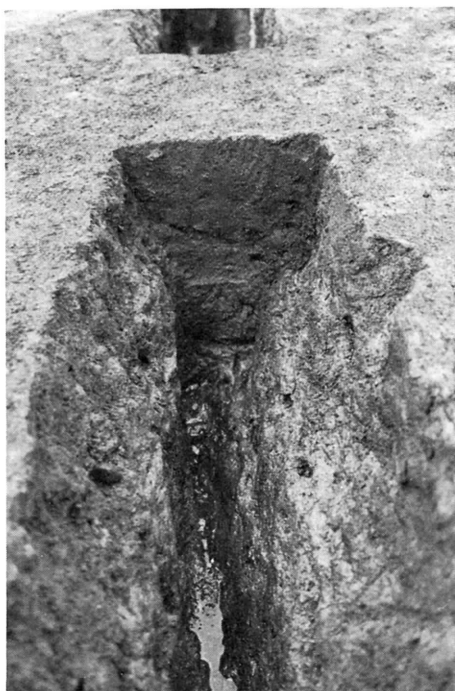
第23号沟状土壤断面



第24号沟状土壤断面



第24号沟状土壤断面



第27号沟状土壤断面



第28号沟状土壤断面



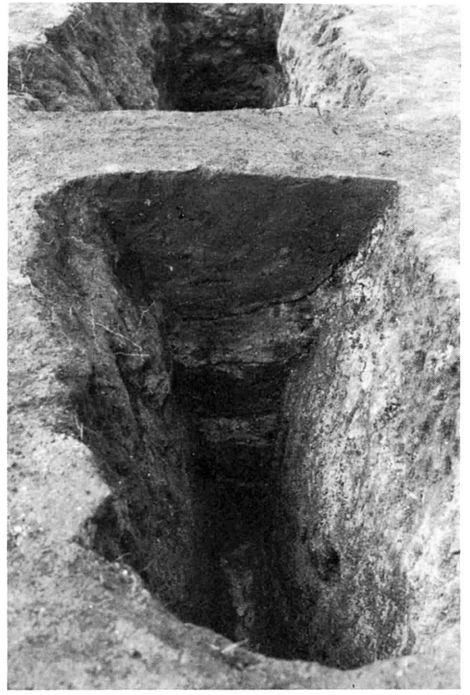
第29号沟状土壤断面



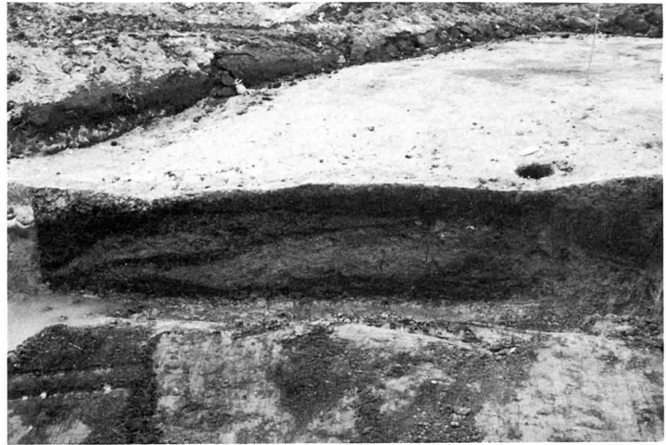
第30号沟状土壤断面



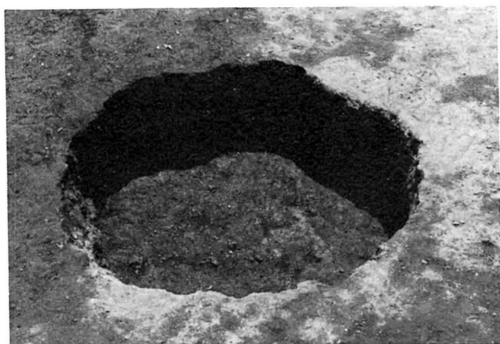
第31号沟状土壤断面



第32号沟状土壤断面



第21号沟状土壤（長軸断面）



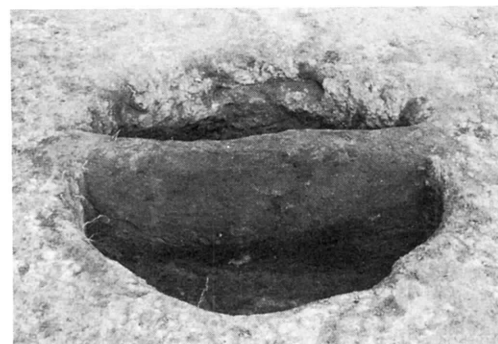
第1号ビーカー形土壙 (Db18Pit)



第2号ビーカー形土壙 (Dg56Pit)



第3号ビーカー形土壙 (Ea21Pit)



第2号ビーカー形土壙



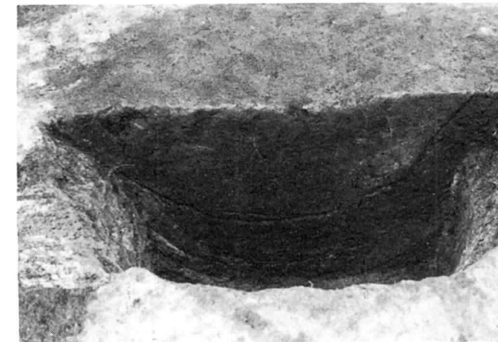
第4号ビーカー形土壙 (Gd06Pit)



第4号ビーカー形土壙



第5号ビーカー形土壙 (Gf12Pit)



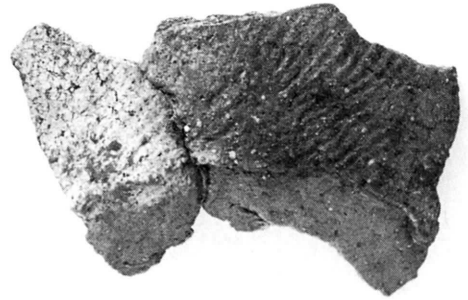
第5号ビーカー形土壙



1



2



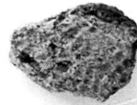
3



4



5



7

出土遺物

1～5・7：縄文土器片

6：縄文土器底部



6

幅 遺 跡

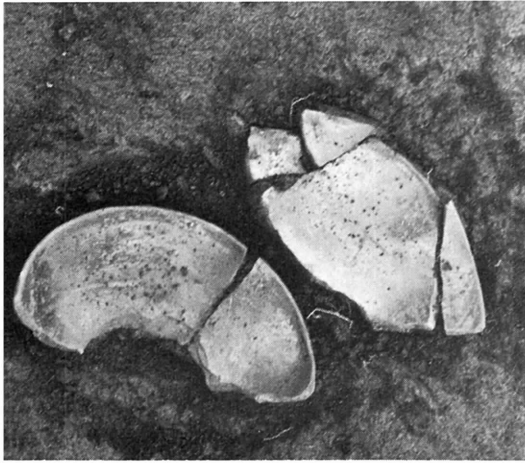


1



- 1 : 調査地遠景
- 2 : Fj03住居跡全景
(南から)
- 3 : 同カマド細部

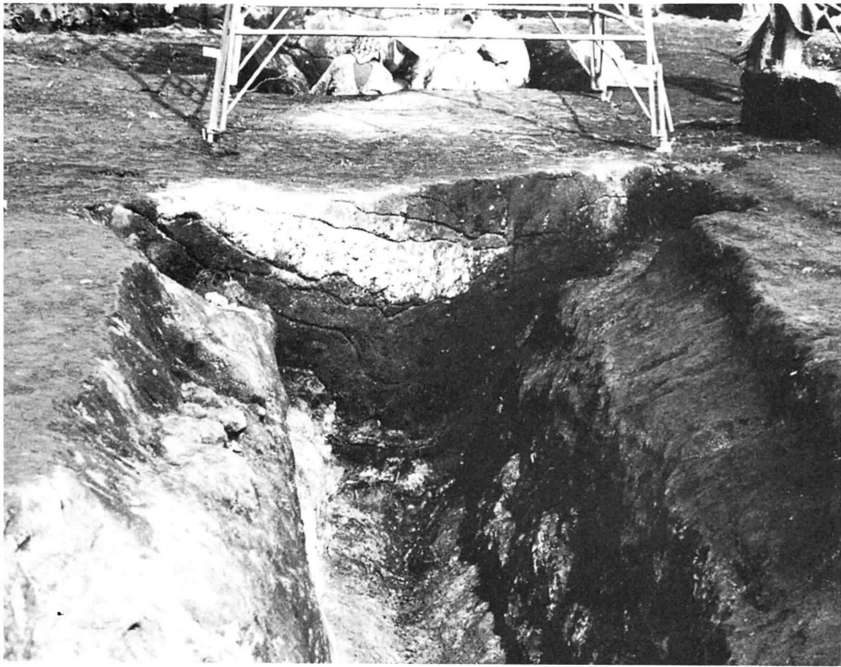




1



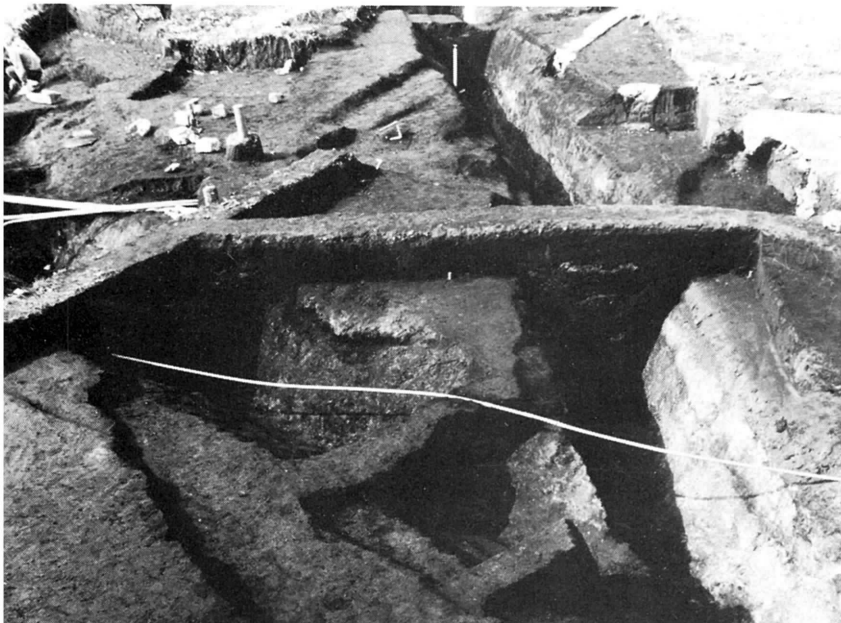
2



3

1・2 : Fj03住居跡内
出土土師器

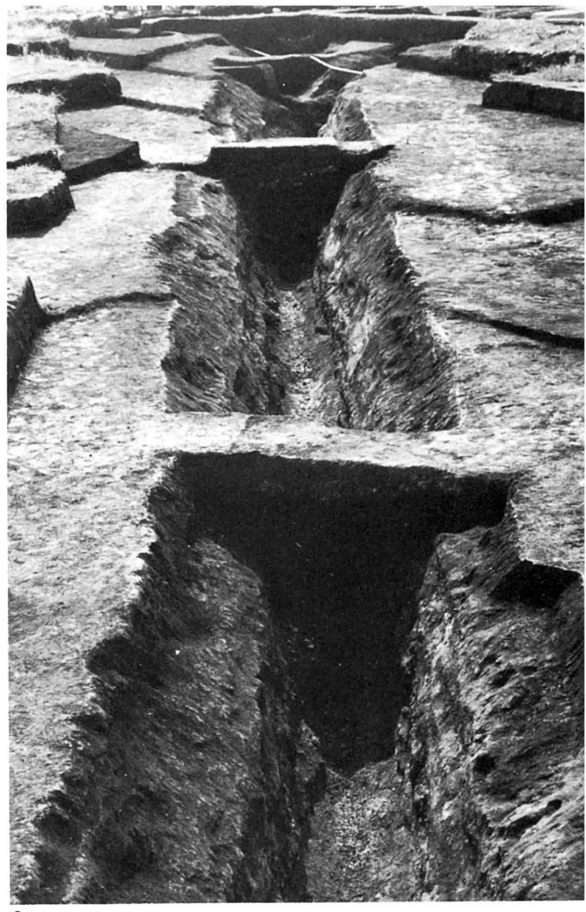
3・4 : 近世溝の状況



4

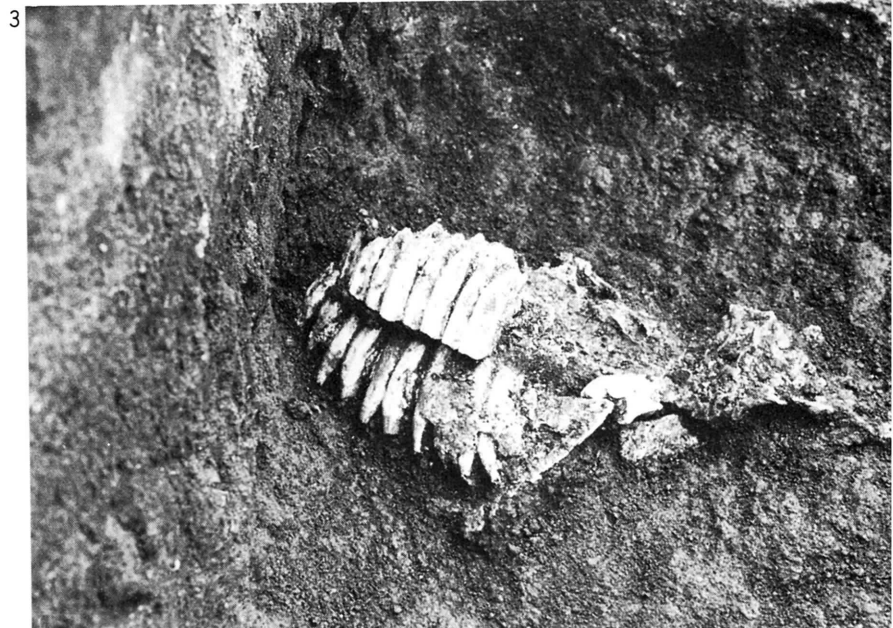


1



2

1・2：近世溝
3：溝内出土馬顎骨・歯



3

出土遺物

(1): 土器類

1. 晩期

2・3. 後期

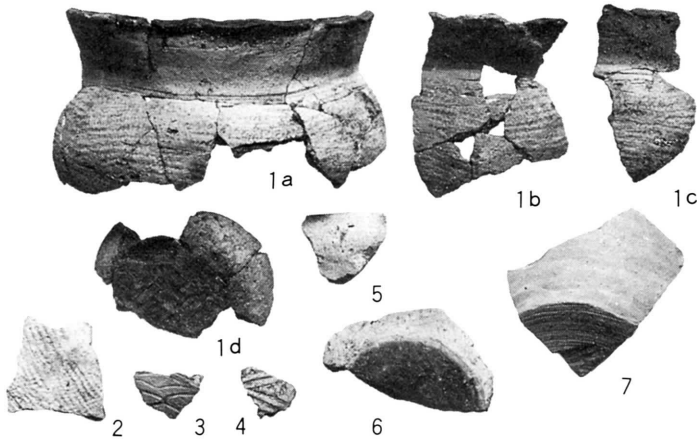
4. 不明

5・6. 土師器

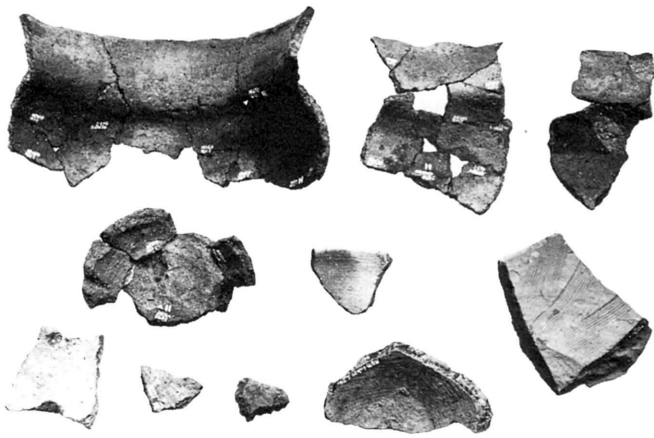
7. 播鉢

(2)・(3): 石篋状 縮尺約1/2

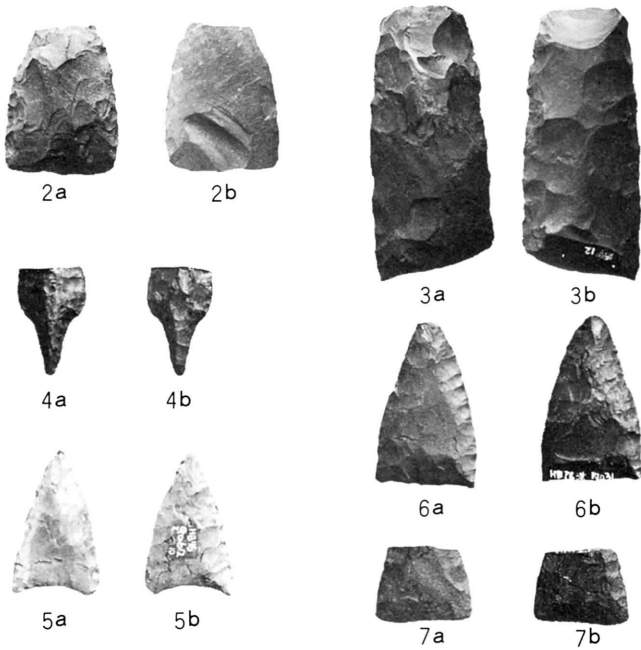
(4)~(7): 石鏃 縮尺約1/1

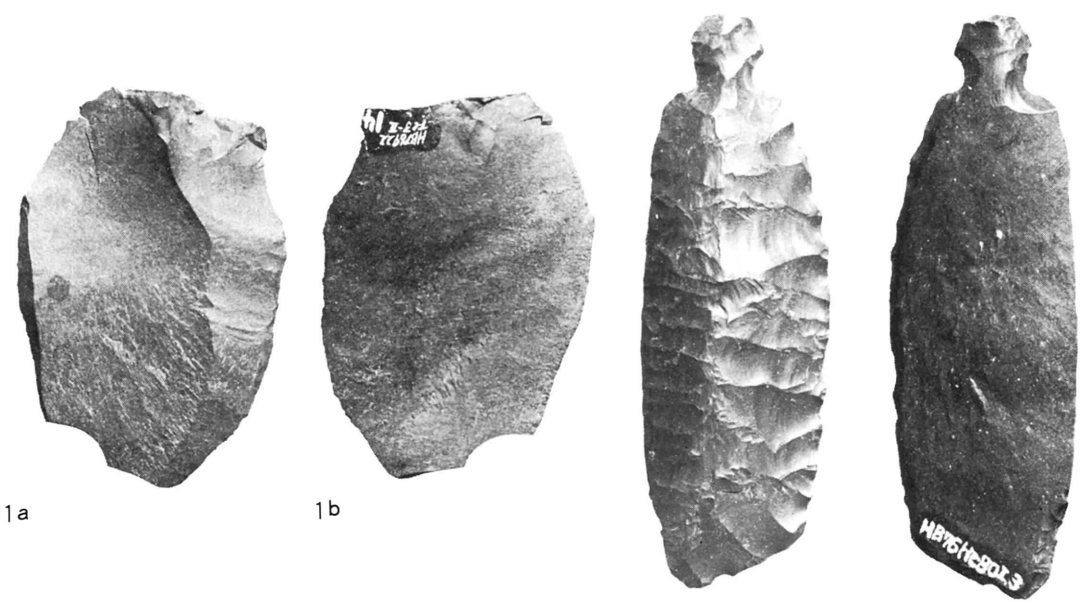


(1)a



(1)b





1a

1b

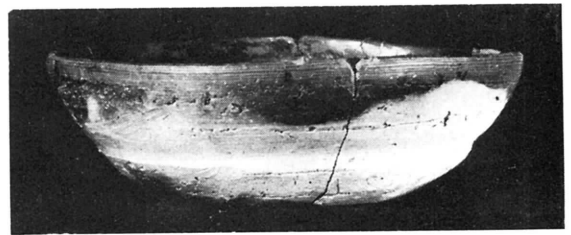
2a

2b

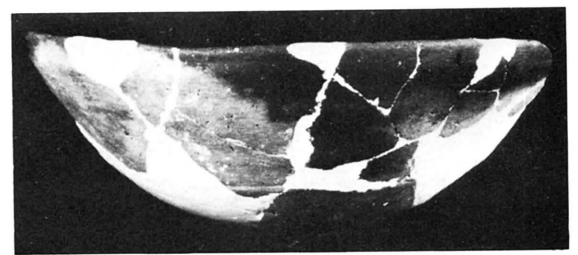
1 : 搔器 } 縮尺約1/1
 2 : 石匙 }



3

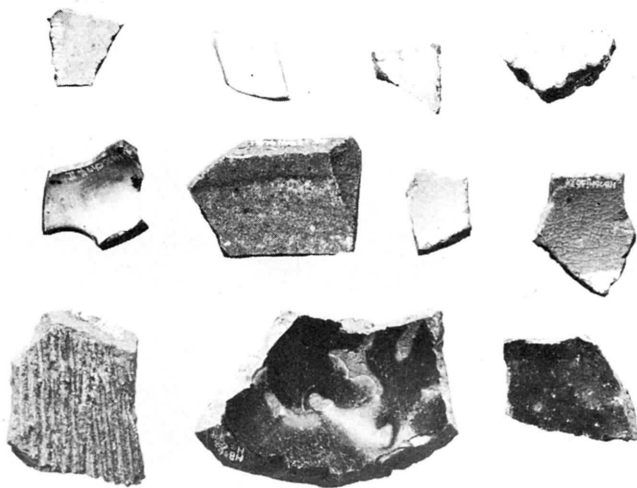


4



5

3 ~ 5 : FJ03住居跡出土遺物



1a

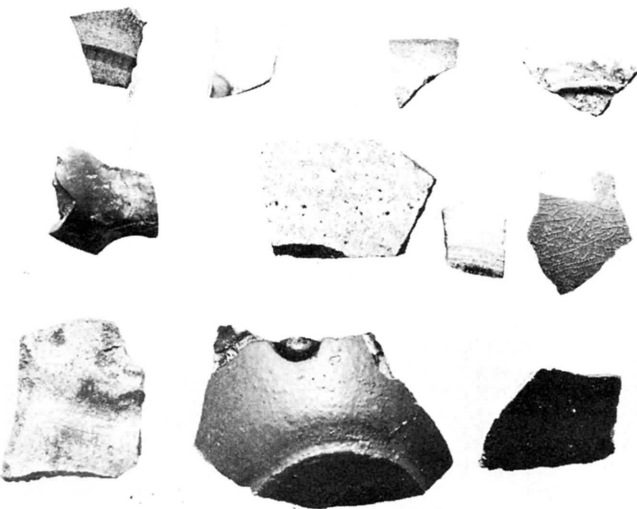
出土遺物

1 : 陶器・磁器類 縮尺1/2

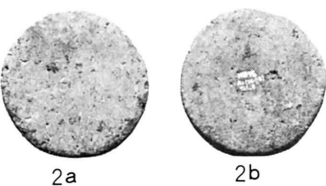
2・3 : 不明石製品

4・5 : 寛永通寶

6・7 : 珪化木



1b



2a

2b



3a

3b



4a

4b



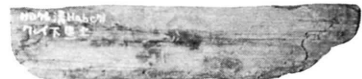
6a



6b



7a



7b



5a

5b

たけ はな まえ 遺 跡
竹 花 前

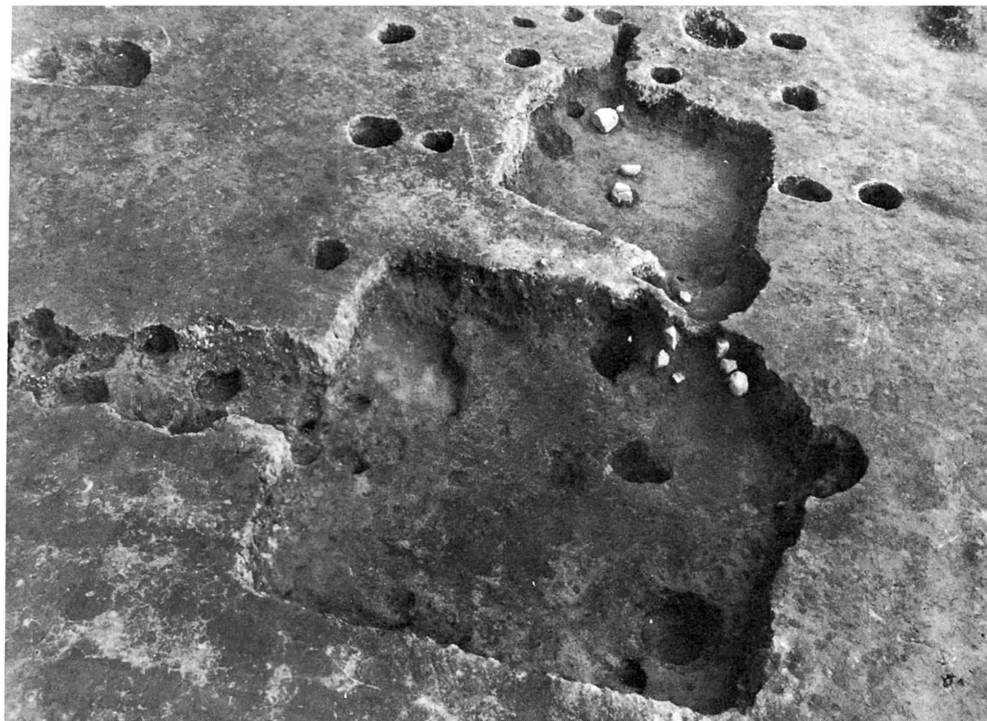


左上 A j 12 烧土
遺構

上：2 号住居跡
B b 15 掘立
柱建物跡

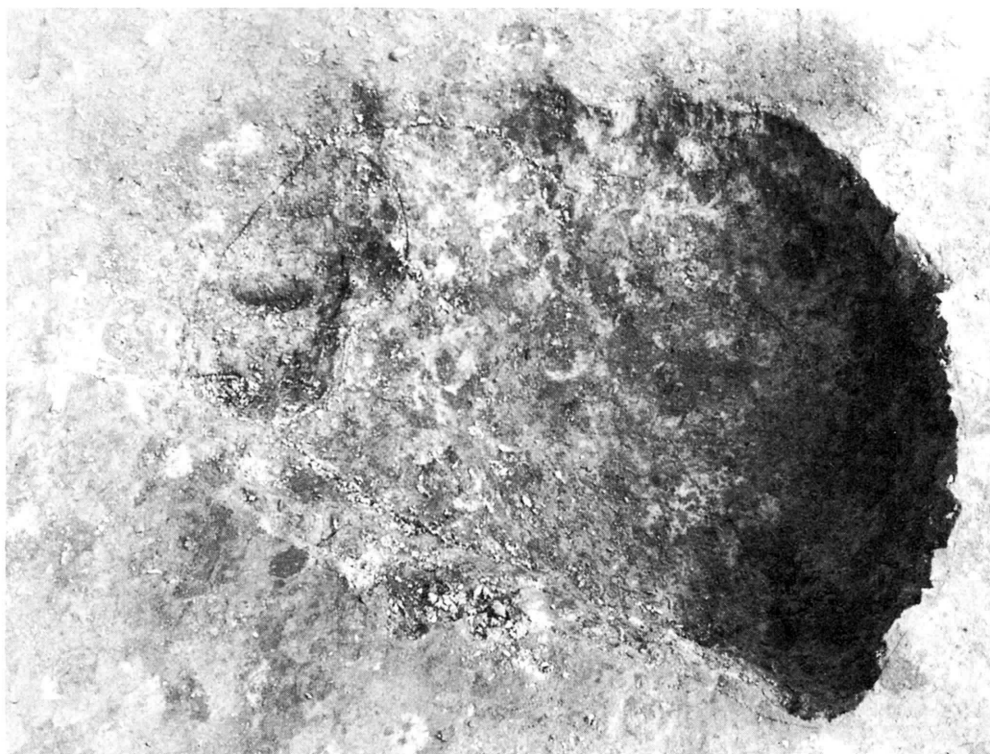
下：1 号住居跡

東
↑
西



A j 12 烧土遺構

東
↑
西





1号住居跡

東
↑
西

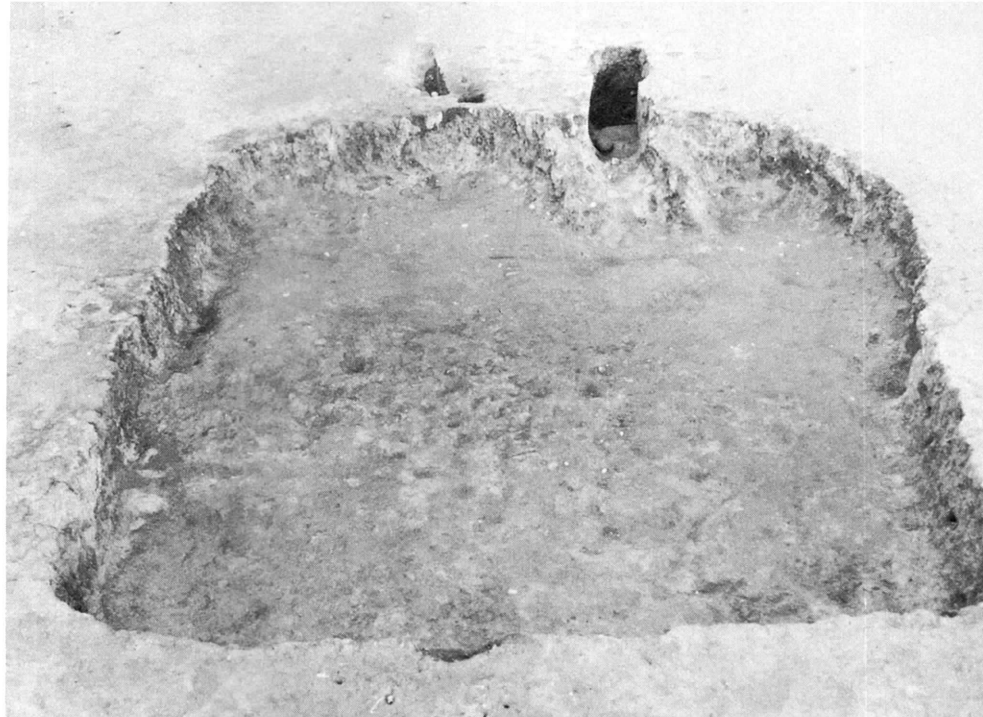


2号住居跡

南
↑
北

3号住居跡

東
↑
西



4号住居跡

東
↑
西

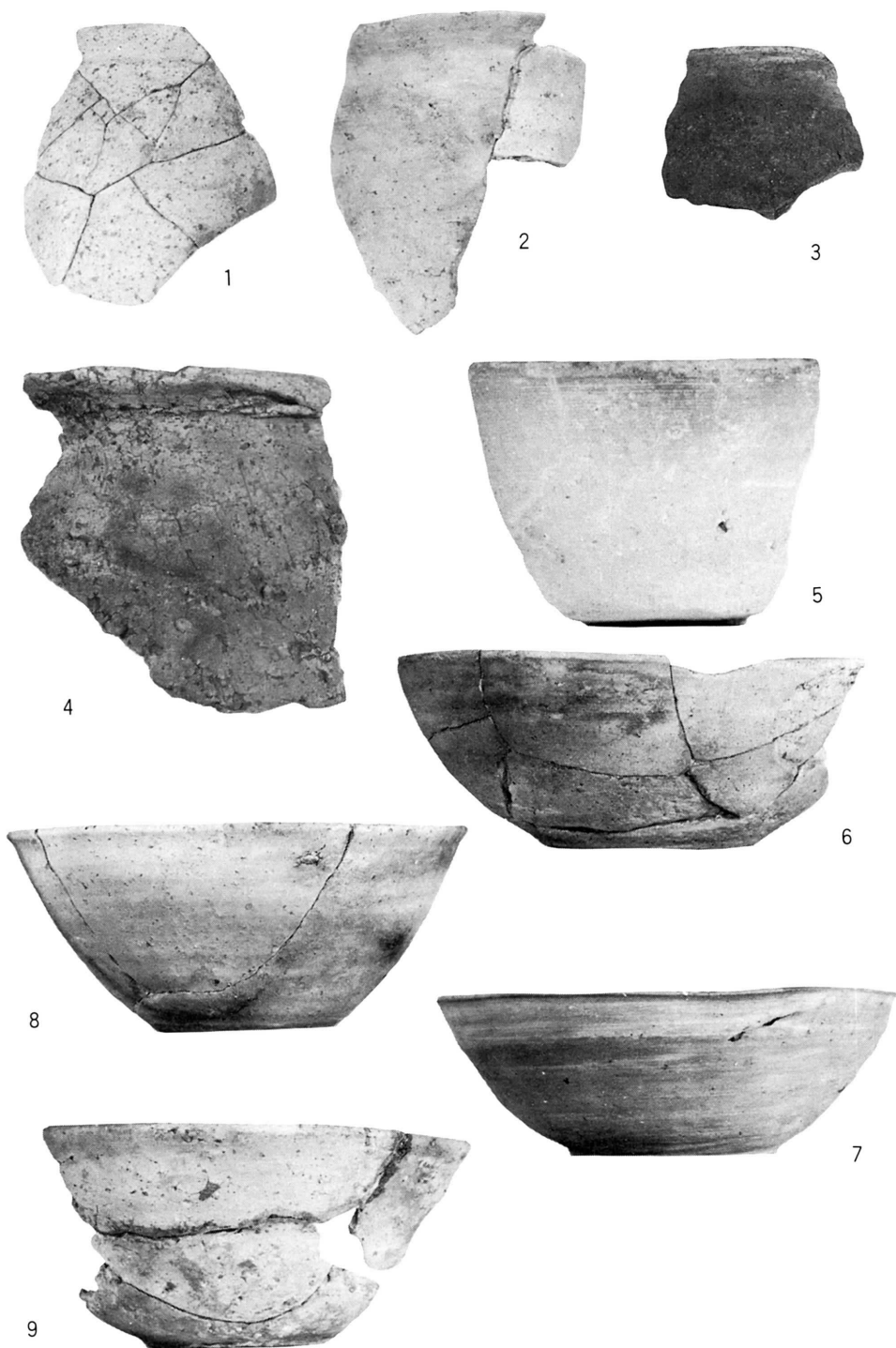




5号住居跡
東
↑
西



Ca62掘立柱
建物跡
北
↑
南



1号住居跡出土遺物

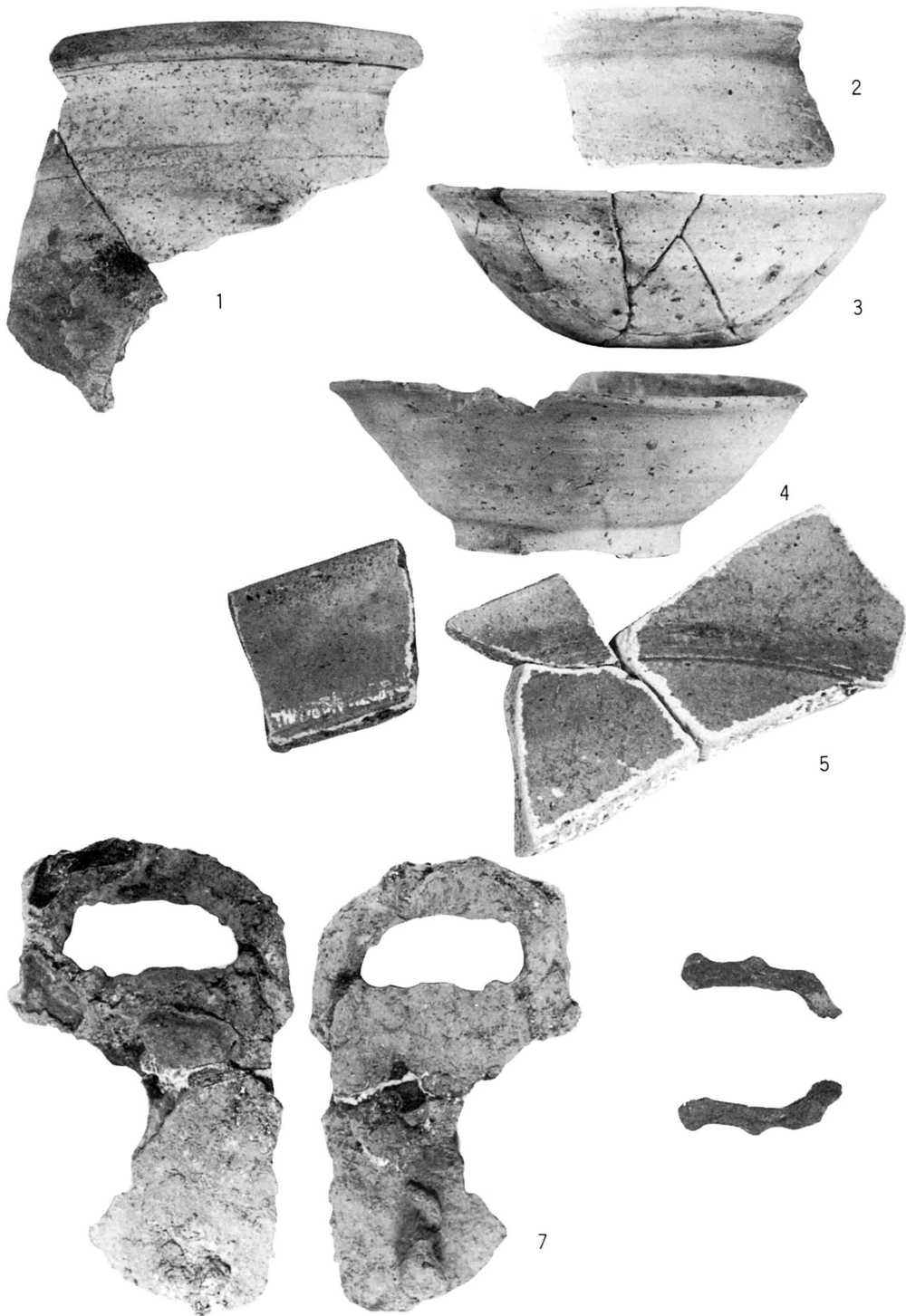
1 : 5 図 1
 2 : 5 図 2
 3 : 5 図 3
 4 : 5 図 4

甕

5 : 5 図 8
 6 : 5 図 9 } 内黒坏
 7 : 5 図10坏A

8 : 5 図11
 9 : 5 図12 } 坏B

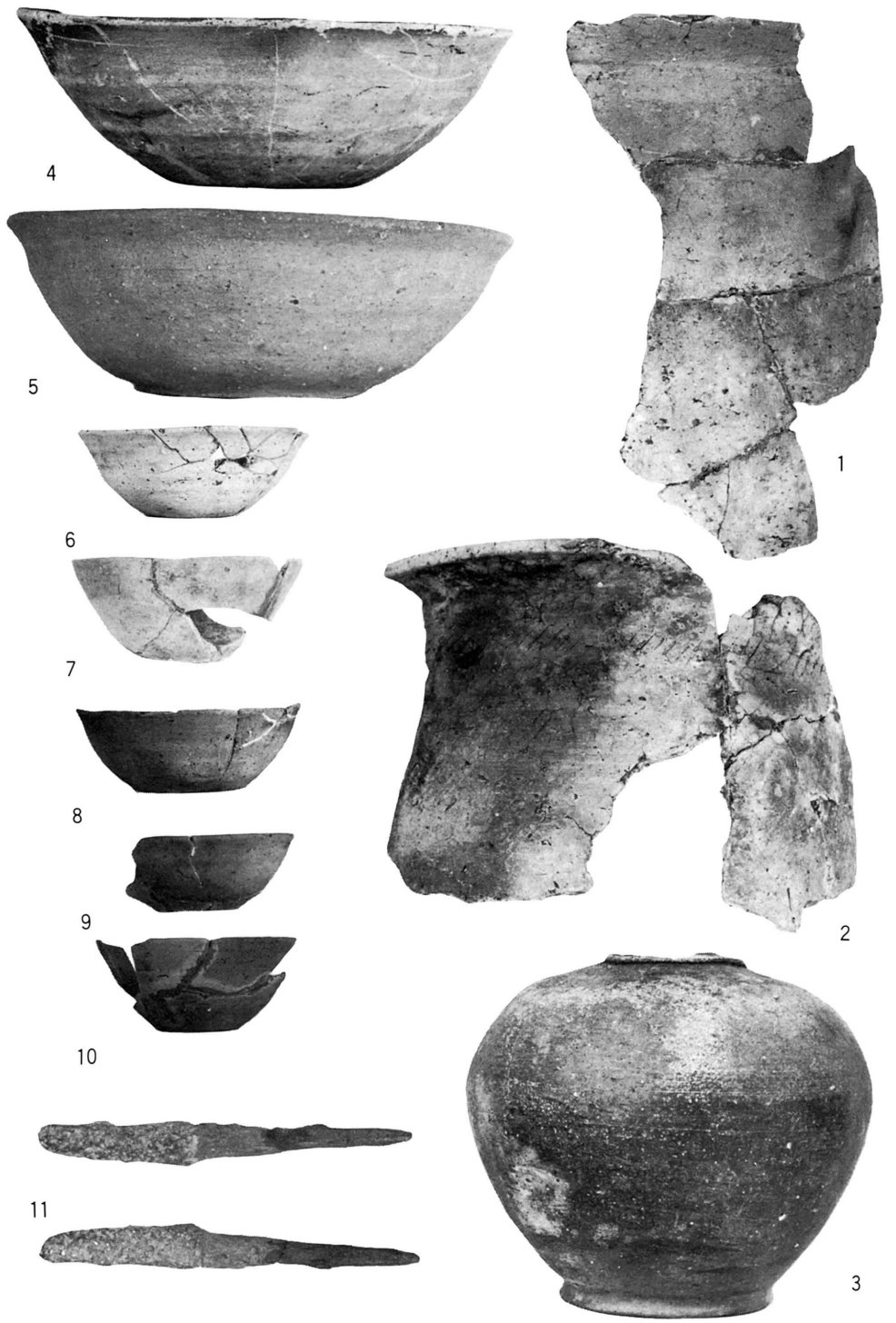
図版 5



2号住居跡出土遺物

1 : 7図 1 } 甕
 2 : 7図 2 }
 3 : 7図 3 坏B
 4 : 7図 4 高台坏

5 : 緑釉陶器内面
 6 : 7図 6 釘
 7 : 7図 5 帶金具様鉄製品

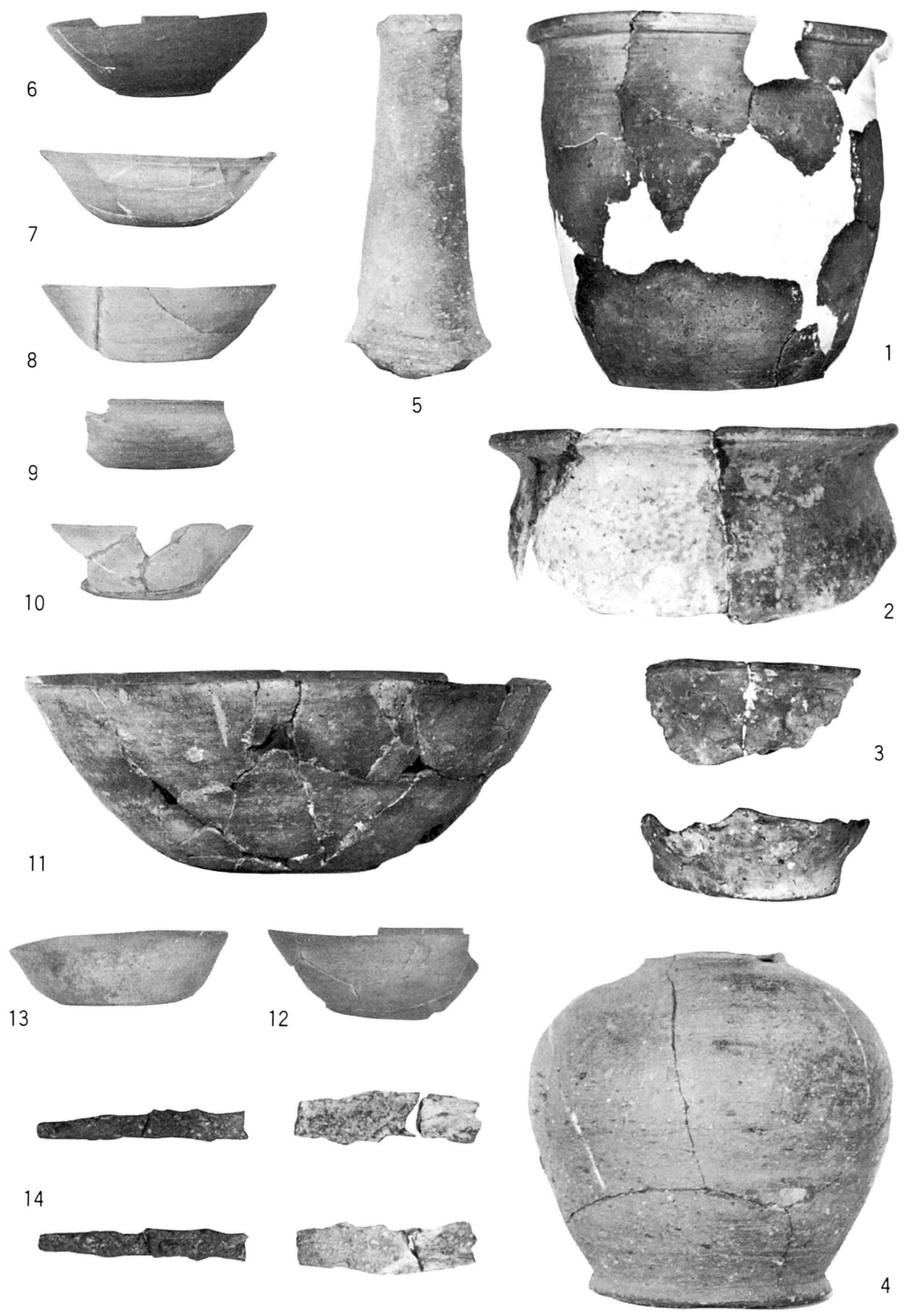


3号住居跡出土遺物

1 : 9图1 } 甕
 2 : 9图2 }
 3 : 9图3 長頸壺
 4 : 9图4 } 坏A
 5 : 9图5 }

6 : 9图6 }
 7 : 9图7 } 坏B
 8 : 9图8 }
 9 : 9图9 }
 10 : 9图10 }

11 : 9图11 刀子



4号住居跡出土遺物

- 1 : 11図 1
 - 2 : 11図 2
 - 3 : 11図 3
 - 4 : 11図 4
 - 5 : 11図 5
- 小型甕
長頸壺

- 6 : 11図 6
 - 7 : 11図 7
 - 8 : 11図 8
 - 9 : 11図 9
- 坏A

- 10 : 11图10
 - 11 : 11图11
 - 12 : 11图12
 - 13 : 11图13
 - 14 : 11图14
- 坏B
刀子

図版 8



2



1



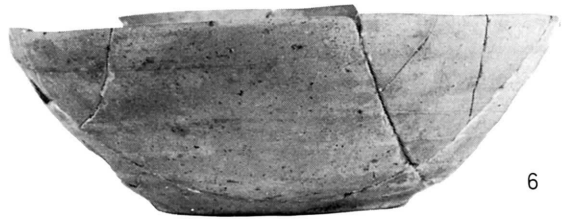
3



4



5



6

5号住居跡出土遺物

1 : 13図 1 小型甕

2 : 13図 2 内黒坏

3 : 13図 3 長頸壺

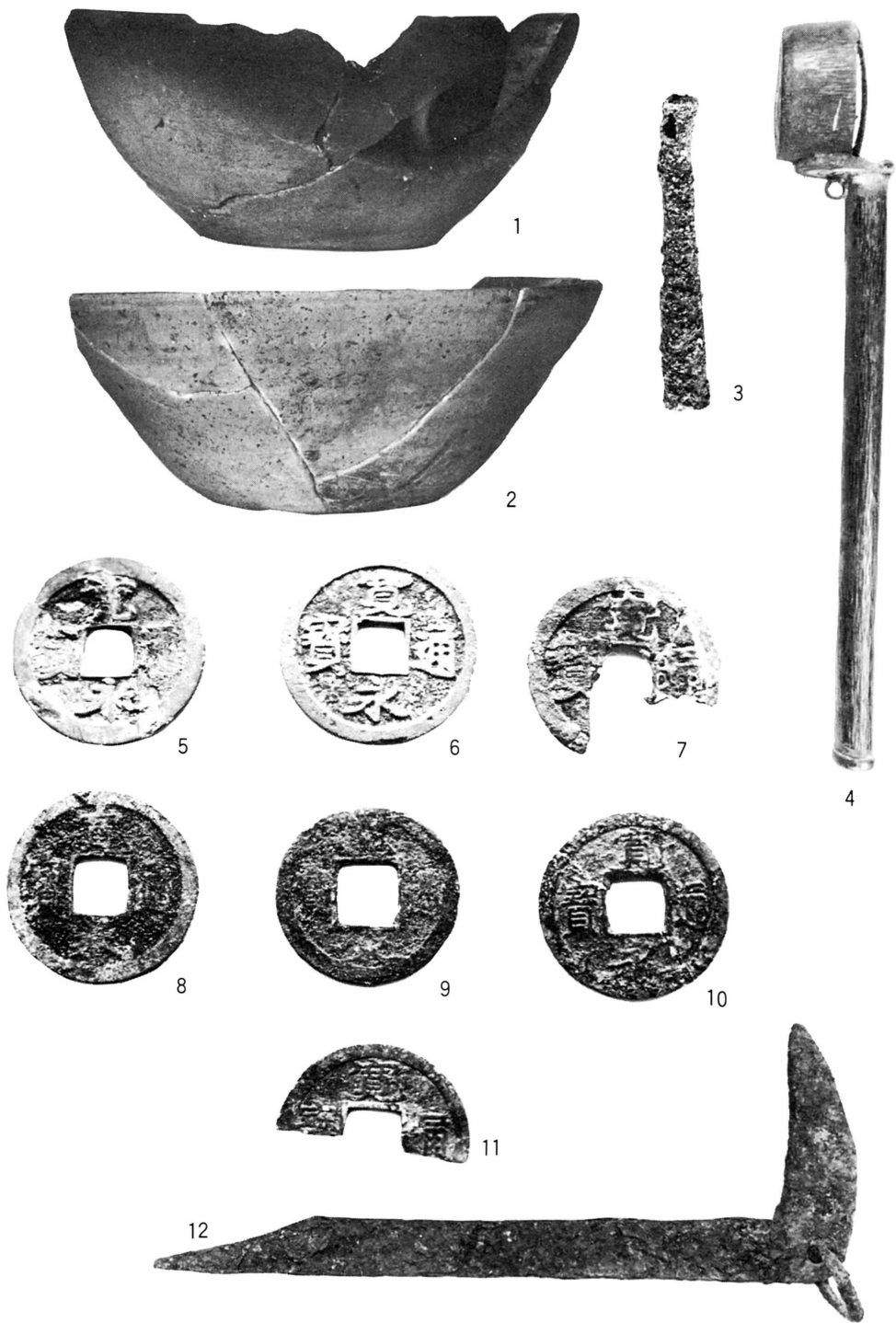
4 : 13図 4

5 : 13図 5

6 : 13図 6

} 坏A

坏B



A j 12焼土遺構出土遺物

1 : 15図 1 内黒坏

2 : 15図 2 坏B

表採等の遺物

5 : Bb 15掘立柱建物跡表採18図1

6 : Bb 15掘立柱建物跡B 4 柱穴内出土18図2

7 : 南西区南端表採18図3

8 : Ca62掘立柱建物跡柱穴内出土18図4

9 : Ca62掘立柱建物跡附近表採18図5

10 : Ca62掘立柱建物跡南端表採18図6

11 : 10と同地点表採18図7

3 : 煙管、Bb 15掘立柱建物跡西側出土

4 : 矢立、Ca62地区表採

12 : 茅葺鎌Ca62地区表採

参 考 文 献

(各県関係他)

- 函館空港第4地点 中野遺跡—函館空港拡張工事に伴う遺跡発掘調査報告書— 1977.3
- 札幌市文化財調査報告書 X 1976
- 札幌市文化財調査報告書 XII 1976 札幌教育委員会
- 札幌市文化財調査報告書 XIV 1977
- 札幌市文化財調査報告書 XV 1977
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第14集 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書—亀ヶ岡バイパス関係埋蔵文化財発掘調査— 昭和44年度 青森県教育委員会 昭 49.3
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第24集 むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報 昭和49年度 青森県教育委員会 昭 50.3
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第25集 中の平遺跡発掘調査報告書—青函トンネル資材運搬専用道路建設工事— 昭和49年度 青森県教育委員会 昭 50.3
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第26集 黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書—東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査Ⅱ— 昭和50年度 青森県教育委員会 昭 51.3
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第29集 五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡—一搬国道4号線五戸バイパス関係発掘調査— 青森県教育委員会
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第30集 白山堂遺跡・妻の神遺跡発掘調査報告書 昭和50年度 青森県教育委員会 昭 51.3
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第31集 泉山遺跡発掘調査報告書—一般道橋引上名久井、三戸線道路改良工事埋蔵文化財発掘調査 昭和50年度 青森県教育委員会 昭 51.3
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第32集 烏海山遺跡発掘調査報告書—東北縦貫自動車道青森県内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ— 昭和51年度 青森県教育委員会 昭 52.3
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集 水木沢遺跡発掘調査報告書—一般国道279号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査— 昭和51年度 青森県教育委員会 昭 52.3
- 長七谷地遺跡発掘現場見学会資料 八戸市教育委員会 昭 53.9
- 秋田県文化財調査報告書第16集 岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書 秋田県教育委員会・雄勝町教育委員会 昭 44.3
- 岩井堂岩陰遺跡発掘調査概報—第8次— 雄勝町教育委員会 1977.3
- 秋田県文化財調査報告書第39集 下藤根遺跡発掘調査概報 秋田県教育委員会 1976.3
- 秋田県文化財調査報告書第49集 鳥野遺跡発掘調査報告書 秋田県教育委員会 1978.3
- 弘田遺跡 昭和49年度発掘調査概報 弘田柵跡調査事務所年報 1974 弘田柵跡調査事務所 1975.
- 弘田遺跡 昭和50年度発掘調査概報 弘田柵跡調査事務所年報 1975 弘田柵跡調査事務所 1976.
- 弘田遺跡 —第9.10次発掘調査概報— 弘田柵跡調査事務所年報 1976 弘田柵跡調査事務所 1977.
- 野形遺跡 昭和51年度 秋田県立博物館

秋田城跡 昭和48年度秋田城発掘調査概報	秋田市教育委員会	昭 49.
秋田城跡 昭和49年度秋田城発掘調査概報	秋田市教育委員会	昭 50.
秋田城跡 昭和50年度秋田城発掘調査概報	秋田市教育委員会	昭 51.
神沢海岸遺跡	本荘市教育委員会	昭 46. 4
中藤根遺跡	秋田市考古学協会	昭 49. 3
手形山窯跡 昭和49年度	秋田市考古学協会	昭 50. 2
金ヶ崎バイパス関係 東大畑遺跡現地公開資料	(財)岩手県埋蔵文化財センター	昭 52.12
岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第1集 岩手県文化財発掘調査略報(昭和52年分)	(財)岩手県埋蔵文化財センター	昭 53. 3
岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第2集 都南村湯沢遺跡(昭和52年度)	(財)岩手県埋蔵文化財センター	昭 53. 3
岩手県大船渡市長谷堂貝塚一昭和46年度緊急調査報告一	岩手県教育委員会	昭 47. 3
岩手県文化財調査報告書第20集 陸奥国徳門城一岩手県紫波郡矢巾町所在一	岩手県教育委員会	昭 47.12
岩手県文化財調査報告書第23集 大船渡市清水貝塚発掘調査概報	岩手県教育委員会	昭 51. 3
岩手県史第1巻	岩手県	昭 36. 1
岩手県管轄地誌		
岩手県岩泉町文化財調査報告第2集 竜泉新洞遺跡発掘調査報告	岩泉町教育委員会	昭 47. 3
岩手県一関市萩荘 谷起島遺跡第一次発掘調査報告書(LOCA)	一関市教育委員会	昭 52. 9
貝島貝塚	花泉町教育委員会	昭 46.11
岩手県滝沢村 大畑遺跡一昭和48年度調査報告一	滝沢村教育委員会	昭 48.10
千厩町文化財調査報告第1集 南小梨蛇王遺跡	千厩町教育委員会	昭 53. 1
百目木遺跡発掘調査現地説明会資料 第1回～4回 岩手ビル株式会社	都南村教育委員会	昭 53. 4～9
岩手県水沢市佐倉河 胆沢城跡一昭和49年度発掘調査概報一	水沢市教育委員会	1975. 3
岩手県水沢市佐倉河 胆沢城跡一昭和50年度発掘調査概報一	水沢市教育委員会	1976. 3
岩手県水沢市佐倉河 胆沢城跡一昭和51年度発掘調査概報一	水沢市教育委員会	1977. 3
岩手県江刺市瀬谷子窯跡郡第2次緊急調査概報	江刺市教育委員会	昭 45. 3
岩手県江刺市瀬谷子遺跡	江刺市教育委員会	昭 46. 6
文化財調査報告書第11集 北上市極楽寺跡	北上市教育委員会	昭 47. 8
文化財調査報告書第17集 尻引遺跡調査報告書	北上市教育委員会	昭 52. 3
岩手県盛岡市大館町遺跡一縄文中期集落址1976年度調査報告一	岩手大学考古学研究会	1978
稿本 西磐井郡郷土史(全) 岩手県教職員組合西磐井支部編、名簿出版刊		昭 48. 7
宮城県史1. 古代・中世史	(財)宮城県史刊行会	昭 32. 1
宮城県文化財調査報告書第24集 東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(刈田郡蔵玉町地区)	宮城県教育委員会、日本道路公団	昭 46. 3

- 宮城県文化財調査報告書第25集 東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市柴田郡村町地区）
宮城県教育委員会・日本道路公団 昭47.3
- 宮城県文化財調査報告書第35集 東北新幹線関係遺跡調査報告—1—
宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局 昭49.3
- 多賀城跡—昭和47年度発掘調査概報— 宮城県多賀城跡調査研究所年報1972
宮城県多賀城跡調査研究所
- 福島県文化財調査報告書第47集 東北自動車道遺跡調査報告
福島県教育委員会・日本道路公団 昭50.3
- 福島県の土師器編年第18回福島県考古学大会シンポジウム資料 福島県考古学会 1976.3
- 千葉県中野僧御堂遺跡—千葉県東全道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告1—（千葉市中野地区）
日本道路公団・財団法人千葉県文化財センター 1976
- 加曾利貝塚Ⅱ 昭和39年度加曾利南貝塚調査報告 貝塚博物館調査資料No.2
千葉市加曾利貝塚博物館 1968
- 霧ヶ丘 霧ヶ丘調査団 1973
- 考古風土記第2号 特集東北地方北半の古代土器 1977.4
- 考古風土記第3号 特集東北地方の弥生式土器 1978.4
- 日本の三彩と緑釉 五島美術館 1974.5
- 世界考古学体系 日本Ⅰ 平凡社 昭34.6
- 日本考古学辞典 日本考古学協会編 東京堂 昭48.1
- 図解考古学辞典 水野・小林編 東京創元社 昭39.
- （個人論文）
- 阿部 義平 東国の土師器と須恵器—多賀城外の出土土器をめぐって—帝塚山考古No.1 1968.10
- 板橋・司東・佐々木 北上市稲瀬町極楽寺遺跡調査略報 北上市史第1巻 原始・古代(1) 北上市 昭43.3
- 今村 啓爾 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較 物質文化No.27 1976.10
- 伊藤 玄三 「東北」日本の考古学Ⅲ・弥生時代・河出書房新社 昭41.1
- 「〃」新版考古学講座 歴史文化<上>—弥生文化— 雄山閣 昭44.10
- 芦沢 長介 石器時代の日本 築地書館 昭47.9
- 伊藤 信雄 「東北」日本考古学講座4 弥生文化 河出書房
東北北部の弥生式土器 文化24—1 昭35
- 伊藤 博幸 岩手県の古代土器生産について—須恵器とロクロ土師器の素描—岩手史学研究No.61
岩手史学会 昭51
- 伊藤 鉄夫 水沢の歴史—平安以前— 昭44.7
- 伊藤 陽夫 長坂下遺跡出土の合口土器について 岩手史学研究第47号
- 氏家 和典 東北土師器の型式分類とその編年 歴史14輯

- 陸奥国分寺出土の丸底杯をめぐって－奈良・平安朝土師器の諸問題－柏倉亮吉教授還暦記念論文集山形県の考古と歴史 山教史学会 1967
- 江坂 輝弥 青森県下北郡東通村尻屋・物見台遺蹟調査報告－東北日本田戸住吉町系文化遺蹟調査報告第1編 考古学雑誌27
- 大場 利夫 小幌洞窟 北方文化研究報告第18輯
- 加藤 稔 山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化
- 加藤 孝 塩釜市表杉ノ入貝塚の研究 宮城学院大学研究論文集 1954
- 菊池・桜井・玉口 北上市二子町秋子沢遺蹟調査報告(第1・2次) 北上市史第1巻原始・古代1) 北上市 昭43.3
- 菊池啓治郎 和賀町史－考古編－ 和賀町 昭52.9
- 工藤 竹久 北日本の石槍・石槍について 北奥古代文化第9号
- 桑原 滋郎 東北地方北部および北海道の所靖第I型式の土師器について 考古学雑誌第61巻4号 1976.3
- 桑原・岡田 多賀城周辺における古代杯形土器の変遷 研究紀要I 宮城県多賀城跡調査研究所
- 工藤・桑原 東北地方における古代土器生産の展開 考古学雑誌第57巻第3号 昭47.2
- 草間 俊一 「先史期」盛岡市史第1分冊の1 総説・先史期 盛岡市
- 草間・吉田・武田 盛岡市熊の沢一本松遺蹟調査報告 郷土資料写真集第10集
- 草間・伊藤 胆沢村宮の沢原・大清水上遺蹟 胆沢町教育委員会 昭38.4
- 草間・相原 天神カ丘遺蹟 大迫町教育委員会 昭49.3
- 後藤 勝彦 陸前宮戸嶋里浜台囲貝塚出土の土器について－陸前地方後期縄文式文化の編年的研究－考古学雑誌第48巻第1号
- 小岩 末治 岩手県内陸の早期縄文式土器 岩手史学研究19 1950
- 齊藤 良治 陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について 仙台湾周辺の考古学的研究宮城県の地理と歴史第3集
- 佐藤 禎宏 八森遺蹟－第1次・第2次発掘調査報告－庄内考古学第15号 庄内考古学研究会 1978.5
- 佐藤・渡辺 青森県上北郡出土の早期縄文土器 考古学雑誌第43巻3号
- 須藤 隆 秋田県大曲市宇津台遺蹟の弥生式土器について 「文化」第33巻第3号 昭45.2
- 青森県大畑町二枚橋遺蹟出土の土器・石器について 考古学雑誌第56巻第2号 昭45.12
- 土器組成論 考古学研究 19－4
- 杉原・大塚 千葉県天神前における弥生時代中期の基址群 明治大学文学部研究報告考古学第4冊 明治大学 昭49.
- 芹沢・林 岩手県蛇王洞洞穴 石器時代第7号 昭40.10
- 富樫 泰時 トランシエ様石器について 東北考古学の諸問題 東北考古学会 1976.10

岩手県教育委員会事務局文化課職員一覧

(埋蔵文化財関係)

文化課長 菅原 一郎 技 師 佐々木 勝

課長補佐(総務) 小野寺 昭 吾

課長補佐(調査) 小野寺 登

庶務係長 加藤 勝 男

主 事 鈴木 喜代治

主 事 佐藤 伸一郎

主任文化財主査 嶋 千 秋

文化財主査 菊地 郁 雄

技 師 国生 尚

縦貫自動車道

臨時職員 中村 清也

千葉 周 秋

鈴木 明 美

菊池 茂 樹

佐藤 章 夫 (53年12月退職)

一條 敬 子

湊原 悦 子

亀ヶ森 恭 子

小西 エイ子

木村 キエ子

潮田 弘 子

永田 靖 子 (53年12月退職)

相星 輝 子

高橋 生 子

藤原 周 子

中村 千 世 (53年11月退職)

桜井 芳 彦

縦貫自動車道

文化財主査 吉田 努

三上 昭

斉藤 淳

島 隆

社会教育主事補 昆野 靖

相原 康二

八重樫 良宏

狩野 敏男

吉田 義男

小平 忠孝

主 事 石川 長喜

新幹線

文化財主査 菅原 弘太郎

細谷 英男

朴沢 正耕

社会教育主事補 鈴木 隆英

岩手県文化財調査報告書第31集
東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 I

昭和54年3月30日 発行

発行 岩手県教育委員会
盛岡市内丸10-1

印刷 株式会社熊谷印刷
盛岡市上田一丁目6-49 ☎(53) 4151
